

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Inches 1 2 3 4 5 6 7 8
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak



Blue

Cyan

Green

Yellow

Red

Magenta

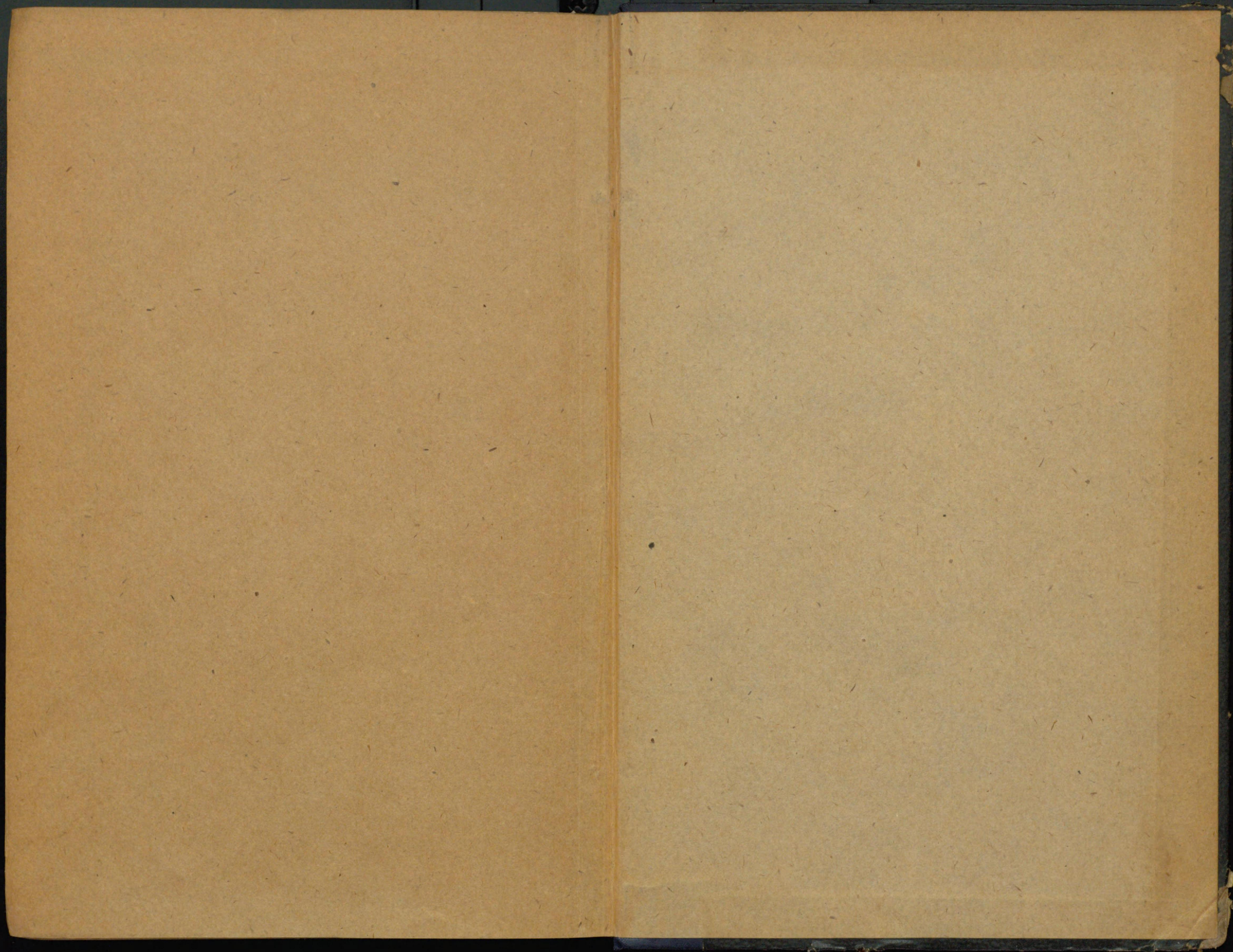
White

3/Color

Black

615
1

別書誌
合之冊



615-1



1200501535733

615-1

東洋史講座

昭和五年一月十日發行

第六卷

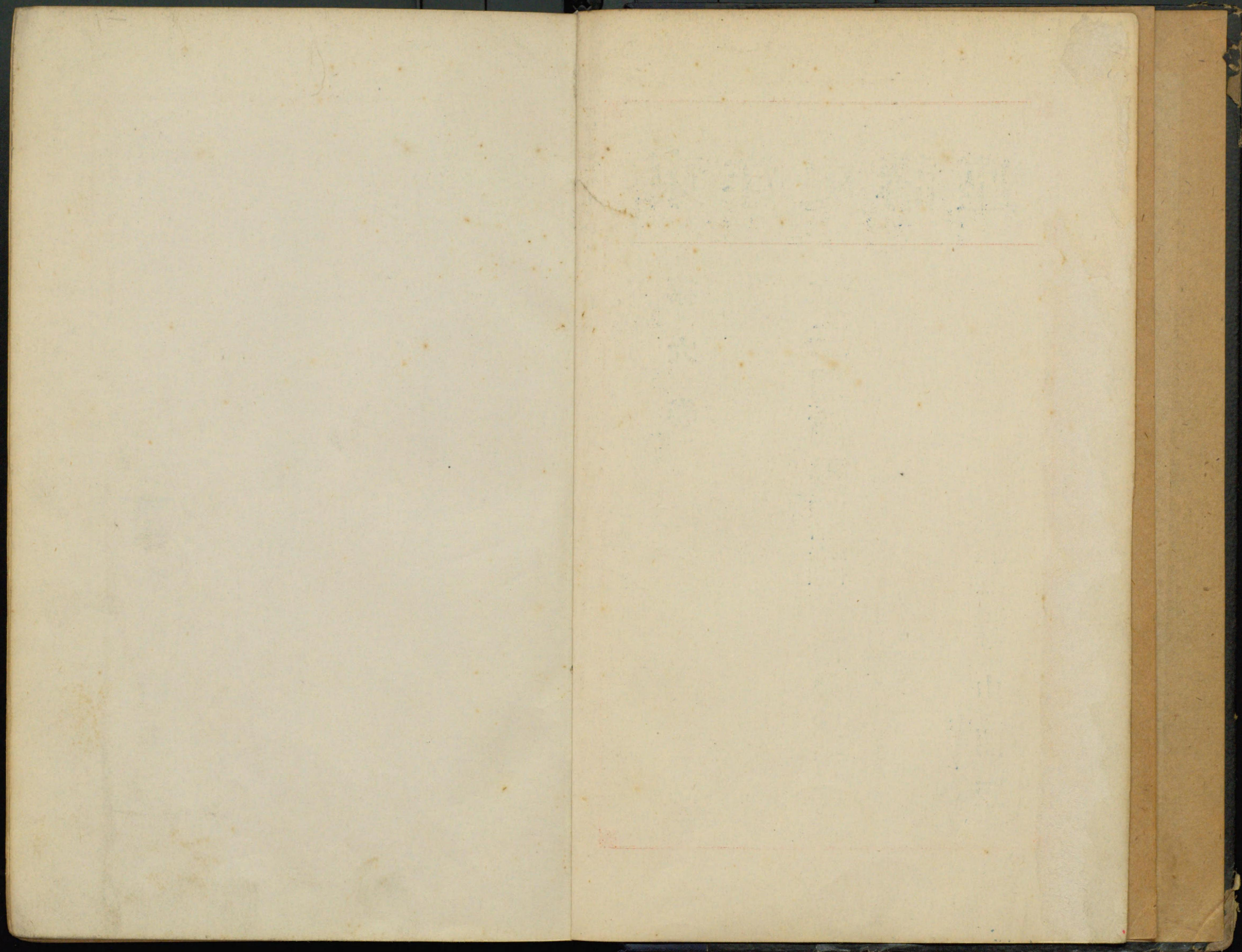
第三期前編

盛蒙
衰古
時民
代族

高桑駒吉著

東京
神田
雄山閣
版





第三期前編

蒙古民族
盛衰時代

高桑駒吉著

東洋史講座

第六卷

東京
神田
雄山閣
版

第三期前編

蒙古民族
盛衰時代

高桑駒吉著

東洋史講座

第六卷

東京
神田
雄山閣
版

善い事、善くない事、種々の意味に於て兎角多事であつた昭和四年も、今や旬日ならずして將に逝かうとして居る。追思、感慨も亦少くない。此間に於て我等の東洋史講座も今回第三回會員を募集するの好評を博し得、而して今回は新に講師諸賢を加へて益々内容、規模を善且つ美ならしめたのは、聊か加盟會諸君の好意に報ひたることとして、やゝ意を安んじ且つ喜んで居る次第である。

斯の如き時に當り、本講座第三期講師としての高桑駒吉君がもはや故人となられ、幽明境を異にして、此喜びを共にすることの出来ないのは、本講座主任として特に遺憾に思ふ所である。茲に同君在天の靈に敬意を表して本講座の發展を報告すると共に、遺憾の意を表したいと思ふ。

次に第三期補講については、東京高等師範學校教授兼東京文理科大學講師有高巖君を迎へたことを同君の靈に報告する。同君の學殖精深、經驗豊富なることは、今更いふまでもない。是れは會員諸君にも喜んで戴きたいと思ふ。

昭和四年十二月二十三日冬至後第一日

中山久四郎識

東洋史講座第三期前編(蒙古民族盛衰時代)目次

第一篇 元時代

第一章 蒙古の勃興 元の太祖	一一四
蒙古の起原	一
蒙古の勃興	三
漠の南北征服	四
西夏の侵伐	五
金の侵伐	六
西遼の滅亡	八
西遼の世系	八
花剌子模の盛衰	九
太祖の西征と花剌子模の滅亡	一〇
蒙古軍の露西亞侵入	一一
子弟の分封	一二

第二章 太宗の南伐拔都の西征

宋金四夏の關係……………一三三

西夏の滅亡……………一三三

西夏の王系……………一四一

太宗の金討滅……………一五二

金の帝系……………一七

宋元の攻戰……………一七

高麗の降服……………一八

波斯の征服……………一九

蒙古の奠都……………二二

拔都の西征……………二三

欽察汗國の建設……………二五

第三章 憲宗の南伐 旭烈兀西征……………二八―五四

定宗の即位……………二八

大汗嗣立の争と憲宗の即位……………二九

大理の降服……………三二

第四章 世祖の一統及び外征

南詔及び大理の王系……………三三

吐蕃の降服……………三五

交趾の征伐……………三六

憲宗の南征……………三六

阿里不哥の亂……………三八

旭烈兀の西征……………四七

アッバス朝の討滅……………四七

アッバス朝の世系……………五〇

伊兒汗國の建設……………五二

迷思耳軍の侵入……………五四

世祖の一統及び外征……………五五―六七

宋の討滅……………五五

宋の帝系……………五八

元の東侵……………五九

緬國の征服……………六三

占城安南の征服……………六四

瓜哇征伐……………六五

海外諸蠻の服屬……………六五
 蒙古帝國の最大版圖と統治法……………六六
 蒙古帝國の領土擴張表……………六七

第五章 世祖の治海都の亂……………六八―七七

世祖の治績……………六八
 世祖の失敗……………七〇
 海都の亂の原因……………七二
 叛亂の初期……………七二
 叛亂の中期……………七三
 叛亂の後期……………七六
 亂の鎮定……………七七

第六章 元の治亂 大臣の專恣……………七八―八六

元室衰亡の原因……………七八
 西南夷征討……………七九
 武宗仁宗の更立……………八〇
 鐵木迭兒の專恣……………八一

鐵失の弑虐……………八二

燕帖木兒の謀逆と專恣……………八三

伯顔の專橫……………八五

第七章 群雄の興起 元の滅亡……………八七―九八

群雄の興起と爭亂……………八七
 朱元璋の強盛……………九一
 元の内訌……………九二
 元の滅亡……………九四
 元の帝系……………九五
 蒙古諸汗系統……………九六

第八章 元時代の文化 東西の交通及び貿易……………九九―一三二

概観……………九九
 元の官制……………一〇一
 元の兵制……………一〇三
 元の法制……………一〇四
 元の税法……………一〇五
 元の交鈔……………一〇五

元の選舉制	一〇六
元初に於ける外國人任用の例	一〇七
元の學制	一〇九
蒙古文字	一一〇
元の儒學	一一一
元の詩文	一一二
○元の戯曲及び小説	一一三
元の史學	一一七
元の科學	一一八
元の道教	一二〇
○元の喇嘛教	一二一
元のイスラム教	一二二
元の基督教	一二三
元の音樂及び書畫	一二五
元の農業	一二六
元の商工業	一二七
元の遭運	一二七

第九章 蒙古四大汗國の盛衰

元時代の東西交通及び貿易	一二八
窩濶台汗國の滅亡	一三三
窩濶台汗の世系	一三四
察合台汗國の盛衰	一三四
察合台汗の世系	一三六
伊兒汗旭烈兀の晩年	一三七
阿八哈の事蹟	一三九
阿魯渾の篡立	一四一
合贊の治	一四二
ウルジャイツと不賽因	一四四
伊兒汗國の未路	一四五
蒙古時代に於ける波斯文學	一四六
伊兒汗の世系	一四七
欽察汗別兒哥及び忙哥帖木兒の事蹟	一四八
月即別及び札尼別の治	一五〇
金帳の分裂	一五三

トクタミシと帖木兒	一五四
金帳汗國の末路	一五七
欽察汗の世系	一五七
第十章 元時代の高麗	一六〇—一六七
元と高麗との關係	一六〇
高麗の儒學	一六五
高麗の文藝	一六五
高麗の佛教	一六七
第十一章 印度の形勢	一六八—一八二
イスラム教徒の印度侵入	一六八
阿富汗人の侵略	一六八
奴 隸 朝	一七〇
奴隸朝の世系	一七二
キ ル ジ 朝	一七二
キルジ朝の世系	一七四
ツ グ ラ ク 朝	一七五
ツグラク朝の世系	一七七

文學及び科學の勃興	一七七
言語及び文學の變化	一八〇
宗教の變遷	一八三

第二篇 明時代

第十二章 明の太祖の一統	一八三—一九一
太筋の一統と外征其の一	一八三
太祖の一統と外征其の二	一八五
明の太祖の治績	一八六
明初の封建	一八七
明初の封建表	一八八
文字の獄	一八八
胡惟庸の獄	一八九
藍玉の獄	一九〇
第十三章 成祖の遠略	一九二—一九五
靖難の役の原因	一九二
靖難の役	一九五

成祖の纂立……………一九五

安南の征服……………一九五

安南の王系……………一九七

南海諸國の朝貢……………一九八

成祖の北伐……………一九九

第十四章 高麗朝鮮の興亡 元末明初の倭寇……………二〇二

高麗の衰微……………二〇二

高麗と北元及び明との關係……………二〇三

高麗の滅亡……………二〇五

高麗の王系……………二〇六

朝鮮の興起……………二〇七

高麗及び朝鮮の倭寇……………二一〇

明初の倭寇……………二二二

第十五章 帖木兒朝の盛衰……………二二四

帖木兒の興起……………二二四

中西亞細亞及び伊兒汗國の征服……………二二六

欽察汗國及び露西亞侵入……………二二七

印度侵入……………二一九

オスマンリ土耳其との衝突……………二一九

支那遠征……………二二二

帖木兒の治署……………二二三

帖木兒朝の分裂と沙哈魯の一統……………二二四

兀魯伯とト撒因……………二二六

帖木兒朝の末路……………二二七

帖木兒朝の世系……………二二八

第十六章 宣宗孝宗の治 瓦剌韃靼の入寇……………二三〇

漢王高煦の叛と宣宗の治……………二三〇

王振の専恣……………二三一

瓦剌の入寇と土木の變……………二三五

英宗の復位……………二三五

汪直の専横……………二三六

哈密の興復……………二三七

瓦剌の衰亡……………二三九

蒙古の分裂……………二四〇

達延の入寇……………二四一
 孝宗の治……………二四二

第十七章 朝政の紊亂 蒙古の侵寇

劉瑾の跋扈……………二四三
 安化王眞鐸の叛……………二四四
 江彬の專恣……………二四五
 寧王宸濠の叛……………二四六
 大禮の議……………二四七
 嚴嵩の專橫……………二四九
 俺答の入寇……………二五一
 俺答の歸服……………二五三
 韃靼(北元)汗世系……………二五四
第十八章 交趾の叛服 倭寇の盛衰……………二五六—二六八
 大越の盛衰……………二五六
 莫氏の立篡と安南の分裂……………二五七
 大越の王系……………二五八
 莫氏の世系……………二五九

緬甸の形勢……………二六〇

暹羅の形勢……………二六一

日明の交通……………二六四

倭寇の盛衰……………二六五

第十九章 萬曆朝鮮の役 滿洲の興起

明及び朝鮮の疲弊……………二六九
 第一朝鮮の役……………二六九
 第二朝鮮の役……………二七二
 朝鮮役の結果……………二七三
 清の太祖の興起……………二七四
 愛新覺羅氏世系……………二七六
 明清の衝突……………二七七
第二十章 東林の黨議 明の衰微……………二八〇—二八七
 東林の黨議の起原……………二八〇
 黨派の爭……………二八一
 挺擊の案……………二八二
 紅丸の案……………二八三

移宮の案……………二八四

魏忠賢の横暴……………二八五

第二十一章 流賊の蜂起 明の滅亡……………二八八—二九八

礦税の害と流賊の蜂起……………二八八

張獻忠李自成の蜂起……………二八九

明の滅亡……………二九二

明の帝系……………二九三

清の太宗の経略……………二九四

世祖の侵略と李自成の滅亡……………二九六

目次終

東洋史講座

第三期 前編 蒙古民族盛衰時代

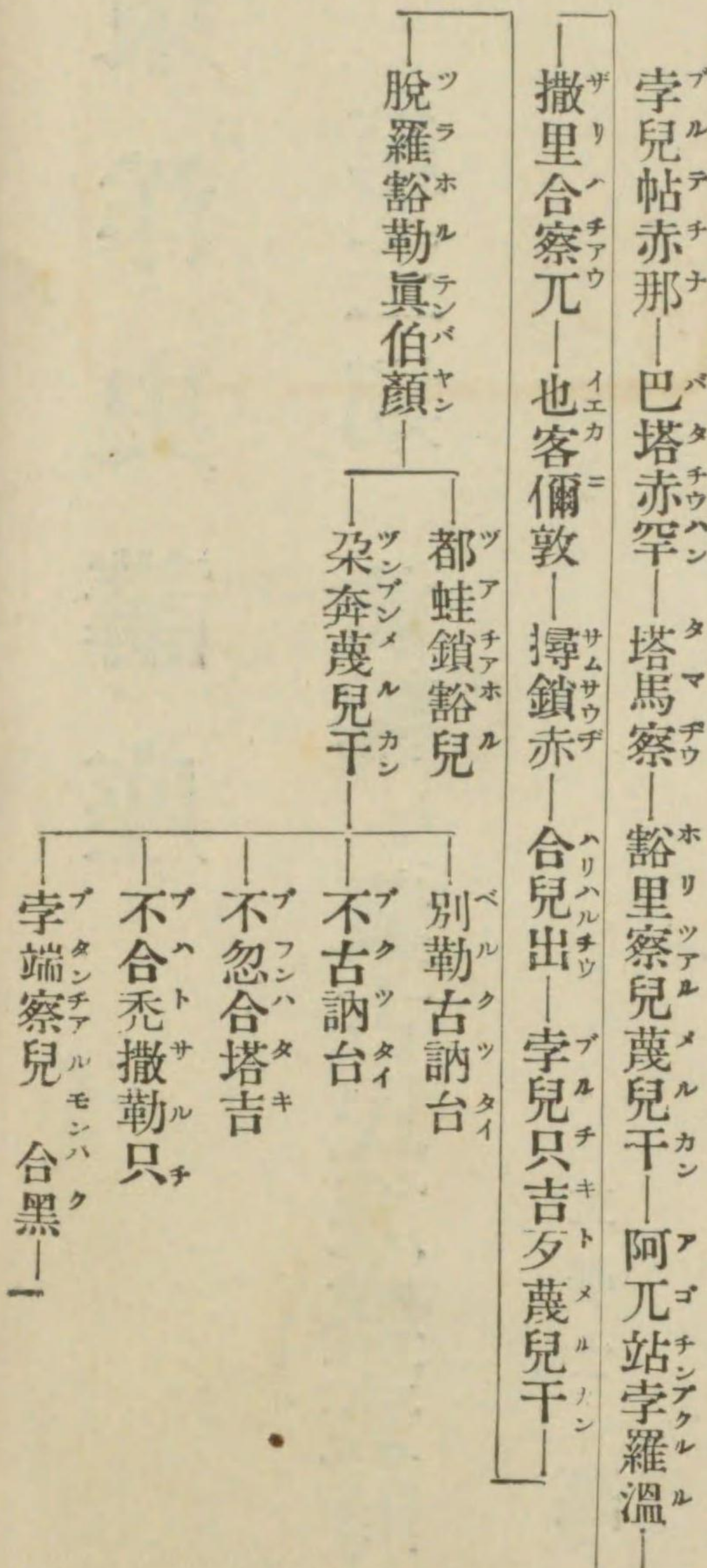
文學士 高桑駒吉 著

第一篇 元時代

第一章 蒙古の勃興 元の大祖

蒙古の起原 蒙古 (Mongol) は唐の世に契丹 (Khitan) の北方に散處せる室韋諸部の一なる蒙兀の後である、而して舊唐書に蒙兀といひ、新唐書に朦瓦といひ、遼史に盟古、萌古といひ、金史に盟古といひ、契丹事迹に蒙古といひ、松漠紀聞に盲骨子といひ、元朝秘史に忙豁勒といひ、邱處機の西遊記に蒙古といふて居るのは皆モンゴルの對音であるが、蓋し明の初め元史を修めたる時に蒙古の二字を

沿用するに至り、始めて定稱となつたのであらう。蒙古はもと斡難(Oaon)、怯緑連(Kerulen)兩河の源なる不兒罕(Bul Khan)山即ち今の肯特山の一支必爾喀嶺の邊に遊牧し、世々遼及び金に隸屬して居たが、其の部會合不勒(Khabuluk)の時に金の撻懶の遺族を助けて兀朮の軍を破り、一一四七年金と和し金は怯緑連以北の二十七團寨を蒙古に割讓し、且つ毎年牛羊米豆を贈ることを約したから、是に於て合不勒は始めて汗(Khan)と稱し、其の子孫は乞顏(Kiyam)氏と號したのである。合不勒汗以前の事蹟は荒唐無稽の傳説が多くして殆ど信用し難いから、元朝祕史によりて其の系譜のみを掲載して置く。



合必赤把阿禿兒 — 蔑年土敦 — 合赤曲魯克 — 海都
 伯升忽兒多黑申 — 屯必乃薛禪 — 合不勒可汗
 察刺合領忽 — 想昆必勒格 — 俺巴孩
 抄眞幹兒帖該
 把兒壇把阿禿兒 — 也速該把阿禿兒 — 帖木眞 — 成吉思汗

蒙古の勃興 蒙古は合不勒の孫也速該(Yesugay)に至り傍近の諸部を併呑して頗る強大となつたが、後塔々兒(Tartar)部の爲めに殺され、其の諸子が皆幼少であつたから部衆は皆離散し、其の支族泰赤烏(Tajut)部に附くものが多かつた。也速該の妻訶額倫(Hoelun)は賢明にして勇敢なる婦人であつたから、時に年僅に十三歳なる長子帖木眞(Temuchin)を立て、部長となし、離散せる部衆の一半を歸服せしめたといふことである。帖木眞は長ずるに及んで雄才大略あり、深く其の部下を愛し厚く勳功を賞したから、名聲日々に盛になり來り従ふもの漸く多くして兵勢また大に振ふに至つた。當時蒙古の近隣には塔々兒、泰赤烏、札只刺(Tajrat)、乃蠻(Naiman)、蔑里乞(Merkit)、克烈(Kerit)等の諸部があり、其の強盛なるものは塔々兒、克烈、乃蠻の三部であつて塔々兒は北境に逼り、克烈は南境に據り、乃蠻は西境に接し、帖木眞は其の中央にありて未だ志を得なかつたが、既

にして先づ強敵泰赤烏を破るに及び、微弱なる諸部族は其の威に恐れて來り降るに至つた。後塔々兒の金に叛くや金は兵を發して之を伐ち、且つ近隣の諸部族に命じ兵を率ゐて來り會せしむるに及び、帖木眞もまた兵を發して金軍に會し大に塔々兒の軍を破つたから、金は帖木眞を察兀忽魯(百夫長)に任じた。會々克烈部長汪罕(Wangkhan)が其の弟に逐はれて西遼に遁れたが、西遼の援助を得る能はずして流寓して居たから帖木眞は憐んで之を助け、遂に汗位に復せしめ共に締盟して一一九六年蔑里乞を撃破し、次で乃蠻の内訌に乗じて兵を加へ、また一二〇二年塔々兒を伐つて大に之を破つた。是に於て諸部族は多く帖木眞に歸し、一二〇三年之を推して蒙古諸部の長となし成吉思汗(Chingis Khan)と號した、蓋し強大なる君主の義である。

漢の南北征服 是の如く成吉思汗の勢力が強盛になつたから、乃蠻及び衛拉特(Warat)の二部は塔々兒と同盟して力を協せ、成吉思汗を襲はんと謀りて軍を進めたるも、機を失ひ利あらずして歸つた。既にして汪罕もまた成吉思汗の強盛なるを嫉みて隙を生じ、汪罕は遂に成吉思汗を襲うたが成吉思汗親ら兵に將として克烈を伐ち、大に之を破つたから汪罕は乃蠻の境上に遁れ其の殺す所となつた。是に於て乃蠻の部長太陽汗(Tayan Khan)は成吉思汗の勢益々盛なるを憂ひ、衛拉特及び蔑里乞の餘衆を糾合し、遙に塔々兒と結びて成吉思汗を夾撃せんとしたるに、成吉思汗は機先を制して一二

〇四年杭海山(Khangai)今の杭愛山に逆撃して大に之を破り太陽汗を擒殺したから、其の子曲出律(Kuchuluk)は蔑里乞の部長脱脫(Tuktai)と共に遠く西に遁走した。成吉思汗は更に塔々兒を伐つて悉く其の部衆を服し、漢の南北即ち内外蒙古の地は殆ど成吉思汗に歸するに至つたから、一二〇六年西夏を襲ひ其の財貨を掠奪して歸るや、諸部の君長を幹難河の源に招集してフルタイ(Kurtaï)と稱する大聚會を開き、九旒の白旗を建て、大汗の位に即いた、是れ即ち元の太祖であつて時に年四十五歳、實に一二〇六年十二月である。

西夏の侵伐 是より先き西夏は其の主李乾順の時宋が金に破られて困しむに乗じ、金の太宗と同盟し頻に兵を出して邊境を開き、是より金に臣事してまた宋の封冊を受けなかつた。後乾順が死して内亂起るや外戚任得敬が乾順の子仁孝を擁立して之を鎮定し、功を以て相となり政を專にすること二十餘年に及び、陰に異志を蓄へて國を篡はんと圖り、宗親大臣を誣殺し遂に仁孝を脅して使を金に遣はし、國を分ちて得敬に與へんことを請はしめたるも、金の世宗は之を許さず却て仁孝に命じて得敬を誅せしめたから、西夏は之を徳として益々金に臣事して居たが、仁孝の子純祐の時に至り蒙古の攻むる所となりて兵政共に衰ふるに至つた。かくて蒙古は太祖既に漢の南北を討平するや、一二〇五年南侵して西夏を伐ち其の北邊の力吉里寨、經落思城等を抜き大に人民を掠めて還つたが、既にして純

祐は其の従弟安全の爲めに廢せられ、安全が自立して西夏は大に亂れたから太祖は此の機に乗じて屢々之を侵し、一二〇九年遂に靈州に侵入するに及び安全は大に恐れ女を納れて降を請ふた。太祖既に西夏に克ち威望傍近を壓するに及び畏兀兒(Uigur)、柯耳魯(Karluk)の二部もまた風を望んで來り服したから、天山附近より伊犁(III)河流域一帯の地は悉く其の版圖に入るに至り、是に於て全力を擧げて金に向つたのである。

金の侵伐 金は章宗の時から國勢頗る衰へ羈屬往々叛くものあり、章宗が死して其の叔父廢帝允濟が立ち、柔弱にして將士の心を失ひ國勢大に衰へたから、太祖は之に乗じて一二一〇年南伐の軍を起し、進んで直隸山西を席捲し長驅して居庸關に迫り、尋で將を遣はして遼東を取り自ら西京を攻めたるも抜く能はず、一二一一年また金を攻めて紫荆關を破り古北口を取り、遂に居庸關を抜きて燕京に迫まつたから、金の大臣胡沙虎等は其の主允濟を廢して章宗の庶兄宣宗を擁立し、蒙古軍を防がんとしたるも兵勢挫折して如何ともする能はず、既にして胡沙虎は成虎高琪の殺す所となつたから、太祖は燕京を圍み悉く金の河北河東九十餘郡を下して金帛子女牛羊馬畜を掠めた。宣宗は窮蹙して爲す所を知らず遂に允濟の女及び童男女金帛各五百、馬三千を納れて和を請ひ、太祖は之を諾して居庸關を出で虜にせる所の男女數十萬人を殺して北に還つた。然るに宣宗は燕京が蒙古に近く且つ兵弱くして

財乏しきを以て之を守るに能はざるを知り、群議を排して都を汴京に遷したから太祖は己を疑ふものとなし、また南侵を圖り其の將明安(Mingan)を遣はして燕京を圍ましめ、一二一五年之を陥れて守將完顔承暉を殺し、宮室を焼き人民を殺戮した。此の役に遼の遺族であつて金に仕へて居たる耶律楚材が蒙古に降り、是より任用せられて太祖の爲めに贊畫する所が甚だ多かつたのである。次で太祖は更に撒沒哈(Samkha)をして西方から潼關を攻めしめたるも抜く能はず、よりて關南から汝州に出で汴京の近傍に進み、戦利あらずして陝州に退いたが、然かも黄河以北の地は悉く蒙古に沒したのである。時に金は和を請ひたるも遂に成らなかつたが、會々蒙古に内亂が興つたから太祖は北に還り、蔑里乞部を驅逐し禿馬特(Tumat)部及び吉里吉思(Kinghis)部を鎮撫し、次で西征の議を決したから木華黎(Mukhali)を遼東より召還し、太師となし王爵を授け征金の都督となして「大行の北は朕自ら經略す、大行の南は卿其れ之を勉めよ」といひ、併略の擧を完くせんことを托して遊牧の兵二萬及び遼人と金人とを以て編制せる軍を附し、親ら大軍を率ゐて兩征の途に就いた。此の間金は蒙古軍の退くに乗じて河北の地を復したが、一二一七年木華黎がまた侵入し來りて之を略したから、宣宗は使を遣はして和を請へるも木華黎は聽かずして濟南に入り東平を陥れ黄河を渡りて西し、西夏の兵五萬を併せて延安を攻め鄜延等を侵し是より後數年の間戦争が絶えなかつたが、一二二三木華黎の死する

に及びて侵寇は暫く中止されたのである。

西遼の滅亡 曩に太祖の乃蠻を滅ぼすや太陽汗の子曲出律は蔑里乞部長脱脱と共に也兒的石(Altai)河畔に奔り、後共に東進して蒙古を伐つたが太祖の破る所となりて脱脱は戦死し、曲出律は遁れて西遼に投じた。時に西遼は德宗の孫直魯克(Djilka)が位にあり、曲出律を納れて之を款待し妻はすに其の女を以てし國政に與からしめた。然るに西遼は既に衰微して羈屬また往々離叛するものがあつたから、曲出律は機を窺ひ花刺子模(Khorasm)王ムハメッド(Muhammed)と謀りて内外相應じ、一二一年直魯克の出獵せるを窺ひ兵八千を伏せて之を擒にし、シール(Sihir)河を界として西遼の地を分割したから、西遼は五代八十七年にして亡びたのである。是に於て曲出律は父の讎を報ひんと欲し、蒙古が金を伐ちて西顧の暇なきに乗じて柯耳魯を破り畏兀兒を伐ち、進んで蒙古の虚を衝かんとしたから太祖は哲別(Chiebo)を遣はして之を撃破せしめ、曲出律は奔りて巴答哈備(Badakshan)に至りて殺され、西遼の故地は大半蒙古に入り、蒙古は遂に花刺子模と境を接することとなつたのである。

西遼の世系 (五代、八十七年)

德宗¹天祐帝耶律大石² — 仁宗³紹興帝夷列 — 天禧帝直魯克⁵
二四七 二六九—二二二
 承天太后普速完⁴
二四五

感天皇后塔不煙²
二四一

花刺子模の盛衰 花刺子模はもと西遼に臣事して居たるが、一二〇〇年ムハメッド其の主となるに及び深く西遼に歳幣を納るゝを恥ぢ、曲出律に應じて遂に西遼を滅ぼしシール河以南の地を取りて始めて獨立を完うし、次でマヴァール・ウン・ナール(Mavar un Nahr 河間の地の義)即ちトランス・オクサナ(Trans Oxana)を襲つて其の主オスマン(Osman)を殺し、撒麻耳干(Samarhand)を奪ひて茲に都し、更にゴール(Ghor)朝の内亂に乗じて阿富汗斯坦(Afghanistan)に入り、一二一五年全く之を平定したから、其の版圖東は印度河(Indus)より西はカスピ海(Caspian Sea)に至り、北はシール河より南は波斯灣に達して國勢一時隆盛を極めた。會々八吉打(Bagdad)の哈利發(Khalifa)ナシル・ウッヂン(Nasir ud-din)が自己の權威を強めんと欲し、ゴール朝に勸めて共に花刺子模を夾撃せんと圖りたるも果さなかつたが、ムハメッドはゴールを陥れたる時其の文書を發見して大に怒り、一二一七年哈利發を廢立せんとし親ら兵を率ゐて八吉打に向つたが、途にして大雪に苦しみまた土寇の起るに遭ひ、志を達する能はずして還り兵氣大に沮喪するに至つた。加ふるに當時花刺子模の國內には宗派の

争が絶えずして統一を缺き、またムハメッドの母ツルカン可敦 (Turkan Katun) はカスピ海の北岸に住める土耳其族の康里 (Kandli) 部の人であつて多く同郷の人士を任用し、權勢を振ふたからムハメッドの勢力は甚だ薄く、國內は之が爲めに統一を缺いて居た、故に一たび蒙古軍の侵撃を受くるや忽ち土崩瓦解するに至つたのである。

太祖の西征と花刺子模の滅亡 蒙古と花刺子模と境を接するに及び太祖は花刺子模を取る志あり、會蒙古の隊商が花刺子模の國境訛打刺 (Oghat) に至りて其の知事の爲めに殺され且つ財貨を掠められたから、太祖は使を花刺子模に遣はして之を詰らしめたるに、ムハメッドは其の一人を斬り一人を凌辱して追ひ歸した。是に於て太祖は花刺子模侵伐の口實を得て西征の議を決し、木華黎に命じて専ら金の征伐に當らしめ、一二一八年親ら大軍を率ゐて其の四子朮赤 (Djuchi)、察合台 (Chagatai)、窩濶台 (Ogatai)、拖雷 (Tului) 及び將軍哲別、速不台 (Sukhai) 等と共に西征の途に就き、也兒的石河源の地より阿力麻里 (Almalik) に至りて畏兀兒及び柯耳魯の衆を併せ、一二一九年の末訛打刺に達して花刺子模の境に入り、是より全軍を四分して進み到處を侵掠して一二二〇年不花刺 (Bokhara) を陥れ、次で撒麻耳干を陥れて殘忍なる掠奪と破壊とを極めたのである。是より先きムハメッドは蒙古軍のマヴァール・ウン・ナールに入れるを聞きて其の敵せざるを知り、退いて那黑沙不 (Nakhshab) に向ひ將相

を會して軍國危急の大事を議するや、ムハメッドの長子札蘭丁 (Djalal ud-din) は建議して敵をアム (Amu) 河に禦がんと請へるも行はれず、切齒扼腕自ら留まつて敵と戦はんと請ひ泣いて苦諫したが、ムハメッドは遂に聽かずして巴里黑 (Balk) に赴きたるも既にして哲別及び速不台の追蹶する所となり、八吉打に遁れんとして得ず遂にカスピ海の一孤島に入り、一二二一年二月病んで死んだ。一二二一年太祖は進んで那黑沙不の近傍に至り、朮赤は花刺子模の舊都玉龍傑赤 (Yulghandi) を陥れたが、此の時札蘭丁が其の封地呼羅珊に赴き更に哥疾寧 (Ghazni) に入りて兵を募るを聞き、拖雷を遣はして之を討たしめ、太祖は忒耳迷 (Terned) 及び塔里干 (Talekan) を下し、拖雷は尼沙不耳 (Nishapur) を抜き進んで哈烈 (Herat) を下して太祖の軍と合した。時に札蘭丁は蒙古の前軍を破つたが諸將相和せずして去るものあり、太祖が來り伐つを聞き遂に敵すべからざるを知りて印度河畔に退き、太祖は追撃して之を破つたから札蘭丁は甲を脱して印度河に投じ泳いで遁れた。太祖は之を追うて河岸に至り蒙古兵が河に投じて之を捕へんとせるを止め、顧みて諸子を招き之を見せしめて「嗚呼是れ卿等の龜鑑なり、是の如き子の父たるものまた幸ならずや」といふたといふことである。札蘭丁は遂に河を渡り泳ぎ従ふもの四千人を合せてデリー (Delhi) に向つて奔り、奴隸王朝の主アルタムシ (Altamush) に頼つた。太祖は更に八刺 (Bala) をして之を追はしめたるも暑氣の甚しきに堪へず、ムルタン (Mulkhan) へ

ラホール (Lahore)、ペシヤワル (Peshawar)、メリクプル (Melikpur) を抄掠して引き還つた。是に於て太祖は印度河に沿うて軍を旋し、印度、西藏を経て蒙古に還らんとしたが道路の險難なるを以て止め更に不花刺に向ひて一二二三年撒麻耳干に達し、翌年遂に歸途に就きて一二二五年遂に蒙古に歸つたのである。

蒙古軍の露西亞侵入 此の間哲別及び速不台の二將はムハメッドを追躡して寛田吉思海 (Kan Den-
sis) 即ちカスピ海の西岸に至り、西伯利亞 (Siberia) の西南部に住する土著族の欽察 (Kipchak) 部が嘗て蔑里乞の餘衆を納れたるに復報せんが爲め、大和嶺即ち高加索山の東部を踰えて之を伐つたから、欽察は大に驚きて援を韓羅斯即ち露西亞の諸侯に請ふた。是に於て乞瓦 (Kiev) の太公密赤思老 (Mistislav) 等南露西亞の諸侯が連合して欽察を助け、蒙古軍を阿里加 (Kalka) 河に邀へ撃ちたるも大に敗れ蒙古軍は附近の地方を劫掠してドニエプル (Dniéper) 河に至り、更に流を下りてクリム (Crimea) 半島に入り、次で不里阿里 (Bulgar) を撃破して軍を旋し、カスピ海北岸の阿速 (Asi) 即ち阿蘭 (Alani) 及び東北岸の康里を平らげて一二二四年東に歸つたのである。

子弟の分封 太祖は西域を定めたる後其の大領土を子弟に分與した、かくて長子朮赤には康里欽察等諸部の地即ち露西亞の南部より今の吉利吉思 (Kighiz) 曠原に至る一帯の地を與へ、次子察合台には畏兀兒より阿姆河に至る西遼の故地を與へ、第三子窩闊台には杭愛山より阿爾泰 (Altai) 山に至る乃蠻の故地を與へ、第四子拖雷には蒙古本土を與へ、蒙古の東南より女眞の地に至るまでは四弟に分與し、支那に於ける領地と阿姆河より西南の地とは封王を置かずして達魯花赤 (Darughachi) 即ち斷事官に管轄せしめたのである。

宋金西夏の關係 西夏はもと金に臣服して居たから蒙古の侵伐を受くるに及び援を金に請ひたるも、金は之に應じなかつたから蒙古と和し金を怨んで屢々其の西邊を侵すに至つた。時に金は蒙古に破られまた西夏の侵寇を受けて國勢全く衰へたから、宋は之に乗じて既約の歲幣を納めなくなつたのである。然るに金の宣宗は元の太祖の西征の隙に乗じ、兵を南方に出して宋を伐ちたるも勝たず、次で宣宗が死して其の子哀宗が立つに及び使を宋に遣はして和を請ひ、また西夏と兄弟の約を結びて漸く平和を保つことを得た。此の間宋は金と戰て互に勝敗あり、三邊歳として其の擾を被ふらざることなく、内は史彌遠が政を專にして國勢大に衰へ、一二二四年寧宗の死するや史彌遠また太宗十世の孫理宗を擁立して勢を振つて居たのである。

西夏の滅亡 蒙古は一二二五年太祖の西征より還りたる後二年を経てまた西夏を伐つた、時に西夏は宋金の加盟を恃んで外備を設けなかつたから靈州が忽ち陥り、其の主李德旺は憂憤して死し姪李睨

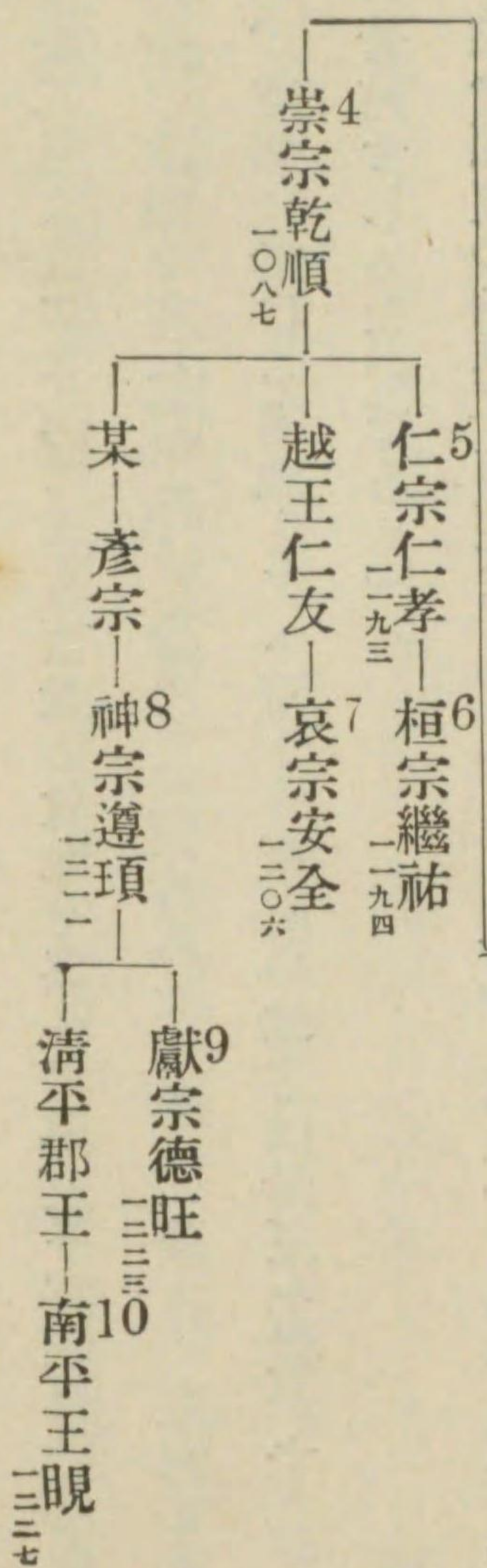
が嗣ぎて立ち、其の都興慶を力守すること二ヶ月にして遂に降つた、西夏は李元昊が帝と稱してから十主、百九十六年にして亡び、其の地は悉く蒙古に入つた、時に一二二七年である。是に於て太祖はまた金を滅ぼさんと欲し、西方より進んで汴京に向はんとしたるも途にして病に罹り、六盤山(甘肅省平涼府)の南清水縣(甘肅省秦州の屬縣)に於て六十六歳を以て死んだから、群臣は喪を奉じて蒙古に還り怯緑連河の源に葬つたのである。

西夏の王系 (十主、百九十六年)

拓跋思恭 仁福(思恭の族) …… 李繼捧(仁福の孫)

拓跋思忠 …… 太祖李繼遷(思忠の孫) — 太宗德明 —

— 景宗元昊 — 毅宗諒祚 — 惠宗秉常 —

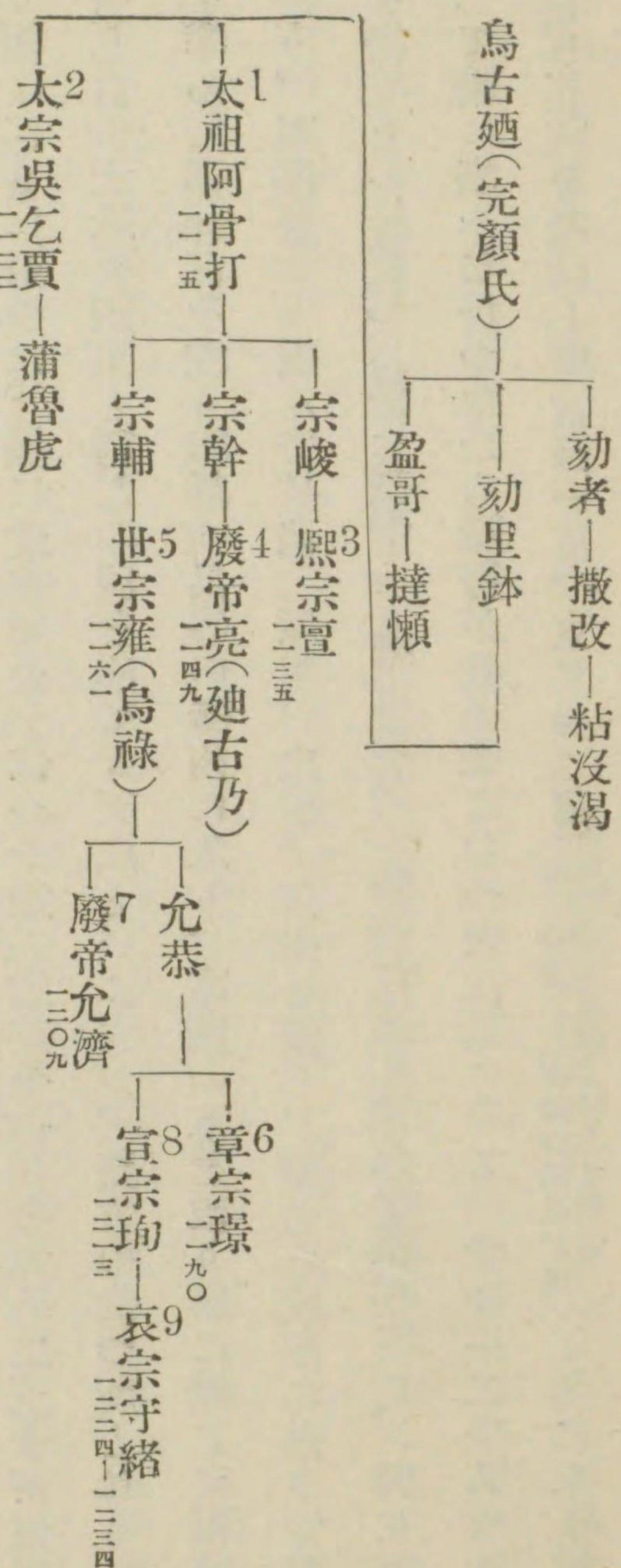


第二章 太宗の南伐 拔都の西征

太宗の金討滅 蒙古にはフリルタイの大聚會ありて大汗を選立する規定があるから、太祖の諸子中には一定せる繼嗣がなく、唯太祖は最も第三子窩濶台を愛して之を立てんと欲する意旨を顯はしたるのみであつたが、太祖の死後二年に拖雷が諸王將相百官を怯緑連河の源に集めてフリルタイを開き、窩濶台を奉じて大汗の位に即かした、之が元の太宗であつて時に一二二九年である。是に於て太宗は太祖の遺志を紹ぎて金を滅ぼさんと欲し、一二三〇年弟拖雷と共に兵を率ゐて陝西に入り、其の堡塞六十餘を陥れ遂に鳳翔を下した。初め太祖は死に臨み遺命して「金の精兵潼關にあり、南は連山に據り北は大河を限るを以て遽に破り難し、故に道を宋に假るに若くはなし、宋金は世讐なり必ず能く我に許さん、則ち兵を唐鄧に下し直に汴京を擣け、汴急なれば必ず兵を潼關に徵さん、然して數萬の衆を以て千里赴き援へば人馬疲弊して至ると雖も戰ふ能はず、之を破ること必せり」といふたが、此の時また漢中を経て南方より汴京を衝くべしと勸むるものがあつたから、使を宋に遣はして道を借らんことを求めたるに、宋は之を許さずして其の使を殺したから、太宗は拖雷をして河南に向はしめ、一二三二年親ら黄河を渡り速不台をして汴京を圍ました。既にして拖雷は漢中を略し更に四川の北

部を侵して宋の地を取り、尋で饒風關を略して漢水の上に至つた。時に金は兵十餘萬を潼關に駐め、兵十五萬を郾城に備へて敵に當らしめたが、是に至りて兵一萬を潼關に留めて其の餘を汴京に召集したから、太宗は遂に潼關を取り拖雷もまた太宗の軍と合して郾城を攻むるに至り、金軍は汴京に向つて退いたから蒙古軍は追撃して之を鐵嶺(河南省陝州盧氏縣北)に鏖殺し進んで洛陽を攻めた。金の哀宗は大に恐れ使を遣はし質を納れて和を請ひ、太宗は之を許して北に還つたが既にして金人が蒙古の使者を殺したから和親がまた破れたのである。是に於て蒙古の使王楫が宋に至り荆湖の制置使史嵩之を价して金を夾撃せんことを請ふに及び、宋の朝臣は多く之を贊して復讐の舉をなすべしといひ、趙范は其の不可なるを述べたるも用ひられず、理宗は遂に嵩之に命じて約を結ばしめ、蒙古は金を滅ぼしたる後河南の地を宋に還すべきを諾した。時に汴京は糧盡き援絶えて危急旦夕に迫り、哀宗は出下り歸徳に奔つたがまた糧盡きて蔡州(河南省汝寧府)に奔つた。此の間洛陽が陥り金の將崔立が遂に汴京を以て降り金の太后皇后及び皇子は皆蒙古軍に獲られ、哀宗は糧を宋に請ひたるも得られず、史嵩之は其の將孟珙を遣はし兵四萬を以て蔡州城の東南を圍ましめ、蒙古軍は其の西南を圍んだ。是に至りて哀宗は位を宗族完顔承麟に譲り、糧盡き城陥るに及び自到して死し承麟は捕斬された、金は太祖より是に至るまで九代百二十年にして亡びた、時に一二三四年である。

金の帝系 (九代、二十年)



宋元の攻戰 かくて金が亡びたから宋將趙范等は之に乗じて北方を恢復せんことを請ひ、朝臣中には之を非とするものもあつたが、宰相鄭清之は慨然として國家を以て己が任となし、力めて其の説を贊したから、理宗は遂に之を納れて趙范を黃州に移し日を刻して兵を進めしめ、知盧州全子才に命じ淮西の兵萬人を合せて汴京に赴かしめた。既にして金の故將李伯淵等が崔立を殺して汴京を以て宋に降つたから、宋の軍は汴京に入り次で洛陽に赴きたるに、蒙古兵の之を守るものは避けて去り宋の軍はまた洛陽に入つたが、糧食が足らず且つ蒙古軍の來るを聞きて遁れ歸つた。是に於て元の太宗は使

を宋に遣はして其の盟を破れるを責め、尋で其の子濶端(Khutan)、曲出(Khuch)等をして三道より南侵せしめ、曲出及び胡士虎は宋兵を驅逐して江淮に迫り、濶端は四川に入りて連りに宋の州郡を陥れ、宋將孟珙、杜杲、呂文德等が克く防戦すと雖も蒙古軍の勢が熾にして宋の疆域は日に蹙まりつゝあつたのである。

高麗の降服 高麗は是より先き將軍崔忠獻が神宗、熙宗、康宗、高宗を擁立して權を專にし、其の子崔瑀がまた父につぎて國政を統べ、專横甚しくして國民離叛するもの多く、外難相次で起り遂に禦ぐ能はざるに至つた。曩に蒙古の金を伐つや遼の遺族金山、金始の二王子が恢復を謀り、河朔の民を脅し自ら大遼攸國王と稱し年號を建て、天成といふたが、蒙古の伐つ所となりて東に向ひ、衆九萬餘を率ひて鴨綠江を渡り義靜朔昌等の諸州に入り、高麗の軍を破り勝に乗じて西京(平壤)に向ひ大同江を濟り、西海道より進んで長湍、原州、忠州、溟州を侵し、轉じて咸州に赴き女眞の舊址に入り其の兵を得てまた振ひ、更に長驅して來り高州、和州に寇し豫州を陥れたが、時に高麗の將卒は皆老羸にして戰に堪へなかつたから賊勢が益々熾になつたのである。會々一二一八年元の太祖が其の將哈眞(Hahin)を遣はし蒙古兵一萬、東眞兵二萬(此の時金の宣撫蒲鮮萬奴が遼東に據り東眞と號して居た)と共に來り援ひ、翌年高麗の將趙冲及び金就礪が是と兵を合せて契丹兵を伐ち、江東城に至りて之を降した。既にして哈眞は兵を引

て歸るに當り東眞人を義州に留めて高麗語を習はしめ、次いで兵を鎮溟城に屯して歲貢土物を督納せしめ、高麗は之と好を結んだが、一二二五年蒙古の使者著古が歸らんとして鴨綠江を渡り金人に殺さるゝや、蒙古は高麗の之を殺せるを疑ひ太宗の時に至り一二三一年其の將撒里台(Sartai)をして之を伐たしめ、鐵州を屠り龜州を圍んだから高麗の將朴犀、金慶孫が討つて之を却けたが、蒙古軍がまた平州より京師に至り更に轉じて忠州、清州に向ひ過ぐる所を殘滅せしめた。是に於て高麗の高宗は閔曦を遣はして和親を結ばしめ、後更に趙叔昌を遣はし上表して臣と稱し方物を獻せしめたが、崔瑀は尙ほ後難を恐れ高宗を脅して都を江華に遷した。會々蒙古の署する所の達魯花赤(斷事官)を殺せるものあり、撒里台が之を責むるに及び高宗は遂に意を決して江華の防禦を嚴にし、撒里台を射殺したまた叛將畢賢甫等を殺したから、一二三六年蒙古はまた唐古をして來り攻めしめ、全國兵禍を被ふるに至り、高宗は其の族子永寧公緯を王子と稱して禿魯花(蒙古語實子の義)となしまた臣と稱した、時に一二四一年である。

波斯の征服 太祖既に西域を定むるや達魯花赤を置きて之を監治せしめ、また其の四子に命じ各々兵千人を出して阿姆河以南の地を駐守せしめたが、蒙古の大軍が東に歸るに及び波斯はまた亂るゝに至つた。是より先き花刺子模王ムハメッドの第三子ギアト・ウツヂン(Giath ud-din)は遁れてマザンデラン

(Mazanderan)に居り、蒙古軍の去るに乘じ亦思法抗(Ispahan)に入りてイラク・アシエミ(Irak-Ajemi)、呼羅珊及びマザンデランを奪つたが、柔弱にして衆を馭することができなかつたから、曩に印度に通れたる其の兄札蘭丁の西歸を思ふものが多かつた。時に札蘭丁はデリーにありて其の王アルタムシの女を娶つたが、波斯の亂れたるを聞き兵を率ゐて印度河を渡り、途中多く其の兵を失ひ僅に四千人を率ゐてケルマン(Kerman)に達し、到る處歓迎を受けて遂にイラクに入り、ギアト・ウッヂンを逐うて其の軍を領した。是に於て札蘭丁は先づ哈利發ムスタンシル(Mustansir)を伐つて怨を報せんと欲し、一二二五年兵を率ゐてクジスタン(Khuzistan)に入り八吉打に逼まりて哈利發の軍を破つたが、北に轉じてアゼルバイジャン(Azerbaijan)に入りタブリス(Tabris)を陥れ、次でグルジア(Georgia)に入りて其の兵七萬を破り、また阿蘭、レスグ(Leshi)、欽察等高加索山北諸部族の援軍を撃破し、一二二六年チフリス(Tiflis)を陥れて亦思法抗に歸り、次で撒耳柯思(Chechia)の南部に侵入したが、蒙古軍の來り伐つを聞きて兵を旋した。一二二七年札蘭丁は木刺夷(Mulahlia)を伐ちたるに、蒙古軍の前锋が既に塔米干(Damagan)に達したから、札蘭丁は之を撃破したが翌年其の大軍がまた來つて亦思法抗に逼まり、札蘭丁は奮闘して敗れたるも會々太祖の訃信が到りて蒙古軍は急に退き、アム河を渡つて去つたのである。時にグルジア人は札蘭丁の敗れたるを聞き高加索南北の諸部族を糾合し

て前敗に報ひんとしたが、札蘭丁は邀へ撃て之を破り次で哈利發ムスタンシルと和を講じて波斯可汗の尊號を受け、亦思法抗に歸り亡父ムハメッドの尸を迎へて墓を建て、更に兵を率ゐてケラト(Khelat)を伐ち、攻圍六ヶ月にして之を陥れた、時に一二三〇年である。是に於て的迷失吉(Damascus)の主アシラフ(Ashraf)、迷思耳(Misar)即ち埃及の主カミル(Kamir)、蘆眉(Rum)の主カイ・ロバッド(Kai Kobad)等は毛夕耳(Mosul)、アレポ(Aleppo)、メソポタミア(Mesopotamia)の諸君長と連合して札蘭丁を伐ち、札蘭丁は敗れてタブリスに退き將に和を講じて互に其の領土を侵擾せざるを約し、専ら蒙古軍を防がんとせるも和議が未だ成らざる中に蒙古軍がまた來つて札蘭丁を伐つた。時に元の太宗が既に位に即きて一二三〇年綽兒馬罕(Chumagan)に命じ、三萬人を率ゐて西征せしめたから、札蘭丁は援を的迷失吉、アミド(Amid Diarbekir)等に求めたるも得ず、一旦小亞細亞に遁れて蘆眉に頼り恢復を圖らんと欲し、途に蒙古軍に會して悉く其の兵を失ひ、クルド(Kurd)の山中に遁れ遂に土人の刺殺する所となつた、時に一二三一年である。蒙古軍は西進してアミド、メソポタミア、エルビル(Erbil)、ケラト等を攻陥し、次でアゼルバイジャンを討平し、更にグルジア及び大アルメニア(Armenia)に侵入して到る處を蹂躪し、またチフリス、カルス(Kars)を陥れて殺掠を極め、一二三六年に至りて全くアム河以西の地を平定したのである。

蒙古の奠都 蒙古は太祖の時に未だ一定せる國都と稱すべきものはなかつたが、太宗に至り一二三五年斡兒洹河即ち今のオルホン (Orkhon) 河の西なる和林即ち喀喇和林 (Karakorum) に都を奠めたのである。和林は支那にて黒林とも書す、蒙古にては喀喇和林といふ、黒林は元來蒙古語ハラツン (Karatum) の譯なり、波斯の蒙古史家ラシッド・ウツヂン (Rashid ud-din) は之をハラウン・カブチャル (Karauu Cabdjal) といふ、黒林徑の義である。其の地は今の外蒙古喀爾喀部の抗愛山東オルホン河岸にあり、もと唐時代の回紇の毗伽可汗 (Bilga Khakan) の故城なり、其の地に和林河あるを以て名づけたといふことである。ラシッド・ウツヂンはハラホルム (Karakorum) 山の名から出たといふて居るが信じ難い、和林河はまた喀喇和林河ともいふのを見れば、此の河名から起つたといふのが穩當であらう、然れども今は此の河名なし、思ふにオルホン河の支流ホクチン・オルホン (Kokchin Orkhon) の古名であらう。元の太祖は初め茲に居を定めたるも未だ之を都としたのではなかつた、元史によれば太宗の七年即ち一二三五年二月和林を會同の所となして之に城を萬安宮を造る、城の周五里(我が)とあり、此の時始めて蒙古の都となつたやうである。かくて太宗、定宗、憲宗三代は茲に都し、世祖に至り一二六〇年都を燕京(今の北京)に遷して大都といふたから、是より和林は唯蒙古地方の政治的中心たるに止まつたが、後元が亡びて蒙古人の支那を去るや、また一時都を茲に置いたのである。其の址は今

オルホン河の東方半里の地にある額爾德尼招 (Erdemigo) 即ち光顯寺の地であらうと思はれる。

拔都の西征

太祖が其の子弟親族を封するに當り長子赤朮をアラル (Aral) 海及びカスピ海の北より遠西の地、即ち太祖の所謂蒙古馬蹄の踐み至るまでの地に封じたから、他の子弟に比して朮赤の封疆は未だ確定して居なかつた、故に亞細亞歐羅巴二洲に於て其の欲する所の地を併呑し、茲に其の邦國を起さざるを得なかつたのである。然るに朮赤はカスピ海の北に遊牧して東に歸らず幾許もなくして死んだから、太宗は金を滅ぼしたる後一二三五年にフツルタイ大聚會を和林に開きて宋、高麗、乞失迷耳 (Kashmir)、印度の征伐を議定し、更に歐羅巴征服の議を決定した。是に於て太宗は朮赤の子拔都 (Batu) を統帥となし、其の兄斡魯朶 (Orda)、弟昔班 (Shiban)、唐古忒 (Tangut)、巴の子貴由 (Kuyuk)、合丹 (Hadan)、弟濶列堅 (Kulhan)、孫海都 (Kaidu)、察合台の子拜達兒 (Baidar)、孫不里 (Buri)、拖雷の子蒙哥 (Mongu)、撥綽 (Budjoc) 等を將となし、速不台を先鋒となして一二三六年二月西征の途に上らしめたのである。かくて蒙古の全軍は按台 (Altai) 山の麓に沿うて也兒的石河の源を過ぎ吉里吉思曠原を経て沿道の諸部族を服し、速不台は先づ不里阿兒 (Bulgar) を討平し、蒙哥及び撥綽は欽察 (Kipchak) の地に入りて其の別部の會長八赤蠻 (Pachiman) を斬り、ヴォルガ (Volga) 河邊の諸部族を下して悉くカスピ海以北を定め、一二三七年冬遂に斡羅思 (Orus) 即ち露西亞に侵入した。是より

拔都は幹魯朶、別兒哥(Berke)合丹、不里、濶列堅等の諸將を率ゐて北に向ひ、烈也贊(Biazan)を屠り次でモスコウ(Moscow)を陥れ、長驅してウラヂミル(Vladimir)に向つたから、ウラヂミル太公ゲオルギイ(George)は大に驚き都城を出で、シツチ(Siti)河に退いたが、拔都はウラヂミルを陥れ進んでシツチ河に至りてゲオルギイと共に其の軍を塵殺し、更に進んでノヴゴロド(Novgorod)を取り、南に轉じて乞瓦(Kiev)を焼き、幹羅思の内地を蹂躪した。次で一二四〇年拔都は其の軍を二分し、自ら一軍を率ゐて馬札兒(Magyar)即ち匈牙利(Hungary)に向ひ、拜達兒及び海都をして一軍を率ゐて孛烈兒(Bolai)即ち波蘭(Poland)に向はしめたのである。かくて海都は孛烈兒に侵入して其の國都クラカウ(Krakow)を焚掠し、其の王ボレスラフ(Boleslav)を走らして更に涅迷思(Niemiż)(獨逸人をいふ、もて中古の露西亞人は其の國の國境の獨逸人をニエミチ)即ち獨逸を侵し、シレジア(Silesia)に亂入して到る處を掠略した。是に於てシレジア侯ハインリッヒ(Heinrich)二世、ミスチスラフ・フォン・オペン(Mistislav von Oppeln)、モラヴィア(Moravia)侯デーポルド(Diepold)三世の子ボレスラフ(Boleslav)、テウトン(Teuton)騎士團の首領ポッポー・フォン・オステルナ(Poppo von Osterna)等が連合し兵二萬を以て蒙古軍を禦ぎたるも、蒙古軍は一二四一年四月九日之をリーグニッツ(Riegnitz)の東南ワールスタット(Waldstadt)に撃破してハインリッヒを斬り、更に東南に轉じてモラヴィアに入り、ボヘ

ミア(Bohemia)王ウエンチスラフ(Vencislav)の派遣せるヤロスラフ・フォン・ステルンベルグ(Jaroslav von Sternberg)をオルミッツ(Ormitz)に攻めて勝たず、退いて馬札兒に向ひ拔都の軍に合した。此の間拔都は一二四一年馬札兒に侵入し、其の王ベラ(Bela)四世の軍をサヨ(Sajo)河に撃破してベラをダルマチア(Dalmatia)に逐ひ、國都ペスト(Pest)を陥れ禿納(Dunao)即ちダニューブ(Danube)河を氷渡してグラン(Gran)を屠り、其の別軍は更に奧地利(Austria)に入り、次で伊太利(Italy)のヴェネチア(Venice)に迫まつた。是に於て歐羅巴諸國は大に驚き恐れ、羅馬法王グレゴリウス(Gregorius)九世は檄を飛ばして十字軍を起さんとするに至つたが、會々一二四二年四月太宗の訃信が蒙古の軍中に到つたから、拔都は直に軍をまとめ諸將に凱旋の命を下して東に歸らしめた、故に中央及び西歐羅巴諸國は漸く蒙古人の蹂躪を免かれることができたのである。

欽察汗國の建設　かくて拔都は諸將に東歸を命じたる後自ら合丹と軍を合せて東し、幹羅思の南部を過ぎ高加索山の北に至りて駐まること數月、此の間欽察の叛者を平らげ次で一二四三年春ヴォルガ河の河畔に至り、諸軍を散遣して征服地を整治し、後ヴォルガの下流薩來(Sarat)に帳殿(天幕を以つて造れるが故にいふ)を建て、金幹耳朶(Sira Orda)と名づけ、東は吉利吉思曠原より西はカルバト(Carpattia)山に至る地及び南北幹羅思の諸王侯を統治し、亞細亞歐羅巴二洲に跨る一大國を領した、之を金幹耳朶即ち

金帳 (Golden Hords) 國といひ、また欽察の地に居るが故に欽察汗國ともいふのである。金帳とは錦綉の天幕を用ひたるが故にいふのであつて拔都の兄斡魯朶はカスピ海の北康里の地に居りて白帳 (Ak Orda) と號し、弟昔班はウラル (Ural) 河の東に居りて青帳 (Kokk Orda) と號し、皆金帳の汗に隸屬して居たのである。かくて拔都は金帳汗と號し毎年春ヴォルガ河の東岸に沿うて不里阿兒の斡朶朶に至り、秋は南して薩來に駐まり隸屬諸侯の入朝を受くるを例としたから、此の後永く薩來は欽察汗國の都となつて居るが、新古の二市があつて其の位置に就いて異説がある、露西亞人グレゴリエフ (Gregorieff) 教授は古薩來の遺址をアクツバ (Aktuba) 河(ヴォルガ河の下流三角洲より溯ること百里以上にして河は數條に分岐す、其の東なるをアクツバ河といふ。)の左岸なるツァレフ (Tsarev) 市附近に於て發見したりといひ、且つ新薩來の名は一三二〇年以後鑄造せられたる古貨幣によりて知らるゝのみなれば、新薩來は恐らく古薩來の一部に新設したるものであらうといひ、英吉利人ヘンリー・ユール (Henry Yule) 大佐は之に反對して古薩來をアストラカン (Astrakhan) 市の西北セリトレンノイェ・ゴロドク (Selitrennoye Gorodok) 附近にありといひ、また新薩來はツァレフであるといふて居る。以上の兩説は共に是非の判定を下すことができぬから、兩説を擧げて識者の判斷に委かすこととしたのである。新薩來が札尼別汗 (Janibeg Khan) 若しくは其の父月即別汗 (Uzbeg Khan) の時に建設せられたることは、札尼別汗の發行せる貨幣の鑄造地を新薩來

と刻してあるのによつて知ることができ、札尼別汗は一三四一年から一三五七年まで欽察汗であつた人である、而して薩來は一三九五年帖木兒 (Timur) の命によりて焚かれ後再建されたが、一四八〇年遂に露西亞人の爲めに破壊されたといふことである、是れ蓋し新薩來であらう。但し以上述べたる新古の薩來は拔都の時黒海の北撒吉刺(クリム半島の古名ソルガト Sogdite あらう)に建てたる薩來とは別である、故に欽察汗國に於て薩來と稱する地は少なくとも三ヶ所あつたことが知れるのである。

第二章 憲宗の南伐 旭烈兀の西征

定宗の即位 初め太宗は第三子曲出 (Khuch) を嗣となしたが、支那の軍中に於て死んだから其の子失烈門 (Shiraman) を立てる意思であつた。然るに一二四一年に太宗が死ぬと皇后脱列哥那 (Tura-kina) は己の生める貴由 (Kuyuk) を西征から喚びかへして之を立てんと謀り、自ら制を稱すること四年に及び、丞相鎮海 (Chinkai) を免じイラムス教徒なる奥都刺合蠻 (Abdur Rahman) に任じて財賦を掌ごらしめ、波斯婦人フアチマ (Fatima) を寵して太宗の舊人を黜くるもの大半に及んだから、耶律楚材の如きも遂に憂を以て死するに至り人心が大に動搖した。かくて貴由が歸り来るや后は之を立てんと欲し拔都の来るを待つて居たが、拔都は病に托して至らなかつたから遂に一二四六年諸王を會して貴由を立てた、之が定宗である。是に於て此の歳八月定宗が即位の禮を行ふや蒙古諸王、支那、波斯、土耳其斯坦、トランス・オクサナ等の總督を初め、幹羅思、蘆眉 (Rum)、グルジア (Georgia)、撒耳柯思 (Circasia)、ファルス (Fars)、ケルマン (Kerman)、毛夕耳 (Mosul)、アレppo (Aleppo) 等遠近の諸王侯また來り會し、哈利發 (Kalifa)、木刺夷 (Mulahida) の教主、羅馬法王もまた使節を派して之を賀し、朝會の盛なることは前古未曾有の盛觀であつた、而して羅馬法王インノセント (Innocent)

四世の使節プラノ・カルボニ (Jean du Plano Carpini) の至れるも實に此の時であつたのである。定宗即位の後數月を経て太后脱列哥那が死んだから、定宗は奥都刺合蠻を誅して鎮海を丞相となし、一二四七年兵を遣はして高麗を征し、察罕 (Chagan) をして宋を伐たしめ、宴只吉帶 (Ichikadai) に命じて波斯を征せしめ、次でフアチマの姦を發きて之を誅戮した。是より先き太宗の死後數月を経て察合台もまた死し、其の孫合刺旭烈 (Kara Hulagu) が監國となつたが、是に至りて定宗は孫に傳へて子に傳へざるは非法なりとし、察合台の子也速蒙哥 (Yesu Mangu) をして位を嗣がしめた。定宗はもと拔都と不和であつたから之を討たんと欲し、一二四八年疾に托して葉密爾 (Emil) 河邊に西巡したが、未だ別失八里 (Bishbalik) に達せずして途中で死んだ、年四十三、在位僅に二年である。

大汗嗣立の争と憲宗の即位 定宗西巡の途に死するや皇后幹兀立海迷失 (Ogul Gaimish) は暫く喪を發せず先づ使を拖雷の寡婦唆魯朮帖尼 (Sunkutei) 及び拔都に送り、其の認諾を得て自ら制を稱し定宗の姪失烈門を立てんと謀つた。時に拔都は定宗に迎謁せんとして阿勒塔克 (Alaktak) 阿爾泰山の支にして、カシ (Kash) 湖の西北 山に至り、計信を聞て駐まり諸大將を召して會議を開かんとしたが、會議は東方に於て開くべく西土に於て開くべきに非ずとて諸王は多く至らず、會期に及んで朮赤及び拖雷の諸王のみが來り會し、太后幹兀立海迷失また使を遣はして議に預からしめ、宴只吉帶もまた波斯より來りて會議に列し

た。かくて會議を始むるや太宗の遺命に遵つて失烈門を立つべしといふものありしに、忽必烈(Khamb-
bajid)曰く「太宗既に失烈門を立てんと欲す、然るに汝輩定宗を輔立せり、豈に之を太宗の遺命といふか、
今日のと獨り太宗の遺命を以て辭となすは何ぞや」と、言ふもの語塞がりて辯解することができなかつた
のである。此時定宗の長子忽察(Khoja Ogui)もまた父の位を得んと冀うたが、太宗の後人は多く
衆望を失ひて服するものがなかつた。初め太祖が死に臨みて其部兵を子弟に分かてる時、拖雷は幼子
なるを以て得る所が最も多かつたから諸將帥は概ね之に歸屬したのである。また拖雷の死後其の諸子
は幼少であつたから唆魯禾帖尼が皆事を決したが、唆魯禾帖尼は才智があつて能く衆を馭しまた拔都
と親交があつたから、衆望は拖雷の長子蒙哥(Mangu)に歸したのである。是に於て拔都曰く「今や
吾が國家の幅員甚だ廣し、聰明睿智能く太祖の業を紹ぐものにあらざれば主とすべからず、宜しく蒙哥
を立つべし」と、議遂に定まり明年春再び幹難、怯綠連兩河の源なる太祖發祥の地に會することに決し
拔都は其の弟別兒哥(Berke)及び脱哈帖木兒(Tuka Timur)をして大軍を率ゐる蒙哥を護衛して東せ
しめ、自ら西に歸りて非常に備へたのである。然るに第二次の會期に至りて太宗定宗の後王及び察合
台の子也速蒙哥等は皆來らず、遂に拔都の命を以て蒙哥を奉じて位に即かした、之が憲宗である、年
四十三、時に一二五一年七月一日である。是に於て憲宗は諸將を會して即位の禮を行ひ大饗七日に及

んだが、會々變を告ぐるものあり「失烈門、忽察、腦忽(Brainの子)三王朝會を以て名となし、饗宴
備なきに乗じて亂を作さんと圖る」といふたから、憲宗は忙哥撒兒(Mangušan)に命じて兵を率ゐ
往て三王の衛士を止め各々二十人を従へて入謁せしめ、次で憲宗自ら之を鞫問して實を得、三王の黨
の亂を煽し逆を謀るもの凡そ七十人を殺し、また人を遣はして波斯に歸れる宴只吉帶を追うて途に之
を捕へ拔都に附して殺さしめた。明年憲宗は和林に至りて厭禳の獄を究め、太后幹兀立海迷失を鞫治
して實を得、氈に包みて之を河に投じ、後の攝國中事を用ひたる大臣鎮海、喀達克(Kadakh)を殺し、察
合台の孫不里(Buri)を拔都に附して殺さしめ、忽察、腦忽、失烈門の死を免して忽察を薛靈哥(Selenga)
河畔の邊地に遷し、腦忽、失烈門を兵卒となして軍役に服さしめた(後忽必烈の宋を伐つや憲宗に請
うて失烈門を軍に伴ひ力を効さしめたが、憲宗自ら將として南伐するに及び失烈門を水に投じて殺さ
しめたといふことである)。かくて太宗の後王を分遷して其の封地を定め、其の舊部軍には別に親王を
擇んで之に將とし以て其の衆を擁して亂を作すを防ぎ、唯太宗の子合丹(Hadan)、蔑里(Melik)及び
濶端(Klutun)の子脱脱(Tukluta)は二心なきを以て兵柄を奪はず、また察合台の孫合刺旭烈を遣は
して其の叔父也速蒙哥を殺し之に代はらしめんとせしに、未だ到らずして死んだから合刺旭烈の妃倭
耳干納(Organah)が帝命を行うて也速蒙哥を殺し、自ら國を監すること九年に及んだ。是に於て繼

承の内訌が始めて平らぎ大政が漸く定まつにから來會せる諸王を散遣し、また別兒哥及び脫哈帖木兒を厚く賞して歸らしめたのである。次で憲宗はまた大に版圖を擴めんとし太宗の例に倣ひて大舉征戰の議を決し、弟忽必烈をして漠南軍國の事を總治せしめて南征せしめ、弟旭烈兀 (Hulagu) をして西方亞細亞を征せしめたが、後また弟阿里不哥 (Arighburqa) を和林の留守となし憲宗親ら出で、宋を伐つたのである。

大理の降服 大理は唐の時代の南詔であつて今の雲南である、南詔は會龍の後漸く振はず、五代に至り後晉の時九三七年段思平が其の王となるに及び國號を大理と改め、次で宋の中世に至り段氏が斷絶して高氏が之に代はつたが既にして段氏がまた興り大理王と稱した、時に一一〇五年である。此の間宋は西北の防禦に力を盡くして居たから大理と通じなかつたが、其の後憲宗が蒙古の大汗となり宋を伐つたと謀りて弟忽必烈に漠南の軍事を總治せしむるに及び、忽必烈は先づ甘肅より出で、雲南を伐つた。かくて一二五三年忽必烈は兀良哈台 (Urungkatai) をして諸軍事を總べしめ、三道に分れて進み臨洮 (甘肅省洮州) より四川の西北に入り、山谷を經行して金沙江に至り革囊及び楫を以て渡り、摩沙蠻 (雲南省麗江府) を降し進んで大理 (雲南省大理府) 城に薄まり、大に其の兵を破つて大理王段興智を虜にした、是より雲南は蒙古の領土となつたのである。

南詔及び大理の王系

1 細奴邏	六二九	13 隆 舜	八七七
2 邏 晟	六七四	14 舜化真	八九七
3 晟邏皮	七一二	15 鄭買嗣	九〇二
4 皮邏閣	七二八	16 鄭旻嗣	九一〇
5 閣邏鳳	七四九	17 鄭隆宣	九二六
6 鳳迦異	七七九	18 趙善政	九二八
7 異牟尋	七七九	19 楊子真	九二八
8 尋閣勸	七九九	20 段思平	九三七
9 勸龍晟	八〇五	21 段思英	九四五
10 勸利晟	八〇六	22 段思良	九四六
11 晟豐裕	八二四	23 段思聰	九五三
12 會龍(世龍)	八六〇	24 段素順	九六九

25 段素英	九八五	39 段智興	一一七二
26 段素廉	一〇〇九	40 段智連	一一〇〇
27 段素隆	一〇一八	41 段智祥	一一〇五
28 段素貞	一〇二六	42 段祥興	一一三九
29 段素興	一〇四一	43 段興智	一一五一
30 段思廉	一〇四四	44 段實	一一六一
31 段連義	一〇七五	45 段忠	一一八三
32 段義貞	一〇七七	46 段慶	一二八四
33 段壽輝	一〇八〇	47 段正	一三〇七
34 段正明	一〇八二	48 段隆	一三一七
35 高昇泰	一〇九九	49 段俊	一三三一
36 段正清	一一〇五	50 段義	一三三二
37 段正嚴	一一〇八	51 段光	一三三二
38 段正興	一一四八	52 段功	一三四五

53 段實	一三六六	55 段世	一三八二
54 段明	一三八一		

(一三八二年明に滅びたる)

吐蕃の降服 吐蕃は棄宗弄贊(Chitsun Iun Dusan)王以來佛教が盛に行はれ、唐の玄宗の天寶年間に棄隸踏贊(Khri lde gtsug-brtan-mesag-ts ms 吃隸雙提贊王)が使を印度に遣はして榜葛刺(Bengal)より善海大師(Santarakṣita)を招き、其の言に従ひて北印度より瑜伽(Yoga)派の巴特琅撒巴々(Paloma Sumbhava 蓮華生上師)を招いた。是に於て七四七年巴特瑪撒巴々が多くの陀羅尼(Dharani)及び祕密修法を齎らして吐蕃に來り、其の國俗に適せる一種の密教を唱へた、是れ即ち喇嘛(Lama)教である。喇嘛とはサンスクリット(Sanskrit)語の鬱多羅(Uttara)と同じく上者の義であつて長老を呼ぶ語であつたが、遂に吐蕃佛教の通稱となつたのである。是より吐蕃には佛教が益々盛に行はれて勢力を生じ、國王も抑制せらるゝに至つたから、九〇〇年頃朗達爾瑪(Lang Dharma)王が之を憂ひ、大に佛教の破滅を企て、佛塔寺院を破却し僧侶を還俗せしめたが、在位僅に三年にして喇嘛バル・デルジエ(Pal-derje)の爲めに弑せられた。是に於て佛教が再び勢力を恢復し、朗達爾瑪の孫巴勒科爾贊(Pal K'or-btsang)王の時には寺院を再建し、前代以來印度に遁逃せる僧侶もまた漸次還り來り、第十一世

紀の頃には迦濕彌羅 (Kashmira)、印度の僧侶がまた踵を接して至り、佛教の勢力が益々増長して喇嘛は遂に國勢を左右するに至つたのである。一二五三年蒙古軍の吐蕃に侵入せる時には喇嘛拏底達 (Palita) の威權が旺盛であつたから、忽必烈は之と和を講じて國王唆火脫を降し、兀良哈台を留めて諸夷の未だ降らざるものを攻めしめ、拏底達の姪八思巴 (Phagspa Lodoi Gyaltshan) を伴うて還つたのである。

交趾の征伐 兀良哈台は既に吐蕃を平げて南進して雲南に入り、白蠻、烏蠻、鬼蠻の諸部を攻め下し、更に羅羅斯、阿伯、阿魯の諸部を服して悉く西南夷を平らげ、進んで交趾を侵した。交趾は一二二五年に陳熙が李氏に代はりて國を安南と號し、勇武にして屢々南境を侵しまた占城 (Champa) を破り、制度を改革して國勢が頗る盛になつたのである。かくて兀良哈台が使を遣はして降を勸むるや陳熙は皆之を囚へ、蒙古軍を洮江 (富浪江) に拒で敗れ遁れて海島に入つたから、兀良哈台は其の都城交都を屠つたが、炎暑に堪へずして一二五七年師を班した、然るに陳熙もまた蒙古の再征を恐れ、後遂に歳幣を納れて和を講じたのである。

憲宗の南征 初め忽必烈が憲宗の命を受けて漠南の軍事を總治するや、府を金蓮川 (直隸省宣化府赤城縣獨石口北) を開き積學姚樞を聘して治國の道を諮り、次で關中河南に封せらるゝや樞の言に聽きて専ら城内の治

平を圖つた。此の間宋は理宗が尙ほ位にありて外は孟洪、余玠等が四川を保ちて北方を守備したが、内は賈似道が權を專にして國勢が大に衰へたのである。是に於て憲宗は宋を滅ぼさんと欲し、少弟阿里不哥を和林の留守となし、一二五七年自ら大軍を率ゐる三道に分れて四川より宋を侵し、自ら劍門に入り苦竹隘 (四川省保寧府劍縣北) を攻めて之を破つたから、宋の諸城は風を望んで降つた。既にして忽必烈の軍は河南より揚子江を渡つて鄂州 (湖北省武昌府) を圍み、兀良哈台の軍は交趾より北上して邕桂の境を過ぎ潭州 (湖南省長沙府) を圍んだ。時に憲宗は台州 (浙江省重慶府) を圍んだが守將王堅が固守して降らず、會々憲宗は病に罹り軍中で死んだ、或は流矢に中つて死んだともいはれて居る、在位九年、年五十一、時に一二五九年である。憲宗は性沈默寡言にして嚙飲を喜ばず、常に祖宗の法を遵守するを以て任となしたが、然かも巫覡卜巫の術を信すること酷しく、すべて事を行ふには必ず之に依り殆ど虚日なき有様であつたといふことである。是より先き宋の理宗は賈似道に命じ漢陽に至りて鄂州の聲援をなさしめたが、賈似道は漢陽より鄂州に至り蒙古軍の盛なるを見て密に使を遣はし、臣と稱して地を割き幣を納れんことを請ひ敢て戦はなかつた。忽必烈は之を聽かずして益々急に鄂州を攻めたが、既にして賈似道が憲宗の死を聞き再び使を遣はして和を請ふや、忽必烈もまた憲宗の死を聞き且つ阿里不哥が和林にありて憲宗の諸子及び察合台の子孫等に推されて大汗たらんとすることを聞いたから、遂に賈似道の請を許

し、(一)江北の地を割き、(二)歳幣として銀絹各二十萬を納めしむることを約して直に軍を收めて北に歸り、一二六〇年三月フルルタイを開平(直隸省宣化府 獨石口東北)に招集し、其の弟莫哥(Muko)、太宗の子合丹(Hadan)、幹赤斤(Uhigen)太祖の弟の子搭察兒(Togaohar)等の推す所となりて大汗となり、六月即位の禮を擧げた、之が世祖である、時に年四十四。

阿里不哥の亂 此の時に當りて阿里不哥は和林の西にあり、阿藍答兒(Alondar)、渾都海(Kuntukai)等の諸將、憲宗の子阿速歹(Asutai)、玉龍答失(Yulung Tash)、昔里吉(Sireki)及び察合台の後王等が之を援けて大汗たらしめんとしたから、世祖は察合台の孫不里(Buri)の子阿畢世喀(Apigga)に命じ、往きて察合台汗國を領し阿里不哥を防がしめんとせしに、陝西に至り阿里不哥の黨に捕へられて和林に送られ、阿里不哥は拜達兒(Baidar)察合台の子の子阿魯忽(Aluqu)を察合台汗國の主となして倭耳干納に代はらしめ、アム河及び欽察の境上を守りて旭烈兀及び別兒哥が世祖に應援するのを禦がしめた。此の間阿里不哥はまた阿藍答兒をして兵を北方諸部族の間に集めしめ、また劉太平、霍魯懷(Halukai)の二將を陝西に遣はして錢穀を收めしめ、更に六盤の守將渾都海と連絡せしめ、渾都海をして成都の守將密里霍者(Mirum Khoja)密里、青盾の司令乞台不花(Kitai-butka)を説いて之に應せしめ、遂に和林に於て大汗と稱したのである。時に世祖は畏兀兒人廉希憲を遣はして陝西を守禦せしめたか

ら、劉太平、霍魯懷は陝西に入りしも廉希憲の爲めに捕殺せられ、次で密里霍者、乞台不花もまた撃殺せられた。是に於て渾都海は退いて黄河を渡りて甘州を取り、會々蒙古より來れる阿藍答兒の軍と合して南に向つたが、合丹、八春(Pachun)、汪良臣等の爲めに甘州の東に於て撃破せられ、阿藍答兒、渾都海は遂に戰死したのである。是より先き阿里不哥は阿畢世喀を殺し旭烈兀の子出不忽兒(Chun-チウムクin)及び喀拉札(Kharachar)カラチアルを前鋒となして南進したが、世祖の前鋒亦孫哥(Isanuga)の軍と戦ひ敗れて其の衆皆散じ、次で阿藍答兒、渾都海等の戰没するに及び、勇氣沮喪して謙謙州(Kemkenjut)に赴き、其の敵せざるを知り過を悔いて使を遣はし、馬肥ゆるを俟つて入覲し別兒哥、旭烈兀、阿魯忽と共に來つて世祖を推戴せんことを請ふた。時に世祖は自ら進んで和林に向つたが、之を許して三王の到着以前に相見んことを望み、亦孫哥に兵を授け和林に留まりて阿里不哥の來るを待たしめ、自ら開平に還りて其の兵を散じたのである。然るに一二六一年の晩秋に至り阿里不哥は陽に到着を亦孫哥に報じ、其の不意に出で之を襲撃して潰走せしめ、和林に據り沙漠を踰えて南進したから世祖はまた兵を集めて之を伐ち其の冬シムルタイ(Simulai)湖邊のアルチャ・クングル(Alchia Kungur)に戦ひ、合丹等が撃つて阿里不哥の衆を破つたが世祖は之を追はしめなかつた、十日の後阿里不哥はまた軍を回へしてシルギルク(Silgilk)高地附近のアルト(Alt)に激戦し夜に入りて兩軍が相別かれ

阿里不哥は遂に遁れ去つたのである。此の時に當り阿魯忽は倭耳干納に代はりて察合台汗國の主となり、別失八里に居たから阿里不哥は三使を遣はして牛馬軍費糧餉を徵求したが、阿魯忽は吝みて出さず遂に其の使將を殺して世祖に通じたから、阿里不哥は之を伐たんとして西に去り、世祖は次で和林に入り更に軍を進めんとせしに、急使が支那から來りて不穩の情況を報じたから引き歸つた。一二六二年阿里不哥の將哈刺不花(Karabukha)は阿魯忽と戦つて陣没し、阿魯忽は勝利を恃んで敵を輕んじ伊犁(II)河畔の其の營に還りて軍を解いたが、幾許もなく阿速歹が第二軍を率ゐて鐵門の山隘を過ぎ、阿力麻里(Almalik)城を奪つたから、阿魯忽は退きて天山を踰えて南し和闐(Khoisan)、可失哈里(Karalghar)方面に逃れ、阿里不哥はまた阿力麻里に至りて駐まり、阿魯忽は退きて撒麻耳干(Samarqand)に至つた。然るに阿里不哥の將士等は其の主が敵を虐ぐることに甚しきを惡みて相携へて去り、當時既に世祖に歸附して兵を阿爾泰山に駐むる玉龍答失に投じたから、阿里不哥は其の衆を失ひ阿魯忽が之に乗じて來り攻めんことを憂ひ、倭耳干納をして往いて阿魯忽と和を議せしめたるに、阿魯忽は倭耳干納と結婚して不花刺(Bokhara)、撒麻耳干等の地を治め、海都(Kaidu)が阿里不哥に應じて來り攻むるを擊攘して軍勢がまた振つた。是に於て阿里不哥は兵なく資なく助なくして勢益々蹙まり、一二六四年遂に諸王玉龍答失、阿速歹、昔里吉及び謀臣不魯花(Barghan)、脫里察(Tukrich)、脫忽思(Tugus)等と開牛に來りて降つたから、世祖は阿里不哥及び諸王の罪を釋して不魯花等十人を誅し、次で使を遣はして之を伊兒汗(Tikhun)旭烈兀、欽察汗別兒哥、察合台汗阿魯忽に告げしめ、其の承認を得て事全く定まつた、時に一二六六年である。然るに阿里不哥は一ヶ月の後病んで死し、太祖及び拖雷の墓側に葬られたが、既にして旭烈兀、別兒哥、阿魯忽もまた相次で死んだから、世祖は伊兒汗國を旭烈兀の長子阿八哈(Abaqa)に、欽察汗國を拔都の孫忙哥帖木兒(Mangu Timur)に、察合台汗國を合刺旭烈の子モバンク・シャー(Mobarak Shah)に與へたのである。

旭烈兀の西征 初め旭烈兀が西征の命を受け出發に臨みて入謁するや、憲宗は勅して「服するを撫で抗するを戮せ、先づ木剌夷(Mulalida)の教徒を壓くし、然る後哈利發を屈して蒙古の可汗に従はしむべし、之を命となす」といはれたのである。旭烈兀は一二五三年五月和林を發して己の領内に入り十月征途に就いた、前鋒に後ること約一年である。かくて一二五四年天山の北麓を過ぎて土耳其斯坦に入り、一二五五年九月撒麻耳干に着き、次で柯提(Kashgari)に至りて波斯總督阿兒渾(Arghun)及び呼羅珊諸侯の入謁を受け、波斯諸侯に向けて木剌夷征討に來り會すべき旨の告諭文を發し、一二五六年一月アム河を渡り、蘆眉(Kann)、ファルスの王侯及びイラク・アデミ(Irak Adjemi)、呼羅珊、阿蘭(Arāni)、設里汪(Shirwan)、グルシアの豪族等の迎接を受けて波斯に進發した。

木刺夷の討滅 木刺夷 (Muhabida) はイスラム教の一派イスマイル (Isma'il) 派の教徒をいふのであつて「迷へる者」の義である、元史の太祖本紀には木刺夷、太宗本紀には木羅夷、憲宗本紀には沒里奚、郭侃傳には木乃兮、劉郁の西使記には木乃奚とあるが皆同音異字である、歐羅巴人は之をアッサシン (Assassin) 即ち暗殺派ともいふたのである。此の派はもとイスラム教の一派シイ (Shi'i) 派より出で埃及、シリア (Syria) にもあり、波斯にてはエルブルズ (Elburz) 山中可疾云 (Kazvin) の北方ルドバル (Rudbar) に山寨を構へて住み、またクヒスタン (Kulistan) 即ち呼羅珊の南方一帯の地、乃沙不耳 (Nisapur) 哈烈 (Herat) へズド (Ezud) 亦思法杭 (Ispahan) の間にも居り、ズゼン (Zuzen) ツン (Tun) にも居り、またマザンデラン (Mazanderan) の低廉 (Dion) にも籠り、世襲の君侯を載きて生き神として尊崇し、其の命する所は神意にして違ふべからずとなして居た。初めイスラム教は摩訶末 (Muhammad) の死後スンニ (Sunni) シイの二派に分裂し、更に數十の分派を生じたが、シイ派は摩訶末の女ファチマ (Fatima) の夫アリ (Ali) 及び其の子孫を正統となし、世々之を戴きイمام (Imam) と稱して哈利發に對せしめた。アリの後第六代のイمامたるジャファル・ウス・サヂク (Jafar us Sadiq) の時に、一旦長子イスマイルに其の職を襲がしむることゝ定めたが、イスマイルが酒に耽り不品行であつたから、改めて第二子ムサ・カジム (Musa Kazim) に譲つた。是に於て若し最初の宣言が正しくし

て改むべからざるものとすれば、イスマイルの行が修まらずとも之をイمامとなさねばならぬと主張する一派が起り、遂にイスマイルの子を奉戴するに至つた、之がイスマイル派の發端である。其の後イスマイル派は第十一世紀の末セルジック (Seljuk) 朝の明君マリク・シアー (Malik Shah) が賢相ニザム・ウル・ムルク (Nizam ul Mulk) に任じて國勢の盛なる時に、イラク・アデュミに入りて勢力を得るに至つた。其の基を開きたるものはハッサン・サバー (Hassan Sabah) といひ、宰相ニザム・ウル・ムルクの同窓の友であつて純粹の亞拉比亞人である、彼はイスマイル派の宣教師となりて低廉に居たが大志あり、其の南方エルブルズ山中阿刺模忒 (Alamut) 城を取りて之に俟たらんと欲し、謀を設けて一〇九〇年九月其の守將を逐ひ之に據りて其の附近を平らげ、またルドバルを取り其の他は遊説謀略を以て之を併せ、降らざる時始めて兵力を用ひた。次で尼沙不耳の南方クヒスタンに向ひ宣教師を派遣して之を取るに及び、マリク・シアーは兵を發して之を征討したが、會々マリク・シアーの病死した爲め中止となつたのである。ハッサン・サバーが是の如く成功した所以は刺客を用ひたことに原因する、其の部下の信徒はハッサン・サバーはイمامであるから必ず其の命に従はねばならぬとなした、故にセルジック朝の宰相ニザム・ウル・ムルクの如きも其の毒手に斃るゝに至つた、實に其の主マリク・シアーの死に先だつこと三週間前である、是に於て諸將は常に鎖帷子を着て警戒したといふことである。

後算端 (Sulthā) サンジャーールが之を伐たんとしたるに、其の臥床の前の地に刃を刺し書を遺して「ハッサンは算端に好意を表すが故に算端の胸を刺すべかりし劍を以て地に刺したり、ハッサンは身山中にありと雖もよく遙に左右の手を勞して此のことあらしむ」と書いてあつたから、サンジャーールは大に驚きて遂に出征を罷めたといふことである。一二二四年五月ハッサン・サバーが死するに臨み、子がなかつたから其の朋友であつて勳功ある蘭巴撒耳 (Lembesser) の城主キア・ブスルグ・オミド (Kia Busung Omid) を招きて位を傳へた。オミドの時には刺客を養ふことが益々盛であつて唯にイスマイル派に反對するものを殺したるのみならず、苟も之に好意を表するものは刺客を借りて私忿を洩らすことを得るに至り、サンジャーールの宰相アブル・ナッスル (Abul Nassur)、哈利發ムスルタシッド (Mustashid) 及びラシッド (Rashid) の如きもまた其の刺客の暗殺する所となつたのである。其の刺客を養成する方法はイマムの居城中に宮室苑囿を築きて華美を極め音樂を設け美人を置き、十二歳より二十歳までの膽略ありて死を畏れざる青年を擇び、之に毎日天堂福地の快樂を説きて後にハシシ (Rashisi) 酒を飲ましめ、酔うて昏迷するに乗じ之を宮室の中に入れて快樂を縦にせしめ、其の後また酔はしめて之を出し醒むれば其の遭遇せる所を詢ひ、「摩訶末の所謂天堂福地も之に過ぐるものなし、老を此の郷に過ぐすは快ならずや」と説き、よりに刺客の任務を授け、事成らば其の故處に復すべく、事成らずして死

するも魂魄天に昇りて樂を享くべしといふから、皆踊躍して命を奉じ或は商賈となり或は奴僕となり其の任務を行つたといふことである。ハシシ酒は麻の葉の液汁を醸して造るから、此の刺客をハシシン (Hashishin) と稱したが、歐羅巴人は之を訛りてアッサツシン (Assassin) といひ、是を以て暗殺の語となすに至つたのである。一一三八年オミドが死して其の子モハメッド (Mohammed) が立ち、二十五年を経て其の子ハッサンが嗣いだ。從來イスマイル派は埃及のファチマ朝の算端をイマムとして之に屬して居たが、ハッサンに至り獨立して之を仰がず自ら見えざるイマムの代理者であつて算端の代官ではないと稱し、一一六四年八月信徒を集めて埃及と關係を絶つ宣言をなし、爾後己れをイマムと信せよと告げ、大宴會を開きて酒を飲み縦に樂しむべしと命じた。元來飲酒はイスラム教の禁する所であるから、他のイスラム教徒は之を目してムラヒダ即ち迷へる者といふに至つたのである。一二〇一年モハメッドが死して其の子ヂェラル・ウッチン・ハッサン (Djeral ud-din Hassan) が立ち、先代の行動を非難して頗る改良する所あり、一二二二年ハッサンが死して其の子阿刺丁 (Alai ud-din Mohammed) が僅に九歳を以て位に即いた。既にして元の太祖が西征してアム河を渡るや阿刺丁は使を遣はして款を納れ、太宗の即位の時には使を遣はして之を賀し、定宗の時にもまた其の使を送つたが禮せられずして還つた。後憲宗が位に即き旭烈兀をして西征せしむるや、先づ木刺夷を慶すべきを命じた、蓋し嘗て刺

客の狂暴なるを聞いたからである。かくて旭烈兀が進んで波斯に入る前既に怯的不花 (Khidhka) がクヒスタンを平らげ、擔塞 (Danezan) に至り吉兒都怯 (Girkukh) を圍ふこと二年にして陥らず、旭烈兀の至るに及び庫喀伊而喀 (Kuka Ika) を遣はして銳意之を攻めしめた。是に於て二將は先づツン (Tun) を取り、次で吉兒都怯を陥れて旭烈兀と徒思 (Tus) に會したのである。此の間木刺夷の主阿刺丁は阿刺模忒にありて頓に死し、其の長子魯兀乃丁 (Roknud-din Kushah) が立ちてメイムンヂズ (Meimudiz) にあり使を遣はして降を請ひ、且つ諸城に使を派し命じて兵を止めしむる爲めに一年の猶豫を請ふた、蓋し是によりて蒙古軍の攻撃を緩くせんと圖つたのである。旭烈兀は其の意思を知りて之を許し、諸城を毀ちて魯兀乃丁自ら來るべしと命じたるも遂に至らず、メイムンヂズ、阿刺模忒、蘭巴撒兒の三大城を固守して居たから、旭烈兀は兵を三道より進め自ら中軍に將としてメイムンヂズを圍み、人を城中に遣はして降を諭し、且つ五日を限りて出で降らば命を全うせしむべしと約したから、魯兀乃丁は勢窮まりて其の臣と共に出で、降つた、時に一二五六年十二月である。次で魯兀乃丁は使を遣はして蒙古官吏と共に四十餘城を諭し降らしめて悉く之を毀つたが、阿刺模忒、蘭巴撒兒の二城が尙ほ命を拒んだから、旭烈兀自ら阿刺模忒を攻めて之を降し、クヒスタンの五十餘城を毀ち、別に將を遣はして蘭巴撒兒を攻めしめ、久しくして漸く之を陥れた。次で使を遣はして木刺夷のシリア

にあるものを諭し降らしめ、全く平定するに至りて魯兀乃丁を殺さんと欲せるも、既に誓約があるから之に背くを憚り、魯兀乃丁の請を許し蒙古に入朝して憲宗に謁せしめ、歸途に於て之を斬らしめたのである。木刺夷の將士は魯兀乃丁の出發せる後悉く殺され、魯兀乃丁の家族もまた悉く斬られたから、イスマイル派の教主イマムの血統は茲に絶えたのである。

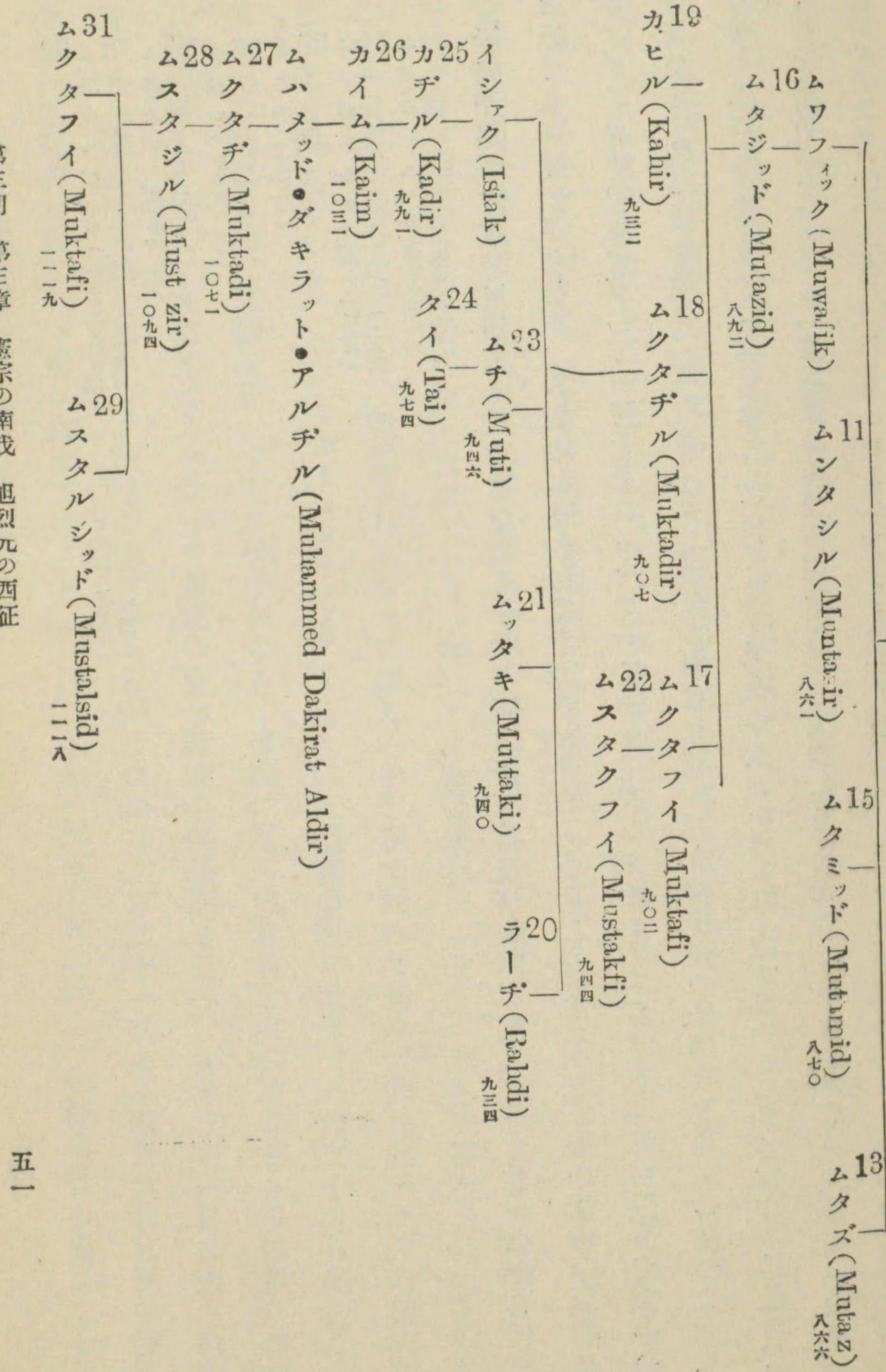
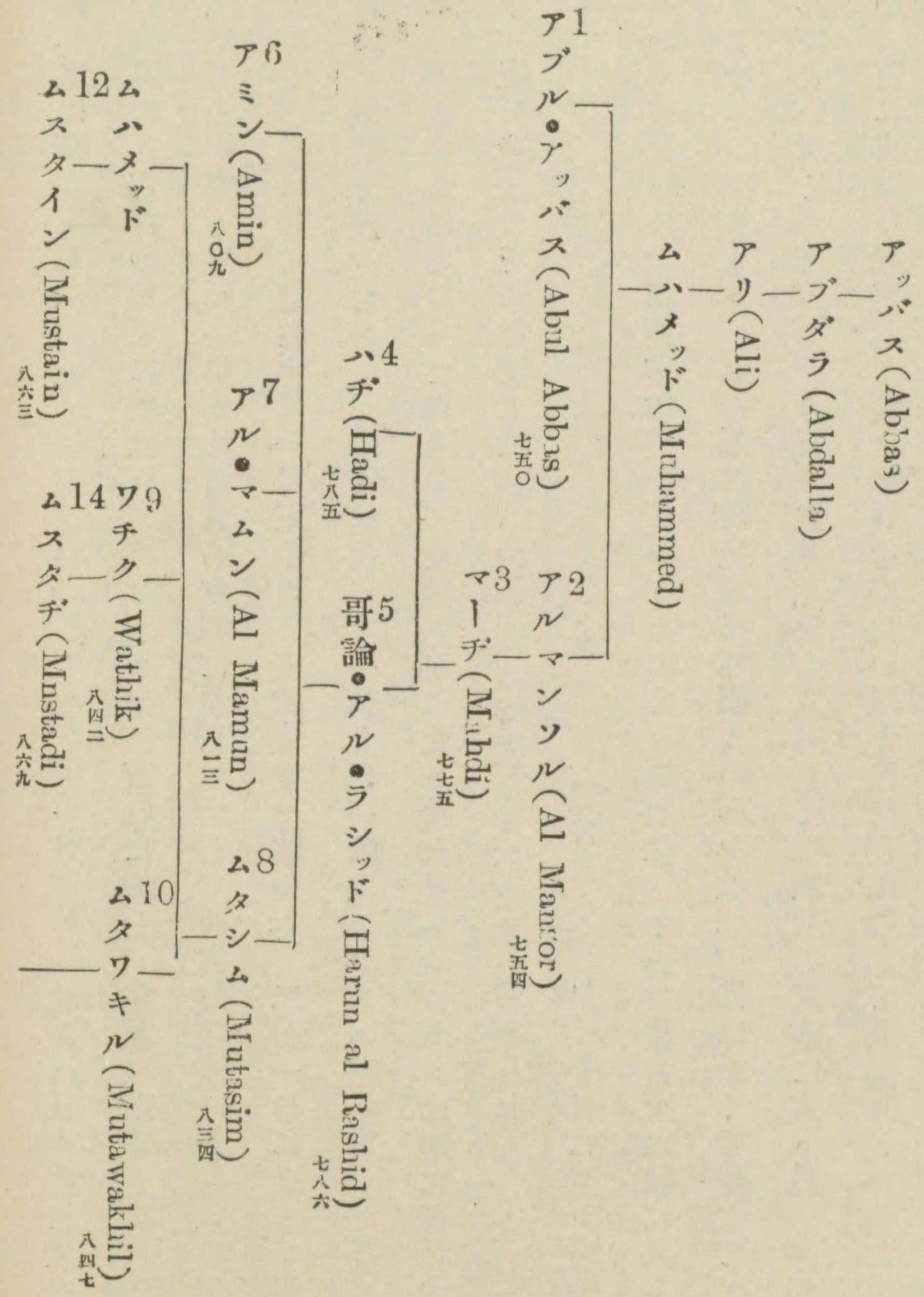
アッバス朝の討滅 八吉打のアッバス (Abbas) 朝は歴代其の軍隊が強く人民もまた信仰が篤いから、從來數回あつた蒙古の侵寇も遂に無効に終つたが、旭烈兀は既に木刺夷を平定したる勢を以て之に向つた。蒙古がアッバス朝を敵視したのは別に深い理由があつたのではなく、唯其の入朝せざるを責め之をして其の禮を行はしめんとするに過ぎなかつたのである。時に徒思 (Tus) の人那昔兒丁 (Nasir ud-din) が旭烈兀に仕へて信任せられ天文学に通じて有名であつたが、もとイスマイル派の信徒であつて八吉打の哈利發に反對して居たから、旭烈兀に勧めて遂に之を征討せしめたともいはれて居る。當時の哈利發ムスタシム (Mustasin) は性質温厚であつたが決斷を缺きて精力乏しく、政務は擧げて待從長 (Devatar) に一任し自らは常に宴遊に耽つて居た。また其の政府にありて最も勢力のあつたものは近衛六萬騎の長官ソレイマン・シマー (Soleiman Shah) であつた。之に次ぐものは宰相ムアイヤド・ウツヂン・ムハメッド・イブン・アルカミイ (Muayyad ud-din Muhamed Ibn Alkamisi) 等であつた。アルカミイはも

シイ派の信徒であつたが早くからアッバス朝に仕へ、事によりてシイ派の危急と虐待を見て遂に不軌を圖り、旭烈兀に款を通じて八吉打の内情を漏らしたのである。是に於て旭烈兀は一二五七年九月先づ使者を八吉打に遣はして哈利發に降を勧めたるに、傲然として之に應じなかつたから遂に計を定め、當時蘆眉 (Rum) にありたる波斯總督貝住 (Baidin) を右翼となし、毛夕耳 (Mosul) に出でチグリス (Tigris) 河を濟りて八吉打の西に進ましめ、之が應援としてスグンヂェク (Sugundjia) 顧問の下に朮赤の孫ボルガ (Bolga)、ツタル (Tutar)、クリ (Kuli) の三人を遣はし不花帖木兒 (Buka Timur) を之に總督たらしめ、左翼は怯的不花、クヅスン (Kudusun) を將とし羅耳スタン (Luristan) に入りて八吉打の東南に進ましめ、旭烈兀自ら中軍に將として郭侃、庫喀伊而喀 (Kuka Ilka)、オロクツ (Oroktu) 等を従へ、ハマダン (Hamadan) を發して乞里茫沙抗 (Kernanshan) を過ぎホルワン (Holwan) 河を渡りて八吉打の東に進んだ。時に哈利發ムスタシムは副侍從長アイベグ (Aisbeg) 及び將軍フェト・ウッヂン・イブン・コレル (Feth ud-din Ibn Corer) をしてホルワン街道を守らしめたが、彼等は一二五八年一月スグンヂェクの率ゐる蒙古軍の前鋒の來るを見てチグリス河を渡りて之を逆撃し、蒙古軍の退くを追うてドヂェイル (Dodgeil) 渠邊に戦ひ勝敗が決しなかつたが、夜に入り蒙古軍がチグリス河の堤防を決して八吉打軍の營を浸し、翌日戦つて八吉打軍が大に敗れフェト・ウッヂン以下多くは戦

死し水に溺るゝものも多く、アイベグのみが纔に身を以て免かれ八吉打に入つた。既にして蒙古軍の右翼が八吉打の城下に現はれてチグリス河の西岸に陣し、左翼は南下して八吉打の近郊に現はれ、旭烈兀の中軍もまた一月十八日其の東郊に達したから、八吉打は遂に蒙古軍の包圍する所となつたのである。是に於て蒙古軍は一月三十日より總攻撃を開始し、二月一日に至りて櫓閣全部を破壊した東邊の城壁を破つたから、副侍從長以下一萬人の一隊はチグリス河を下つて遁れんとしたるも、蒙古軍の阻止する所となりて果さず、攻撃六日に亘り哈利發ムスタシムは遂に抗守すること能はざるを知り、使を遣はして降を請ふたから旭烈兀は侍從長及び大將を召すに及び、七日アイベグ及びソレイマン・シアーは已むを得ず部下を率ゐて來り謁し翌日悉く斬られ、十日に至り哈利發ムスタシムは遂に其の三子を伴ひ、親族官紳三千人を率ゐ出で、降つた。十三日蒙古軍は城に入りて殺掠を始め唯ネストリウス (Nestorius) 派の基督教徒及び外國人のみを赦し、他は悉く殺戮して七日間に八十萬人に及んだといふことである。十五日旭烈兀自ら入城して哈利發の宮殿に入り悉く内帑の金銀珍寶を出さしめ、更に窖藏を發掘して黄金珍異を得たが城中は伏尸山積して異臭甚しかつたから、二十日城を出でてヴァカフ (Yakaf) に陣し、翌日哈利發ムスタシム及び其の三子を併せて之を殺した、アッバス朝は始祖アブル・アッバス (Abul Abbas) からは是に至るまで三十七代五百九年にして亡びた、時に一二五八

年二月二十一日である。

アッバス朝の世系 (三十七代、五百九年)



第三期 第三章 憲宗の南伐 旭烈兀の西征

- 32 ムスタンジッド (Mustanzid) ¹¹¹⁰ ラシッド (Rashid) ¹¹¹⁹
- 33 ムスタチ (Mustachi) ¹¹⁴⁰
- 34 ナシル (Nasir) ¹¹⁵⁰
- 35 サヒル (Sahir) ^{1111H}
- 36 ムスタンシル (Mustasir) ^{1111H}
- 37 ムスタシム (Mustasim) ^{1141H-1156H}

伊兒汗國の建設 旭烈兀は八吉打を去るに當り庫喀伊而喀及び哈刺不花 (Karabuka) に命じ兵三萬を以て八吉打を守らしめ、不花帖木兒をして進んで瓦夕的 (Vassit)、苦法 (Kufa) 等の諸市を攻略せしめ、ヅアカフの營を撤して四月十七日ハマダンに歸り、次でウルミア (Urmia) 湖畔に赴きて湖中のタラ (Tala) 島に城を築き、八吉打に於て獲たる財寶を藏め、また夥多の分捕物を憲宗に送つた。八月の初め旭烈兀はマラガ (Maragha) に於て毛夕里侯の入朝を受け、次でタブリス (Tabriz) に赴きて茲に都を奠め、ファアルス、蘆眉及び西亞細亞諸王侯の入朝を受けたのである。是より先きシリア侯ナシル・サラ・ウツデン・ユッスフ (Nasir Sala ud-din Yussuf) はアレポ (Aleppo) を兼領し、更に

埃及領たる的迷失吉 (Damascus) を併せ使を蒙古に送りて憲宗から安堵狀を得たが、旭烈兀の八吉打征伐に當り唯其の幼子と宰相とを遣はして入謁せしめ、自ら赴かなかつたから旭烈兀は之を伐たんと欲し、先づ勸降狀を送りたるに傲慢なる返翰に接したから命を傳へて軍をシリアに進めた。是に於て怯的不花が前軍を率ゐて發し、シンクル (Shinkur) 及び貝住は右翼を、スグンヂアクは左翼を率ゐ、旭烈兀は中軍を指揮して一二五九年九月エウフラト河に向つて進んだ。時にナシル・ウツデンは的迷失吉の北ベルゼ (Berze) にありて蒙古軍が既にメソポタミア (Mesopotamia) を略せるを聞き、其の妻子をして財寶を携へて迷思耳 (Misir) 即ち埃及に避けしめたるに士卒もまた遁れ去るもの多く、已むを得ず援を迷思耳の算端に請ふたのである。既にして蒙古軍がアレポに達し攻撃七日にして一二六〇年一月二十四日之を陥れ、殺戮五日に亘り旭烈兀の命を以て始めて止み、内城は一ヶ月の後陥落した。此の間ナシル・ウツデンは尙ほベルゼにありてアレポ陥落の報を聞き、一月二十九日僅少なる部隊を率ゐる的迷失吉に守備を置かずして去つたから、市民は遂に代表者を旭烈兀に送りて夥多の進物と城門の鍵とを呈し、旭烈兀は之を受けて市民の生命財産の保證狀を與へ、次で三月一日に至り怯的不花が兵を率ゐて入城したるも、内城が未だ降らなかつたから三月二十一日より四月六日に至る間に之を陥れて掠奪を行つた。會々旭烈兀はアレポに於て憲宗死去の報に接し、怯的不花を留めてシリア

軍の司令官となし、ファクル・ウツヂン (Fakr ud-din) をアレクサンドリアの知事に、バイテラ (Baidara) を的迷失吉の知事に任じてタブリーズに歸り、次で其の領内に歸らんと決したるに既にしてシリアが迷思耳軍の奪ふ所となつたから、遂に東歸の念を絶ちタブリーズに駐まりて伊兒汗 (Ilkhan) と稱し、アム河より西波斯小亞細亞等の地に君臨したのである。

迷思耳軍の侵入 時に迷思耳即ち埃及は數年來蒙古人の禍害から免かれたるものゝ避難所であつたが、既にして蒙古の使節がカイロ (Cairo) に來り、算端クツズ (Kutuz) に降服を勧め拒まば宣戰すべしと畏嚇した。是に於てクツズは將士を集めて開戰を決し、出發に臨みて蒙古の使者を斬り、國內にイスラム教防禦の爲め進發すべき命を下し、各地の知事をして悉く其の地方の軍人を徵發せしめたのである。此の頃怯的不花はバルベック (Balbeck) に居り、迷思耳軍の進行を知りて其の分散せる兵をシリアに集め、一二六〇年九月三日アイン・イ・ジャルト (Ain-Jalut) の原に迷思耳軍と戰つて敗れ、怯的不花は陣没し蒙古軍は全滅した。クツズは書信的迷失吉に送りて戰勝を告げ尋で之に入り、將軍ビバルス (Bibars) は蒙古軍追撃の命を受けてヒムス (Hims) 地方まで至り、ノヤン・イルガ (Noyan Ilga) は殘餘の蒙古人と共に蘆眉の領内に退いたのである。是に於てエウフラト河より埃及の境に至るシリアの地は、蒙古の羈絆を脱してクツズを其の領主と仰ぐに至つたが、クツズが歸途に就くやビバルスは途に之を刺殺して迷思耳に歸り、自立して算端となつたのである。

第四章 世祖の一統及び外征

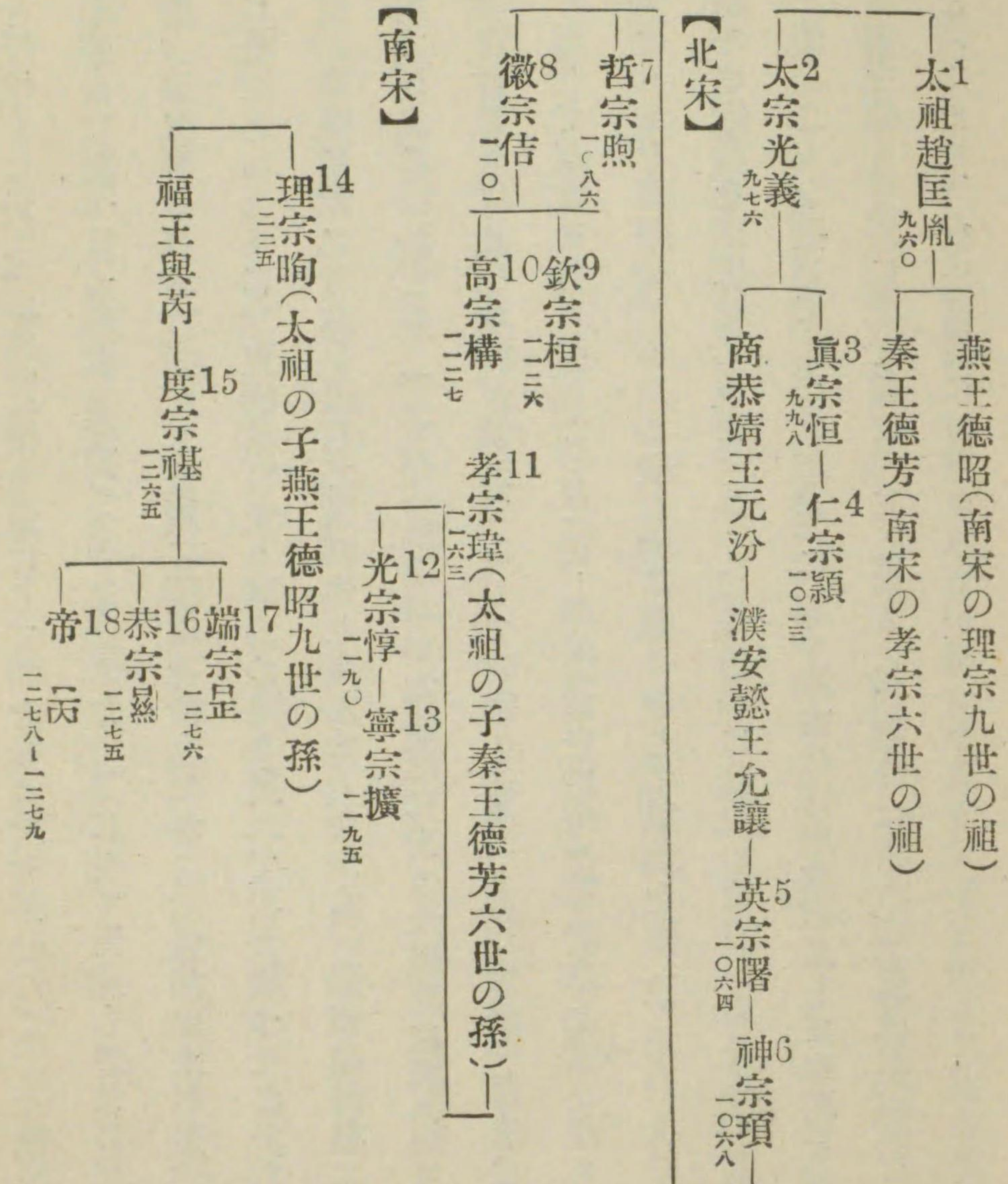
宋の討滅 曩に蒙古軍の北に去るや宋の賈似道は、臣と稱して歲幣を納れ地を割くを約せることを深く祕し、己の力を以て鄂州の圍を解きたりと奏したから理宗は之を信じ、其の功を嘉みして厚く賞賜するに至り、賈似道は益々威福を弄びて國難を顧みなかつたのである。元の世祖は既に位に即き郝經を宋に遣はして之を告げ、好を修めて所約の履行を求めしめたるに、賈似道は詐謀の暴露せんことを懼れ郝經を囚へて還さず、また多く正人を貶黜したるも理宗は之を知らず、益々賈似道を寵遇して邸宅家廟を賜ふに至つた。是に於て世祖は大に怒り一二六三年征南大將軍阿珠をして宋を伐たしめ、元軍が進んで襄陽を圍んだから守將呂文煥は急を臨安に告げたが、賈似道は之を救はなかつたのみならず、一二六四年理宗が死して其の子度宗が立つや、益々其の寵任を得て日に宴樂に耽り群小と狎遊して居たのである。既にして元軍がまた樊城(湖北省襄陽府北)を圍み、宋將范文虎は襄陽を救ひたるも敗れて走り、張順は敗死して元軍に降るものが日に多かつたが、賈似道は言路を杜絶して帝に白さず太平を粉飾して居た。一二七三年樊城が遂に陥りて元兵が悉く襄陽に集まるに及び、呂文煥は宋廷の援の至らざることを知り、遂に堅守六年の節を棄て、元に降つたのである。一二七四年度宗が死して其の子

恭宗が立つに及び、世祖は宋の喪に乗じ伯顔(Bayan)をして師を督して之を伐たしめ、鄂州が遂に陥りて范文虎等の諸將は皆元に降るに至つた。是に於て賈似道は己むを得ず都督府を臨安に置きて勤王の士を募り、自ら出で、蕪湖に至り使を馳せて和を請ふたが、伯顔は之を許さずして兵を進め、江淮の州郡が皆元に没し賈似道は揚州に奔りて連りに遷都を請ふた。既にして張世傑、文天祥等の勤王の兵が至り、陳宜中が丞相となりて賈似道を却け、次で之を貶殺して恢復を謀りたるも事既に遅く、元軍は既に岳州(湖南省岳州府巴陵縣)に入り江陵を侵し潭州を陥れた。時に宋の諸關の兵は悉く潰えてまた收拾すべからざるに至り、元軍が臨安に迫まつたから謝太后は遂に使を元軍に遣はし、臣と稱して歳貢銀絹二十五萬を輸すべきを約し和を請ふたが、伯顔が之を許さなかつたから陳宜中は計の出づる所を知らず、連りに遷都を請へるも太后が許さなかつたから夜遁れ、太后は遂に璽を奉じて降り、伯顔が臨安に入りて府庫を封じ圖書符印を收め、恭宗及び理宗度宗の皇后を執へて北に送つた。時に一二七六年三月である。是に於て陳宜中、陸秀夫、張世傑等は恭宗の兄益王昀を福州に立てた、之が端宗であつて陳宜中は左丞相となり、張世傑は少保となりて文天祥等と恢復を謀つたが、既にして元將阿剌罕(Arakhan)が來り侵したから、陳宜中等は端宗、太后、衛王丙を奉じて海に航し、潮州より廣州に至り謝女峽(廣東省廣州府香山縣海中の島)に泊して居た。時に文天祥、張世傑等は連りに諸州を徇へたるも利なく、元軍が進んで廣

州に至るに及び張世傑は端宗を奉じて秀山(廣東省廣州府東莞縣西南海中の島)に航し、陳宜中をして援兵を占城に請はしめたが遂に歸り來らず、張世傑はまた漂泊して謝女峽に還つたのである。一二七七年元の都帥張弘範が閩廣に入りて端宗を礪州(廣東省高州府吳川縣南の島)に窮追したが、既にして端宗は茲に死し其の弟衛王丙が八歳を以て帝統を繼ぎ、陸秀夫が諸臣を勵まし張世傑と共に銳意恢復を謀りて帝丙を奉じ厓山(廣東省廣州府新會縣南の島)に遷つた。時に文天祥は潮陽(廣東省潮州府)に屯して群盜を討ちしに會々張弘範が兵を率ゐて來り戦ひ文天祥は支ふる能はずして海豐(廣東省惠州府海豐縣)に走らんとし、五坡嶺(海豐縣の北)に至り元の追兵に執へられて燕京に送られ、屢々降を勧められたるも屈せず正氣の歌を作りて志を述べ、遂に四十七歳を以て燕京の柴門に斬られたのである。是に於て張弘範が兵を集めて海陸より厓山に迫つたから、張世傑は大船千餘を連結し一字陣を作りて海中に碇泊し、大索を以て中艙外艙を貫き四周に樓棚を起して城堞の如くし、帝丙を奉じて其の間に居り死計をなした。一二七九年一月張弘範が來り舟師を以て海口に據り、張世傑は部下を率ゐて旦夕大に戦ひ、二月に至り張弘範は其の軍を四分して相距ること數丁となし、自ら一軍に將として諸將に「宋の舟西厓山に艤す、潮至れば必ず東に遁れん、急に之を攻めて去るを得しむる勿れ、吾が樂の起るを聞かば乃ち戦へ、令に違ふものは斬らん」と令し、先づ北面の一軍を磨き早潮に乗じて戦ひ張世傑の爲めに破られて退いたが、既にして午潮の上るや宋軍は元の軍中に樂の起

るを聞き、暫く懈るものとなして備を設けなかつたから、張弘範は舟師を以て其の前を犯し南面の軍が之に繼ぐに及び、宋軍は南北より敵を受け兵士は皆疲れて戦ふこと能はざるに至り、張世傑は事の去るを知り乃ち精兵を抽きて中軍に入り、諸軍大に潰えて元軍が宋の中軍に薄つた。會う日が暮れて風雨が起り昏霧が四方に塞つて咫尺を辨じなかつたから、張世傑は維を絶ち十六舟を以て港を奪うて去つたのである。是に於て陸秀夫は帝の居る所の舟に走つたが、舟が稍々大きくして且つ諸舟が環結してあつたから、出走すること能はざるを度り先づ其の妻子を驅つて海に入れ、次で帝を負うて海に投じ、後宮諸臣もまた従つて死するもの甚だ衆く、餘舟八百は悉く張弘範の得る所となり、後七日を経て死屍の海上に浮ぶものが十餘萬に及び、其の中に帝の死屍及び詔書の寶を得たといふことである、時に一二七九年二月である。張世傑は小舟を以て楊太后を奉じて脱し去り、再舉を謀らんとして占城に航せしも土豪の防ぐ所となりて廣東に還り、太后の既に死せるを聞き兵を收めて海陵山(廣東省潮州府海陽縣南の島)に至り、颶風に遭ひ舟が顛覆して死んだ。是に至りて宋の遺族遺臣は盡く亡び支那は遂に元の一統する所となつた。宋は太祖より帝昚に至るまで十八代三百二十年にして亡びたのである、而して北宋は九代百六十七年、南宋は九代百五十三年である。

宋の帝系(十八代、三百二十年)



元の東侵

高麗は高宗の時質子を送りて蒙古に降り、次で太子僎を遣はして朝見せしめ江華の城を

壞り、後高宗が死し太子が還りて位に即いた、之が元宗である。是より先き日本の邊民が高麗の州縣を侵掠したから、元宗は使を遣はして和を修め之を禁せんことを請ひたるも効なく、遂に倭寇の事を蒙古に訴へ且つ日本の伐つべきをいふた。是に於て世祖もまた日本を従へんと欲し一二一六七年黑的、般弘等を日本に遣はし高麗に嚮導を命じたから、元宗は宋君妻、金贊に命じて黑的等と共に日本に赴かしめたるに、巨濟島に至り風濤の險を畏れて引き還つたのである。明年世祖はまた黑的等を遣はし高麗に命じ日本を諭して入朝せしめんとしたから、元宗は潘阜に命じ蒙古主の書及び國書を齎らして日本に行かしめ、一二一八年潘阜が太宰府に至り太宰府は其の書を受けて之を鎌倉に送つた。此の時鎌倉幕府は北條政村が執權であつて時宗が連署であつたが、幕府は其の書辭の無禮なるを以て朝廷に奏して返牒を與へざることに決し、太宰府に命じて潘阜を逐ひ還さしめたのである。然るに世祖は尙ほ日本を屈服せしめんと欲し、高麗に命じて軍須を備へしめ、次で黑的、般弘を導いて日本に赴き前年の返牒を催促せしめた。かくて黑的等は高麗の使者申思佺等と共に一二一九年對馬に至りて島民と争ひ二人を掠めて去つたが、既にしく蒙古は俘虜を送還して來聘を促すこと急であつたから、朝廷は答書を作りて將に之を發せんとしたるに、幕府は蒙古の書辭が無禮なるを怒り抑へて送らしめなかつたのである。會々高麗には權臣林衍が廢立を謀り元宗を廢して其の弟安慶公攄を擁立したから、世祖

は趙壁に命じて兵を平壤に集め往いて其の罪を問はしめたるに、林衍は既に死して元宗が位に復したが、林衍の餘黨が耽羅島に據りて濱海を侵寇したから、高麗の將金方慶が蒙古の將忻都と共に討つて之を平げた。是に於て高麗は武臣跋扈の禍が始めて息みたるも、是より蒙古の專制を受くるに至り、蒙古は慈悲嶺以北の地を收めて其の領土となしたのである。一二七一年蒙古は國を元と號し、尋で趙良弼をして日本に使せしめ兵を發して之を高麗に送り、高麗はまた康允紹等をして隨ひ行かしめた。趙良弼等が筑前の今津に至るや太宰少貳武藤經資が兵を率ゐて至り、其の國書の謄本を求めて之を鎌倉に送り幕府は更に之を朝廷に獻じたが、其の書辭の無禮なるを以て答へざることもこの如く、太宰府に命じて趙良弼等を逐ひ還さしめ、更に鎮西に令して兵備を修めたのである。明年高麗の使がまた日本に赴きて元との通好を勧め、次で元使趙良弼が再び太宰府に至りたるも、共に志を果さずして還つたから、世祖は遂に意を決し一二七三年忻都、洪茶丘等をして日本を伐たしめ、高麗は金方慶、金洗、金文既をして之を助けしめ、蒙漢の軍二萬五千、高麗の軍八千、戰艦凡そ九百艘を率ゐて合浦慶尙道洗原府により發し、對馬、壹岐を取り肥筑の沿海を侵したが、大雨風に遇ひて戰艦は破れ金洗は溺死し士卒一萬三千餘人を失ひ漸く餘衆を收めて逃れ歸つた、時に我が龜山天皇の文永十一年であるから之を文永の役といふのである。此の役に戰艦器械糧食等は皆高麗の辦する所であつて上下其の弊に堪へ

ざるに至り、明年金方慶を元に遣はして征東の師を罷めんことを請はしめたから、世祖はまた杜世忠、何文著等をして日本に赴き修交を求めしめ、杜世忠等が長門の室津に至り太宰府に回航するや、執權北條時宗は之を鎌倉に護送せしめ、杜世忠以下五人を龍口に於て斬り外交の強硬なるを示したのである。此の間高麗の元宗が死して其の子忠烈王が立ち、太子たる時より元に行きて世祖の女を娶り後屢々元に入朝して居たから、其の意を逢迎して船を造り兵を發して日本を伐たんことを請ふた。是に於て世祖は宋を滅ぼせる勢に乗じて日本を再び征することに決し、一二七九年宋の降將范文虎の言を用ひ周福、變忠等をして日本に至らしめたが、書辭の無禮なること前と異ならなかつたから、時宗は其の使を博多に於て斬らしめ合して九州の兵備を修めた。時に元は征東行中書省を高麗に置き忠烈王に命じて軍務を掌ごらしめ、一二八一年忻都、洪茶丘等に命じ蒙漢及び高麗の軍四萬人、戰艦九百艘を率ゐて合浦を發せしめ高麗の金方慶が之に従ひ、范文虎は別に江南軍十餘萬人、戰艦二千五百艘を率ゐて江南より發し、全軍凡そ十四萬餘人を以て日本に向つた。かくて肥筑の海上舳艫相銜みて頗る攻戰に力めたが、會々颶風が大に起りて戰艦は多く覆没し日本軍が之に乗じて掩撃したから、餘衆は纔に逃れて高麗の境に至ることを得たのである。此の役に元の兵は十三萬餘人であつて生存するものが僅に三萬人、高麗の兵は一萬人であつて死せるものが七千餘人であつた、時に我が後宇多天皇の弘安四年で

あるから之を弘安の役といふのである。然るに世祖は尙ほ懲りず其の後屢々高麗に命じて戰艦を修め糧餉を貯へてまた日本を討たんと謀り、高麗もまた金有成を日本に遣はして之を招諭せんとしたが拘留せられて還らず、既にして世祖が死んだから其の事は遂に息んだのである。

緬國の征服 緬國は今の緬甸即ちブルマ (Burma) であつて早くから印度と交通して佛教を奉じ、此の頃國勢が頗る興隆し蒲甘に (Pagan) に都して阿羅漢 (Arakan)、白古 (Pegu) を併せ、また暹國即ちシヤム (Siam) を略して勢を振うて居た。曩に元が大理を征服して雲南を領するや屢々使を緬國に遣はして朝貢を命じたが、其の王ナラチハバヂ (Narahapadi) は之に應じなかつたから、一二七七年雲南都元帥納速刺丁 (Nasir ud-din) が兵を率ゐて緬の界に入り、其の三百餘砦を降したるも炎熱甚しきを以て師を還へし、具に其の撃つべき狀を上言したから、世祖は一二八二年諸王相吾答兒 (Sangha) に命じ諸軍を督して往いて之を伐たしめたのである。かくて相吾答兒は一二八三年進んでイラワヂ (Irawadi) 河に沿うて入り、諸所に勝つて江頭 (Kam-taung) 城を拔き、また使を遣はして招諭したが緬王は之に應せず遁れて南の方白古に奔り、太公 (Tagaung) 城に據つたから元軍は水陸兵を進めて遂に之を抜いたのである。切め阿撒母 (Assam) 一地方に散居せる金齒等の諸蠻は元に降らんと欲し緬に制せられて果さなかつたが、是に至りて皆元の威風を望んで來り降り朝貢するに至つた。既に

して元軍は糧食が盡きたから引き還り緬土もまた國都に還つたが、到底元に敵すべからざるを知り一二八七年遂に降を請うて歳貢を納るゝことを約したのである。

占城安南の征服 占城(Champa)の國は安南の南にあつて東京(Tongking)から甘蒲寨(Camboja)に至る全海岸を包括し、初め元の招諭に應じて内附したが後其の險要を恃んで元の使者を執へたから、世祖は怒りて一二八二年唆都(Seget)を遣はし、淮浙福建湖廣の軍五千、海船百艘、戰船二千五百艘を發して進討せしめた。かくて唆都は明年占城を攻めて之を破り其の王は遁れて山谷に入つたが、後其の臣を遣はし陽に歸附を求めて帥を緩め、潛に執ふる所の使者皇甫傑等百餘人を殺すに及び、唆都は漸く其の詐を覺り兵を進めて之を攻めたるも敗れて遂に引き還つたから、世祖は一二八四年更に阿塔海(Atakhai)に命じ兵一萬五千人、船三百艘を率ゐて占城を征せしめ、また皇子脱歡(Togan)を鎮南王となし雲南から陸路進討して海軍に應援せしめたのである。脱歡は路を安南に假り且つ其の糧餉を徵せんと欲せしに、安南王陳吟は其の國の占城に至る水路が便ならずと稱して之に應せず、兵を發して元軍を境上に拒いだから、脱歡は一二八五年先づ安南を伐ち其の都城を陥れて陳吟を走らしたが、元軍は暑氣の爲めに病に罹るもの多く、到底占城に達する能はざるを以て軍を還へし、安南軍の追撃を受けて大に敗れ唆都以下の將士が多く戰死したのである。然るに世祖は一二八七年また脱歡に命

じて安南を征せしめた、此の時元軍は兵を三道に分ちて水陸並び進み、其の國都を陥れて陳吟を海上に走らしたが、將士が多く疫に罹りて進む能はず諸蠻がまた叛きて得る所の險扼は皆守を失するに至り、遂に軍を還へしたがまた追撃を受けて大に敗れた、時に一二八八年である。かくて世祖は占城及び安南の征討に成功しなかつたが、幾許もなく安南王陳吟は使を遣はして罪を謝し金人を貢したから、占城もまた風を望んで來り降つた。次で世祖は屢々使を遣はして安南王に入朝を勧めたるに遂に來たらなかつたから、一二九三年諸王亦里吉剌(Hohikan)に命じてまた之を伐たしめんとしたが、明年世祖が死んだから兵を罷めたのである。

瓜哇征伐 初め世祖は孟洪を遣はして瓜哇(Java)を招諭せしめたるに、瓜哇人が孟洪を執へ其の面に黥して還へしたから、世祖は一二九二年亦黑迷失(Khumes)、史弼、高興に命じ福建の兵三萬に將として之を伐たしめた。時に瓜哇王は其の隣境葛郎(Kulang)國王の爲めに殺され、其の婿土罕必閣耶(Tuhan Vijaya)が援を元軍に請ふたから、史弼等は之を諾し攻めて葛郎國王を捕へ歸つたが、既にして土罕必閣耶が叛いたから史弼等は力戰して之を却け、漸く歸ることを得たるも死者三千餘人、貨貝五千餘萬を亡失して何等得る所がなかつたのである。

海外諸蠻の服屬 世祖はまた使節を發して南方の諸蕃を招致したから、一二八二年以來俱藍(Kulana

印度の、馬八兒 (Mabar 印度の南海岸)、須門那 (Somnath 印度の西南海岸)、僧急里 (Sangkili 印度のマラバール海岸)、南無力 (Jambri 蘇門答刺の北岸)、馬蘭丹 (Malantan 蘇門答刺の一部)、那旺 (Nawan 緬甸の西南ナ)、丁呵兒 (Janggala 瓜哇の一部)、來々 (Lohoh 暹羅の急蘭亦得 (Kelantan 馬來半島の東岸)、蘇木都刺 (Sumatra) 等の諸國が相次で朝貢するに至つた、また世祖は一二九一年楊祥、吳志斗等を遣はして琉球を招諭せしめたが、明年吳志斗が途に於て死んだから、遂に行を果さなかつたのである。

蒙古帝國の最大版圖と統治法 元の世祖の時蒙古帝國の版圖は北亞細亞の北部と南亞細亞の南部とを除き、亞細亞大陸を横貫して歐羅巴に跨り、蒙古の諸王侯は此の大帝國内に分封されたのである。而して其の最も大なるものは、アム河より西の方亞細亞一帯の地を領する伊兒汗國 (ダブリス) 其の北にありて東は吉利吉思曠原より西は匈牙利の國境に至り、禿納河下流の地、高加索山以北を領する欽察汗國 (薩來に) シール河外天山附近一帯の地を領する察合台汗國 (阿力麻里に) 阿爾泰山附近を領する窩闊台汗國 (也迷里に) 支那本部を中心として遼東、内外蒙古、青海、圖伯特、中央及び東南亞細亞を直領し、且つ高麗、安南等の諸國を羈縻する元室 (燕京に) があつた、かくて元の世祖は蒙古の大汗として此の大帝國に臨み、阿母河行省を建て、葱嶺以西を統べ、嶺北行省を置きて杭愛山以北を制し、阿力麻里元帥府を設けて天山北路を監し、別失八里元帥府を設けて天山南路を制し、遼陽行省を置きて滿

洲及び朝鮮を督せしめたのである。

蒙古帝國の領土擴張表

時代	征服したる地方
太祖帖木眞	内外蒙古、滿洲、支那の東北及び西北部、天山南北兩路、中央亞細亞、阿富汗斯坦、波斯の東部及び北部、高加索附近
太宗窩瀾台	支那の中央部、朝鮮、西伯利亞の西南部、歐羅巴の東北部
憲宗蒙哥	支那の西南部、圖伯特、安南、西亞細亞一帯、印度の西北小部
世祖忽必烈	支那の南半部、亞細亞の東南部

第五章 世祖の治 海都の亂

世祖の治績 元の世祖は一二六〇年帝位に登り初めは開平に都したが、一二六四年更に都を燕京に奠めて大都と號し開平を上都といひ、一二七一年國號を建て、元といふた、蓋し易の乾元の義を採つたのである。世祖は希世の英傑であつて嘗て外征のみならずまた内治にも意を注ぎ、官制を定め、兵制を革め、儒學を尙び、學藝を奨勵し、宗教を崇め、材に任じ能を用ひたから、其の治績は大に看るべきものがあつた。然るに財政には聚斂の臣を任用して失政が多く、遂に士民を困弊せしめたのである。初め蒙古の興るや固より遊牧の人民に過ぎなかつたから、其の制度は甚だ簡單であつた、丞相は之を大必閣赤(ビチケチ) (Bilgüchi) といひ、兵柄を掌るものは左右萬戸のみであつたが、後西域を征服するに及び達魯花赤(タルガチ) (Daruqach) 即ち斷事官を各城に置きて之を監治し、次で支那を侵略するに及び太宗の時始めて十路の宣課司を設け、金人の來り歸するものには其の故官を授けたのである。世祖は漠南軍事都督たる頃より内治改良の志を抱き、漢人の材能あるものを延いて幕賓となし、位に即くに及んで劉秉忠、許衡に命じ古今の宜しきを參酌して内外の官制を定めしめ、中央政府を燕京に置き、中書省(政務を總ぶ)、樞密院(兵馬を掌る)、御史臺(黜陟を掌る) を設け、其の下に寺、監、衛、府の諸官を置きて諸政を

分掌せしめ、地方には行省、行臺、宣慰司、廉慰司を設け、其の下に路、府、州、縣の牧民官を置いた、然れども其の長官には蒙古人を用ひ、次官以下には内外人を擇ばず其の材に就いて博く之を登庸したのである。故に遼金の遺臣を初め圖伯特、畏兀兒、康里、波斯、亞拉比亞、歐羅巴等より來りて仕ふるものが多く、其の著名なるものを擧ぐればヤル・ポロ (Marco Polo) は伊太利より來りて揚州都督、樞密副使となり、波斯人阿老瓦丁(アラウダン) (Alai ud-din) 及び亦思馬因(イスマイン) (Isma'il) は共に砲術を以て仕へ、波斯の天文學者札馬刺丁(ジャマラウダン) (Djamaala ud-din) は測天機を將來し、波斯人阿合馬(アハマド) (Ahmad)、畏兀兒人桑哥(サンガ) (Sangai) は理財を以て相位に上り、圖伯特人八思巴は佛學を以て帝師となつたのである。蒙古には初の法律がなかつたから、百司の斷理訟獄に金律を襲用して頗る嚴刻であつたが、世祖の時に至り一二九一年右丞相何榮祖が公規、治民、禦盜、理財等の十事を緝して之を上つるに及び、帝は之を板に刻して百司をして遵守せしめたのである。蒙古の兵制は初め養古軍(蒙古人の兵)、探馬赤軍(諸部族の兵)、を創設し、次で漸丁軍(孩幼の精長なるものを籍して兵となす)、獨戶軍(一戸より兵一)、正軍(二三戸より兵一)、匠軍(工匠を取りて、子弟を取らるもの) を置き、別に砲軍、弩軍、水手軍等を備へたが、世祖の時に至りて左右中前後の五衛を立て、宿衛を掌ごらしめ、諸軍衛に親軍都指揮使を置き、外は萬戸(萬人の長) の下に總管を置き、千戶(千人の長) の下に總把を置き、百戶(百人の長) の下に彈壓を置き、樞密院をして之を總領せしめ、若し方面に

警ある時は行樞密院を設け事止めば廢した、また世祖は漢人の兵器私藏を禁じて亂源を豫防したのである。世祖はまた儒學を尙びて許衡、劉因等の大儒を優遇し、文學藝術を獎勵し八思巴に命じて蒙古文字を制せしめ、郭守敬に命じ曆法を改めしめて授時曆を發布し、佛教を崇め殊に喇嘛教を尊信して八思巴を帝師となし、基督教を保護してモンテ・コルヴィノ(Monte Corvino)を優遇したのである。

世祖の失政 世祖は頻に外國を征伐しまた海都の叛亂が起りて久きに至り、國用を蕩盡したから財政恢復の必要を生じ、遂に聚斂の臣を任用して國庫の充實を圖らしめた。初め世祖は財賦の事を以て波斯人阿合馬(Almad)に任じたるに、阿合馬は鐵冶を興し鹽稅を増して頗る成績を擧げたから平章中書政事に拜し、また制國用司を立て阿合馬をして其の事を領せしめ、尋で制國用司を罷めて尙書省を立て阿合馬を平章尙書省事となし、天下の戶口を括し樂林樵茶に至るまで遺す所なく専ら聚斂を事とするに至つたから、諸大臣が皆其の非なるを論せしも勝つ能はず却て死に陥れられたるものがあつた。かくて阿合馬は遂に私人を擢用し其の諸子を分ちて財賦の要地に據らしめ、貨賄を通じ威刑を示して征斂を急にしたから中外の惡む所となり、一二八二年遂に益都の千戶王著の爲め鎚殺されたのである。既にして世祖は樞密副使孛羅(Polo)に詢うて始めて阿合馬の姦を知り、命じて其の墓を發き棺を剖きて屍を戮し通元門外に棄て、犬に食はしめ、また其の家を籍沒して其の子忽辛(Husain)等四人を誅

し其の黨與を黜けた。次で世祖は盧世榮を任用して財賦の事を掌ごらしめたるに、世榮は鈔法、鹽鐵、權酷、商稅、田課等の如きあらゆる聚斂の政を行ひ、また阿合馬の黨を用ひて要職に列し漸く姦をなすに至り、一二八五年遂に監察御史陳祥及び御史中丞阿剌帖木兒(Ala Tinnur)等の劾する所となりて誅せられたのである。後幾許もなく世祖はまた桑哥(Sangha)を任用した。桑哥は畏兀兒人であつて行中書省を改めて行尙書省となし、丞相を以て尙書を領し統制使を兼ねて私黨を擢用し、また忻都等十二人を遣はし江南、江西、福建、四川、甘肅、安西等六省の錢穀を理算するに至り、天下が騒然として擾れ江淮の地が最も甚だしかつたが、然かも佞諛の徒は頌德碑を建て、桑哥の功を記するに至つた。桑哥はまた御史臺の權を弱くし、恣に内外の官を詮調し、刑罰を販賣し、次で忻都、王巨濟等を遣はして天下の錢穀を理算するに及び人民因弊して自殺するもの相屬し、山林に逃るゝものは兵を發して之を捕へたから天下は將に亂れんとしたのである。是に於て集賢直學士趙孟頫が帝に奏し蠲除の詔を下して天下に赦せしめ、尋で奉御徹里(Frick)をして桑哥の罪惡を帝に白さしめたから、帝は大に悟り遂に桑哥を誅して其の黨與を貶殺した、時に一二九一年である、然かも世祖一代の財政は遂に恢復するに至らなかつたのである。かくて世祖は在位の間屢々兵を外國に用ひ且つ聚斂の臣を任用したから、人民は怨望して江南に叛亂が相次で起つたが幸に鎮定して元朝極盛の治を致すことを得

たのである。世祖は在位三十五年にして一二九四年死し、太子眞金(Chingim)が是より先き早世したから、玉昔帖木兒(Yisü Timur)が伯顔と謀りて太孫鐵木兒(Timur)を立てた、之が成宗である。

海都の亂の原因 此の亂は三十餘年の間蒙古大帝國を分裂せしめた重大事件であつて其の原因には遠因と近因とがあつた、初め定宗が死んだ時に皇后斡兀立海迷失及び太宗の一族は定宗の姪失烈門を立てんとしたが、一二五一年拖雷の子蒙哥がフリルタイ會議に推され位に即きて憲宗となり、太祖の帝統は拖雷の子孫に歸することとなつたから、太宗の子孫は悦ばずして叛を謀るものあるに至り、憲宗は失烈門兄弟を黜けて不平黨の首領を殺し、太宗の子合丹、蔑里、孫翺戴(Yukutai 潤端の子)は二心なきを以て兵柄を奪はなかつたが、其の他の子孫を遠地に移して分遷したのである。海都(Kaidu)は合丹(Kash)の子であつて太宗の孫であるから、此の時海押立(Hayalik)に遷された、其の地は阿爾泰山の南、天山の北、バルカシ(Balkash)湖の東南に當り、今の伊犁(Ti)河の附近である。故を以て諸王は益々憲宗兄弟を怨むに至り、是より太宗の子孫と拖雷の子孫とは永く仇敵となつた、以上述べたるものが此の亂の遠因である。然るに一二五六年に至り憲宗は諸王の故地に還るを許し、斷事官石天麟を遣はして命を傳へしめたるに、海都は之を拘留して還へさなかつた、蓋し其の封地の險遠なるを恃んで跋扈の志があつたのである。憲宗が死して世祖が立ち阿里不哥が僭號するに及び、海都

は阿里不哥を援け察合台汗阿魯忽を攻めて敗れ、一二六四年阿里不哥が遂に世祖に降つた後も、海都は也迷里(Emil)河畔に退きて兵力を養ひ、世祖が屢々徴したるも馬瘦せ道遠きを辭となして遂に至らず、また世祖が即位の初め諸王に金帛を賜ふに當り太宗の子孫もまた之に與かり、西北の諸王は皆東歸したるも海都のみ獨り至らずして三年の後兵備が整ふに及び、一二六八年諸王を誘うて遂に亂を起した、而して海都は權智人に過ぎ籠絡を善くしたから諸王の之に應ずるものが頗る多かつたのである。以上述べたるものが此の亂の近因である。

叛亂の初期 是より先き一二六六年察合台汗阿魯忽が死して哈刺旭烈の子ムバレック・シアーが立ちたるも、世祖は其の地が海都の居地に接するを思ひ、察合台の曾孫八刺(Borak)が朝廷に居たから之に命じて國に歸り、政を輔けしむると共に其の力を借りて海都を控制せんと圖つた。かくて八刺は國に歸りムバレック・シアーを廢して自立し、次で海都とシトル河畔に戦つて勝ち多數の虜獲を得たが、既にして欽察汗忙哥帖木兒(Mangu Timur)が海都を助けて兵を送り八刺を撃破したから、八刺は退いてトランス・オクサナに至り兵を集めて不花刺、撒麻耳干の兵を合せて再び戦を起さんとせるに、會々海都が和平を請ふたから八刺は之に應じて兵を罷め、協議の結果察合台汗國を以て海都の屬邦となすに至り、欽察、察合台、窩濶台三汗國の連合が成立して共に海都を大汗に戴いたのである。是より先

欽察汗は拔都の後二傳して其の弟別兒哥に及び、深くイスラム教を崇信して屢々歐羅巴の基督教徒を迫害し、また伊兒汗旭烈兀が八吉打を陥れてアッバス朝の哈利發を滅ぼしたるを怒り、埃及の算端と連合して旭烈兀を夾撃し、爾後欽察汗は伊兒汗と怨を結んで互に攻伐するに至つたから、別兒哥が死して拔都の孫忙哥帖木兒が立つに及んでも海都に黨して之を援けたのである。然るに伊兒汗は旭烈兀の死後其の子阿八哈が嗣ぎ、世祖の近親なるを以て海都に抗し八刺を破つたが、阿八哈の死するに及び其の子阿魯渾 (Arghun) が叔父アトメド (Tigdar Ahmed) と位を争うて内訌を生じたから、また海都を控制することができなくなつた。此の間察合台汗は八刺が死して察合台の孫ニクベイ (Kikpei) が立ち海都を攻めて陣没し、察合台四世の孫脱帖木兒 (Tuka Timur) が嗣ぎたるも幾許もなくして死んだから、海都は八刺の子篤哇 (Dua) を輔立して共に兵を併せて東の方元を侵したのである。

叛亂の中期 是より先き海都の叛迹が漸く顯はるゝや元の廷議は之を伐たんと決したが、世祖は宗室の情として之を懐くるに徳を以てすべしとなし、平陽馬步站達魯花赤鐵連を遣はして先づ欽察汗忙哥帖木兒の所に至り、相與に事を計りて後海都の所に行かした、然るに鐵連は先づ海都の所に至りて其の虚實を探り次で忙哥帖木兒の所に至りて世祖の意を傳ふるや、忙哥帖木兒は「祖宗訓あり叛者は之を誅するを得、若し好を通じて従はざれば師を出して天罰を行ふべし、我れ即ち外より應じて掩撃

せば之を剿絶するに難からず」と答へたから、還つて悉く之を世祖に報じ且つ策を獻じて「海都の兵繁にして鋭なり、宜しく速に戦ふことを避け、來れば即ち壘を堅くし去れば即ち追ふことなく自ら守ること固ければ即ち慮なし」といふたから、世祖は深く之を然りとなして爾後常に此の策を採つて居たのである。然るに忙哥帖木兒は初めは海都を討つたが次で與に和して之を助けたから、海都は西顧の憂なく一二七五年察合台汗篤哇と共に兵十二萬を率ゐて畏兀兒王を火州城に圍み、援兵が至るに及んで婦女を掠めて去つた。是に於て世祖は皇子那木罕 (Nanugan) に命じ兵を率ゐて阿力麻里に赴き備へしめ、安童(木華黎の後)をして之を輔けしめ、また皇子闊闌出 (Gukdju) 、昔里吉(憲宗の子) (Shireki) 、脱鐵木兒 (Tukimur) 等の諸王をして従ひ行かしたるに、一二七七年脱鐵木兒が叛を謀り昔里吉と共に謀を合せて那木罕、闊闌出及び安童等を捕へ、好を海都に通じ太宗及び察合台の後王を誘うて叛かしたから、世祖は伯顔を支那より召還して之を伐たしめた。既にして伯顔は昔里吉を斡兒罕 (Orkhan) 河に破り、昔里吉は也兒的石河畔に遁れ脱鐵木兒は吉利吉思に奔つたが、時に脱鐵木兒は其の輜重を失ひ昔里吉が援けざるを怨みて憲宗の曾孫撒里蠻 (Sariban) に附き、阿里不哥の子要木忽兒 (Yabukur) を脅かして來り屬せしめんとしたるに、要木忽兒は従はず戦つて脱鐵木兒を擒にし之を昔里吉に送り勸めて殺さしめた。次で昔里吉は撒里蠻を拘へたが撒里蠻の舊部が來りて之を回復し、將に戦はんとせる時昔里

吉の部衆が睥きて撒里蠻に従ひ、昔里吉及び要木忽兒を執へて之を世祖に送りたるに、要木忽兒は途に於て逃れ去り僅に昔里吉を獻じたから、世祖は撒里蠻に領土兵士を賜ひ昔里吉を海島に流した、而して要木忽兒は遁れて海都に投じたが後遂に降り、那木罕、安童等は一二八四年釋されて還つたのである。

叛亂の後期 既にして海都はまた遼東及び滿洲吉林地方の諸王を嚇かして叛せしめた、蓋し世祖に對し強大なる同盟を作りて之を夾撃せんと謀つたのである。是に於て一二八七年太祖の弟斡赤斤(ウヂチギン)、五世の孫乃顔(ナヤン)が先づ遼東に於て叛き、次で吉林盛京の諸王合丹(カタン)、太祖の弟哈準(ハジュン)、勢都兒(シントウ)、太祖の弟兀赤哈薩兒(ウチカサエ)、四世の孫等が之に應じたから、世祖は東西相合するを恐れ伯顔をして和林に海都を阻遏せしめ、親ら兵を率ゐて滿洲に入り、乃顔を遼河に破り之を殺して上都に還り、明年皇孫鐵木兒を遣はし玉昔帖木兒(ユクシテムル)、土土哈(ツツカ)、李庭等を之に附して哈丹及び勢都兒を討平せしめたのである。然るに世祖の大敵海都は勢尙ほ衰へず、抗愛山と戈壁(ゴビ)、沙漠とを界として元と相對峙したから、世祖は伯顔に命じ兵に將として和林に鎮せしめたるに、伯顔の未だ到らざるに先だちて一二八九年海都の兵が和林に入り北邊が騷擾したから、世祖は親ら出で、之を征したが皇孫甘麻剌(カンマラ)が前衛に將として海都と抗愛山に戰つて敗れ、土土哈の救援によりて纔に免かるゝことを得、世祖は空しく上都に還つたのである。明年海都がまた入寇し元軍は戰はずして潰え、次

で一二九二年に至り諸王明里帖木兒(メリクティムル)が叛きて海都に従つたから、伯顔が撃つて之を破りしに會々伯顔は海都に通じて居ると譖するものあり、世祖は之を信じて伯顔を召還し皇孫鐵木兒及び玉昔帖木兒に命じて之に代はらしめたが、未だ到らざるに一二九三年海都がまた入寇したから、伯顔は誘ひ撃つて之を破つたのである。明年世祖が死し皇孫鐵木兒が立ちて成宗となり、尙ほ屢々海都と戰つたが勝敗未だ決せず、元軍は土土哈の子牀兀兒(チオハングル)が將となり、一二九七年及び一二九八年に亘り、海都及び篤哇に對して多少の勝利を得たるも、將帥が懈りて備をなさなかつた爲め敵の乘ずる所となりて敗れたから、成宗は姪海山(ハイサン)に命じて漠北を鎮せしめた、海山は成宗の兄答剌麻八剌(ダラマバ) (Dharmapala)の子である。一三〇一年海都が篤哇と共に大舉して入寇するや、海山は之を和林とタミル (Tamiir) 河との間に邀へ戰つて敗れたるも、牀兀兒の軍が篤哇の軍を破つたから海都は遂に志を得ずして退き、歸途に於て死んだのである。

亂の鎮定 海都の死後篤哇は海都の子察八兒(チヤパ) (Chapar) を擁立して窩闊台汗となしたが、既にして篤哇は察八兒其の他の諸王と議して成宗の主權を認め使を遣はして降を請ふた、時に一三〇三年八月である。是より諸王の叛けるものが相率ゐて降り、一三〇四年察八兒が使を遣はして入朝し、明年また察八兒及び篤哇の使が共に入朝するに至り、是に於て三十餘年の叛亂が始めて平らいだのである、

第六章 元の治亂 大臣の専恣

元室衰亡の原因 元室の常弊として繼承の際には必ず紛亂があつた、是れ長子相續の法を採らずしてフリルタイと稱する諸王將相の聚會の決議によりて後嗣を推戴したからである、故に國初に於て既に太宗窩濶台の子孫と拖雷の子孫との争があり、また世祖忽必烈と其の弟阿里不哥との争があつた、而して世祖は忽卒の際極めて少數のフリルタイを開いて位に即いたのである、また世祖の死せる際にも諸王中に大統を覬覦するものがあつたが、玉昔帖木兒が世祖の遺命を奉じ伯顔と謀りて皇孫成宗を擁立したのである。かくて成宗以後は其の争一層甚しく、之が爲めに權臣が擁立の功を恃みて威福を弄するもの相踵ぎ、帝室は漸く微弱となるに至つたのである。加ふるに世祖の時財政彌縫策として交鈔を發行してから後其の濫發が次第に甚しく、爲めに其の價格は益々下落し元末に至りては全く通用をなさず、物價は益々騰貴して士民の困弊は其の極に達し遂に擾亂を惹起したのである。世祖は初め史天澤、劉秉忠、許衡等を重んじて學校を興し文教を盛にし、仁宗はまた唐宋の制に倣ひ科擧を設けて士を採つたから、元朝は漢人の才學の士を用ひたること少なくなかつたが、將相の重任は蒙古人に委ね其の下には契丹人、女真人、唐古特 (Tanguts) 人、康里人、畏兀兒人、欽察人、波斯人等が多く

任用せられ、漢人及び南人は常に其の下僚となつて働くのみであつたから、夷狄の屈辱を受くるものとして敵愾心を起し常に報復を想うて居たのである。また元は世祖が喇嘛教を入れ八思巴を帝師に任じてから、歴代の帝王皇后が皆帝師に就いて佛戒を受け、佛事供養の費は莫大なる額に上り、武宗の如きは深く之を信じて大に舊制を破るに至り、遂に宋の諸陵を發掘したから漢族の憤怨を爆發せしめたが、更に順帝の時に至りて其の弊害最も甚しく、國庫は益々空乏となりて勢ひ人民に厚斂せざるを得ざるに至り、方に物價の騰貴に苦しみつゝある人民は其の負擔に堪へずして皆亂を想ふに至つたのである。以上述べたる所のは元室を衰亡せしめたる原因の主なるものであるが、其の治亂の有様は以下順を追うて詳細に説明すべし。

西南夷征討 成宗の初年緬人僧哥倫 (Sangharan) といふものが亂を作したから、緬王は其の兄阿散哥也 (Asangaya) を執へ尋で之を釋したるに、既にして阿散哥也が其の黨を率ゐて王を囚へ遂に之を殺すに至り、王の次子窟麻刺哥撒八 (Kumara Kaslapa) が奔りて燕京に來り懇へたから、成宗は一三〇〇年薛超兀兒 (Solungur) 等を遣はし兵二千を率ゐて之を討平せしめ、尋で窟麻刺哥撒八を立て、緬王となした。八百媳婦は緬の東北、雲南の西にあり、其の酋長は八百人の妻があつて各々一寨を領せしめて居るから、八百媳婦と稱したといふことである。然るに八百媳婦は緬の賊阿散哥也に應じて雲

南の邊境を擾がしたから、成宗は一三〇〇年雲南行省左丞劉深及び哈刺帶(Karatai)等に命じ兵二萬を發して之を征せしめたが、明年劉深の兵は順元に次し烟瘴を冒せる爲め死者甚だ多く、人民を驅使して谿谷の間を轉餉せしむるに至り騷擾が起つたから、蠻酋宋隆擠、蛇節等が兵を連ねて反し劉深は遂に糧食が盡きて歸り、途に要撃せられて士卒の死傷するものが甚だ多かつたのである。是に於て西南夷の諸蠻は蛇節の亂の爲めに供輸の煩勞なるを口實となして叛くものが多かつたから、成宗は一三〇二年陝西行省平章政事也速喝(Yesudar)を遣はして之を討平せしめ、尋で劉國傑を遣はし宋隆擠、蛇節等を伐つて之を擒にしたから餘衆は皆平定した。然るに是より先き征緬の兵が歸途に於て金齒の遮ざる所となり、士卒が多く戦死したから薛超兀兒に命じ兵を移して之を討たしめたるも効なく、是より後金齒等の諸蠻は八百媳婦と結んで元に税賦を入れず官吏を殺すに至つたから、元の勢威は漸く西南に振はなくなつたのである。

武宗仁宗の更立 成宗は在位十三年にして死し子がなかつた、時に其の姪海山は北邊に居り海都の叛亂を伐つて威望があつたから當然位を繼ぐべきであるが、皇后ト魯罕(Balugan)は曩に謀つて海山の弟愛育黎拔力八達(Ayurbaibata)と其の母を懷州(河南省懷慶府)に屏居せしめたから、海山が立つたならば禍を受けんことを恐れ世祖の孫にして忙哥刺(Manghala)の子なる安西王阿難答(Ananda)を立

てんと謀り、左丞相阿忽台(Agutai)及び諸王明里帖木兒(Melik Timur)等が陰に其の謀に與かつた。時に右丞相哈刺哈孫(Karakuss)等は海山を迎立せんとし、其の遠地にあるを以て先づ懷州にある愛育黎拔力八達を迎へたから、愛育黎拔力八達は大都(燕京)に至りて阿難答及び明里帖木兒を執へ阿忽台等を誅し、使を遣はして海山を迎へたのである。是より先き海山は阿爾泰山地方にありて成宗の死を聞き、和林に還り次で上都(平)に至り更に大都に入りト魯罕を廢し阿難答及び明里帖木兒を殺して位に即いた、之が武宗である。武宗は愛育黎拔力八達を立て、皇太子となし銳意治を圖りたるも、封爵濫に過ぎ且つ喇嘛教を尊信せる爲め番僧が寵を專にして志を果さず、在位僅に四年にして一三二一年死んだから、愛育黎拔力八達は尙書省を罷めて舊章を亂したる大臣脫脫(Tukhta)等を貶殺し、老臣十五人を召して庶政を議せしめ次で位に即いた、之が仁宗である。

鐵木迭兒の專恣 仁宗は吏弊を矯正せんと欲し左右に戒めて職業を勤めしめ、妄に僥倖して官を加ふるを乞ふことなからしめ、また始めて科擧を行ひ、進士を分ちて兩榜となし、蒙古色目人を右となし漢人南人を左となした。既にして武宗の長子和世球(Kushala)が年長じて將に太子となるべきであつたが、右丞相鐵木迭兒(Timudar)が權勢を得んと欲して仁宗に皇子碩德八剌(Shudapala)を太子となさんことを勧め、且つ連りに和世球を讒誣したから仁宗は遂に和世球を出して雲南の周王となすや

和世球は其の臣と共に途中に兵を擧げて京師に向つたが敗れて漠北に奔り、阿爾泰山の西北に赴きて察合台汗に投じ、碩德八剌が遂に立つて皇太子となつたのである。是より鐵木迭兒が勢を恃んで貪虐兇穢甚しく中外皆切齒して之を惡むに至り、御史中丞以下四十餘人が上奏して其の姦狀を彈劾したから、仁宗は怒りて之を誅せんとしたるも太后の救解により纔に之を赦して右丞相を罷めたが、年を踰えてまた夤緣して太子太師となつたから、中外大に駭き御史中丞趙世延等が其の不法數十事を奏論したるも太后の後援ある爲め遂に排斥することができなかつたのである。仁宗は英明恭儉にして民力を休養し孜孜として治を圖つたが、在位僅に九年にして一三二〇年死し太子碩德八剌が立つた、之が英宗である。時に鐵木迭兒は益々太后の寵を得て遂に太師となり右丞相に復し、曩に己を奏劾せるものを殺して怨を報じ暴横愈々甚しくして諸王大臣皆自ら危ぶまざるものなき有様であつた。是に至りて英宗は鐵木迭兒が寵を恃んで權を肆にするを覺り、漸く之を疎外して左丞相拜住(Bayju)を親任し拜住がよく鐵木迭兒の權を抑へたから、鐵木迭兒は疾を稱して出でず遂に怏々として一三二二年死し。英宗は遂に鐵木迭兒の官爵を追奪して其の家産を籍沒せしめたのである。

鐵失の弑逆 英宗は拜住を右丞相となし左丞相を置かずして専ら拜住を親任し、拜住もまた政務に勵精して老臣を尊禮したから賢良が朝に集まつたが、御史大夫鐵失(Tokchi)はもと鐵木迭兒の黨なる

を以て自ら安んぜず、會々英宗が上都に赴きて歸途にあるや知樞密院事也先鐵木兒(Yesen Timur)、諸王按梯不花(Altai Buka)、前平章政事赤斤鐵木兒(Tegin Timur)等と謀りて拜住を殺し、鐵失手づから英宗を弑した、時に一三二三年八月である。是に於て按梯不花は皇帝の璽綬を奉じて晉王也孫鐵木兒(Yesun Timur)を北邊から迎へ立てた、王は晉王甘麻剌(Kamala)の長子であつて父の封を襲ぎて北邊に居たが、是に至りて龍居河(即ち臘胸河にして今のケルレン河なり)附近に於て位に即いた、之が泰定帝である。帝は即位の初め也先鐵木兒を右丞相となし鐵失を知樞密院事となしたが、既にして諸王買奴(Mannu)の言によりて弑逆の事を知り也先鐵木兒、鐵失等の元凶を誅し按梯不花を流し、次で買奴を泰寧王となし倒刺沙(Tash)を左丞相となし、また和世球の弟圖帖院爾(Tu Timur)を懷王となした。然るに帝は一三二六年樞密院事燕帖木兒(Yak Timur)を大都の留守となして上都に赴き死し、僅に八歳なる皇太子阿速吉八(Asukipa)が上都に於て位に即いた、之が天順帝である。

燕帖木兒の謀逆と專恣 時に燕帖木兒は大都に居り武宗の舊恩を思つて先づ圖帖陸爾を江南より迎へ、更に和世球の漠北より至るを俟ちて之を立てんと宣言し、右丞相塔失帖木兒(Tash Timur)の來り討てるを破り、圖帖陸爾を帝となして上都を攻むるに及び、天順帝の軍は各所に於て敗れ倒刺沙が遂に皇帝の璽を奉じて出で降り、帝は遁走して終る所を知らず、在位僅に三ヶ月であつた。是に於て

圖帖睦爾は和世球を迎へんとし、和世球は察合台汗國より南に還りて和寧(和林)の北に至り位に即いた、之が明宗である。既にして燕帖木兒が皇帝の璽を奉じ漠北に至りて明宗を迎へ、明宗は圖帖睦爾を立て皇太子となして南に還り、皇太子は大都を發し王忽察都(ウグチヤクト)に至りて帝に入見したが帝は暴に死んだ、蓋し弑せられたのである。是に於て圖帖睦爾が位に即きて文宗となつた、時に一三二九年である。文宗は燕帖木兒の功勞を思つて右丞相となし、左丞相を置くことを罷めて獨り政を專にせしめたから、知樞密院事濶徹伯(クハチベ)、脫脫木兒(トクトムル)等十二人が其の權勢の盛なるを憂ひて之を誅せんと謀り事成らずして殺された。また文宗は皇子古剌答納(クハラタナ)をして出で、燕帖木兒と共に居り名を燕帖古思(ヤク・ツクス)と更めしめ、尋で帝親ら燕帖木兒の子塔刺海(タラガイ)を養つて子となしたから、燕帖木兒は益々權を弄して其の勢遂に帝室を凌ぐに至つたのである。文宗は在位僅に五年にして一三三二年上都に於て死するや、燕帖木兒は皇子燕帖古思を立てんとせるに皇后宏古刺(クシク)氏(Kingrat)が聽かず、遺詔により明宗の次子鄜王懿璘質班(フシエンペン)を立てた、之が寧宗であつて年僅に七歳であつたから、皇后は皇太后となつて政を攝した。然るに寧宗は在位僅に二ヶ月にして死するや、燕帖木兒はまた燕帖古思を立てんとしたが、皇太后の意見により明宗の長子妥懽帖睦爾(トフエンテムル) (Toghon Timur)を廣西の靜江(廣西省 靜江府)から迎へ立てることに決したのである。燕帖木兒は權勢を得て

から荒淫度なく、或は泰定帝の皇后を取つて夫人となし或は宗室の女四十餘人に尙するに至り、遂に體羸弱血して死んだ。初め妥懽帖睦爾が靜江より至り百官之を途に迎ふるや、燕帖木兒は既に見へ馬を並べて徐行し迎立の意を具陳せるに、妥懽帖睦爾は幼にして且つ之を畏れ何事をも答へなかつたから、燕帖木兒は其の意を測るべからずとなし且つ即位の後明宗暴死前の事を追舉せらるゝことを恐れ、故に妥懽帖睦爾は既に入京せるも立つことを得ず遷延數月に及んだが、一三三三年燕帖木兒の死するに及び皇太后が大臣と議して妥懽帖睦爾を立て後位を燕帖古思に傳ふべきことを約した、之が順帝であつて時に年十四歳であつた。

伯顔の專横 順帝は即位の後伯顔(Bayan)を太師右丞相となし燕帖木兒の弟撒敦(サテン)を太傅左丞相となして共に政を執らしめたが、尋で撒敦が死して燕帖木兒の子唐其勢(トシキセ) (Tongia)が左丞相となれるも、伯顔が獨り政を執りて權を專にしたから唐其勢は怒りて「天下はもと我が家の天下なり、伯顔何を以て我が上に位するや」といひ、遂に伯顔を殺して帝を廢し憲宗の孫にして昔里吉の子なる諸王晃火帖木兒(クシガチムル) (Kungsha Timur)を立てんと謀り露はるゝに及び、伯顔は唐其勢を誅しまた皇后伯牙吾(バヤウ)氏を弑した、皇后は燕帖木兒の女であつたからである(一三三五年)。是より伯顔は政を專にして自ら諸衛の精兵を領し、其の勢甚だ盛にして漸く不臣の志を抱くに至つたから、其の養子脫

脱トク (Tukha) は伯顔マチャルタイの弟馬札兒マチャルタイ臺 (Machartai)の子であつたが、伯顔の専恣なるを見て憂苦し、遂に意を決して父に告げまた其の師吳直方に質し、帝の近臣世傑班シヤクスバル (Shakupai) 阿魯アル (Arū) と議して伯顔を斥けんことを謀つた。會々伯顔が帝に出で、敗せんことを請ふや脱脱は帝に説きて行かしめず、自ら家を忘れ國に徇ふるの意を陳べて世傑班、阿魯と謀り詔を草して伯顔の罪を擧げ、之を出して河南行省左丞相となし尋でまた詔を下して南恩州陽春縣廣東省肇慶府陽春縣 (陽春縣) に安置せしめたが途に病んで死んだ、時に一三四〇年である。是に於て脱脱が専ら政を執りて悉く伯顔の行へる所を更め科擧を復し經筵を開いたから、中外翕然として賢相を得たりと稱したが、時に元室の威は既に衰へて朝廷の紀綱が振はず、叛徒が諸方に起りて天下漸く亂るゝに至つたのである。

第七章 群雄の興起 元の滅亡

群雄の興起と争亂 順帝の即位後幾許もなく一三三七年廣東の朱光卿が其の黨と衆を聚め叛亂を起して大金國と稱し、河南の棒胡及び四川の韓法師もまた亂を作し、翌年漳州の李志甫、袁州の周子旺が相次で起れるも幾許もなくして皆平定したが、一三四一年には湖廣の獠賊、一三四三年には遼陽の吾者野人ウチエルゲン (Ucherginjin)、一三四五年には連城縣福建省汀州府連城縣 (連城縣) の羅天麟、靖州の獠吳天保、廣西の峒獠が相前後して亂を作し、一三四七年には揚子江沿岸にもまた盜賊が起つた。次で一三四八年に至り臺州の方國珍が亂を作すや、勢始めて猖獗にして是より盜賊が四方に蜂起するに至り、元廷は遂に之を制することができなかつたが、一三五一年賈魯に命じ河南河北の兵民十七萬を發して黃河の故道を治め、人民の困苦するを顧みなかつたから天下また元室を怨まざるものなく、群雄が相次で蜂起するに至つたのである。時に直隸欒城の人韓山童といふものがあつて祖父の時から白蓮會を起し香を燒きて衆を惑はし、韓山童に至りて自ら彌勒佛の下生と稱したから、河南江淮の愚民が翕然として之を信するに至つた。是に於て一三五一年潁州の劉福通が其の黨杜遵道、羅文素、盛文郁、王顯忠、韓絞兒等と謀り、韓山童を以て宋の徽宗八世の孫なりと詐りて兵を起し、紅巾を以て號となしたから之を紅巾

の賊といふのである。既にして韓山童は擒に就きたるも劉福通の勢が盛にして潁州を攻破し、遂に朱阜に據り尋で舞陽、葉縣を犯し汝南府及び光息二州を陥れて衆十萬に上つた。時に蕭縣の李二もまた香を焼くを以て衆を聚め、其の黨趙均用、彭早住と兵を起し徐州を攻陥して之に據つた。羅田の徐壽輝はもこ布を販ぐを業としたが、會々僧瑩玉が妖術を以て鄒普勝、倪文俊と亂を作し、徐壽輝の容貌を奇とし共に之を推して主となし、蕪水及び黃州路を攻陥してまた紅巾と號した(二三五一年)。當時是等の諸賊を皆紅軍といひまた香軍とも稱したのである。次で一三五二年定遠の郭子興もまた其の黨孫德崖等と兵を擧げ、攻めて濠洲(安徽省鳳陽府)を陥れ茲に據りて勢頗る盛であつた。是より先き方國珍は浙江行省左丞相孛羅帖木兒(Polo Timur)を執へ、次で臺洲路の達魯花赤(官事)白不花(Tala Baka)と澄江(浙江省臺州府黃巖縣海中にあり)に戰つて之を殺し、徐壽輝は帝と稱して國を天完と號し漢陽、武昌の諸軍を破りまた江州を略した。是に於て順帝は遂に各行省に詔し兵を發して諸路の亂をなすものを討伐せしめ、右丞相脱脱が諸軍を率ゐて李二を徐州に破つたから、李二は遁走し趙均用、彭早住は濠洲に走りて郭子興に依つたが、既にして趙均用か郭子興を逐ひ濠洲に據りて王と稱するに及び、郭子興は別に萬人を領し潞州に入りて王と稱した(二三五二年)。一三五三年泰州の張士誠もまた其の弟士德、士信と共に兵を擧げて泰州を陥れ、遂に高郵に據りて誠王と稱し國を大周と號した。此の年江浙平章政事ト顔帖木兒

(Puyan Timur)等が兵を會して徐壽輝を討ち、江州を復し進んで蕪州に克ち徐壽輝を蕪水に破つたから、徐壽輝は纔に身を以て免かれたのである。此の間朱元璋もまた兵を起して居る、朱元璋の先世は沛に家し後泗に徙り其の父世珍に至りて濠の鍾離(安徽省鳳陽府臨淮縣)に徙つたが、元璋は年十七の時父母及び三兄を失ひて孤となり依る所なくして僧となり、諸州に遊食して後また濠に歸り來るや會々盜賊が並び起つたから遂に濠城に入りて郭子興に従ひ、次で郭子興の勢が衰ふるに及び別に徐達、湯和、費聚と南の方定遠(安徽省鳳陽府定遠縣)の地を略し、李善長に遇ひ與に語つて大に悦び遂に共に濠州を攻めて之を陥れた、時に一三五三年である。一三五四年張士誠が遂に揚州を破りまた肝胎及び泗州を下すに及び、脱脱は諸王諸省の軍を總制して之を討ち、進んで士誠を高郵に攻めて之を破つたから士誠の勢が大に蹙まつた。然るに平章政事哈麻(Hama)は脱脱を惡み人をして之を彈劾せしめたから、順帝は之を信じて遂に脱脱を斥けて淮安に安置し秦不花をして其の軍を總べしめ、後また脱脱を雲南に竄流した。是に於て哈麻が左丞相となり其の弟雪雪(Sese)が御史大夫となりて國家の大柄は悉く兄弟に歸し元の兵威は頓に衰ふるに至つたが、順帝は毫も之を患へず龍舟を造りて内苑に浮べ宮女と遊宴に耽りて政事を怠つたから、賊勢が益々熾になつたのである。一三五五年徐壽輝は其の黨倪文俊を遣はして沔陽を陥れ、劉福通等は韓山童の子韓林兒を迎へて帝となし、小明王と稱して、亳州に據り國を宋と號し

たが、既にして知樞密院事答失八都魯(Tash Paturo)が宋軍を撃破し遂に亳州を圍んだから、劉福通は韓林兒と共に遁れて安豊に走つたが、後劉福通は汴梁を攻め更に兵を分ちて山東の地を略し、次で汴梁を取り韓林兒を奉じて之に居り、また其の將關先生は遼州を破り塞外の諸郡を掠め、遂に上都を陥れて宮闕を焼くに至つた。時に張士誠もまた苗帥楊完者を殺して益々其の勢を恣にした。是より先き朱元璋は滁州より計りて和州を抜き楊子江を渡り襲うて太平路を取り、江寧、集慶を破り諸將を遣はして鎮江、廣徳を下しまた自ら寧國を取り、尋で諸將を遣はして江陰及び池徽の諸州を下し勢威を江東に振ふた(一二三五年)。初め沔陽の人陳友諒は徐壽輝、倪文俊の兵が起るに當り往いて之に従ひ遂に兵を領して元帥となつたが、倪文俊が專恣を極め一三五七年徐壽輝を殺さんと謀り克たずして黃州に奔るや、陳友諒は覺に乘じ倪文俊を襲殺して其の軍を併せ、明年安慶、龍興を陥れて悉く江西諸路を下し、また其の黨を遣はして信州を陥れ、一三五九年遂に徐壽輝を江州に移し自ら漢陽に居りて漢王と稱したが、明年太平を抜き遂に徐壽輝を采石に殺し自立して皇帝と稱し、江州に都して國を漢と號したのである。是より先き隨州の人明玉珍もまた亂を作し尋で徐壽輝に降りて沔陽を守り、之を久うして重慶を取り成都及び嘉定を陥れて蜀に據つたが、陳友諒が徐壽輝を殺すに及び之を討たんとして果さず、よりに一二三六二年雲南を取りて遂に自ら隴蜀王と稱し、後また帝と稱して國を夏と號したのである。

る。

朱元璋の強盛 此の間朱元璋もまた婺州を取りて寧越府と名づけ、次で使を遣はして方國珍を招きたるに方國珍は遂に温台慶元の三郡を以て朱元璋に附くに至り、朱元璋は次で常遇春を遣はし衢處の二州を陥れて之を取つた(一二三五年)。既にして陳友諒が其の將張定邊を遣はして安慶を取るや、朱元璋は舟師を率ゐる流に溯りて陳友諒の將傅友徳等を降し、長驅して江州に向ひ大に陳友諒の軍を破り、遂に江州を抜き陳友諒を武昌に奔らし、諸郡を下し龍興を取りて江都府となしたのである(一二三六年)。會々張士誠の將呂珍が兵を率ゐて安豊を圍み韓林兒が急を朱元璋に告ぐるに及び、朱元璋は往いて之を救ふたが未だ到らざるに呂珍が既に劉福通を殺して安豊に據つたから、朱元璋は撃つて之を走らし韓林兒を伴うて歸り之を滁州に居らしめた。時に陳友諒は其の疆域の日に蹙まるを怒り大に舟艦を治め銳を盡くして江都を圍んだから、朱元璋は兵を率ゐて之を救ひ大に鄱陽湖に戦つて勝ち、陳友諒は流矢に中りて死し其の長子善兒は執へられ次子理は武昌に走つたのである(一二三六年)。是に於て朱元璋は國を吳と稱して王位に上り金陵(江蘇省江寧府)に都し、自ら將として武昌を攻めて陳理を降したから、湖廣、江西の諸郡縣は相次で皆朱元璋に降るに至つた。次で朱元璋は一二三六年淮安の諸路を下し、明年徐達、常遇春を遣はして張士誠を平江に撃つて之を擒にし、湖州、杭州、紹興、嘉興、

平江の諸路を歸服せしめたのである。かくて朱元璋は既に群雄を掃蕩して江南を撫有するに至り、一三六七年遂に徐達、常遇春に命じ兵二十五萬を率ゐ北侵して元を伐たしめ、湯和を遣り慶元を攻めて方國珍を降し、一三六八年帝位に即きて國を明と號し、次で湯和をして福建を陥れしめ、廖永忠をして廣東を取らしめ、楊璟をして廣西を併さしめたのである。

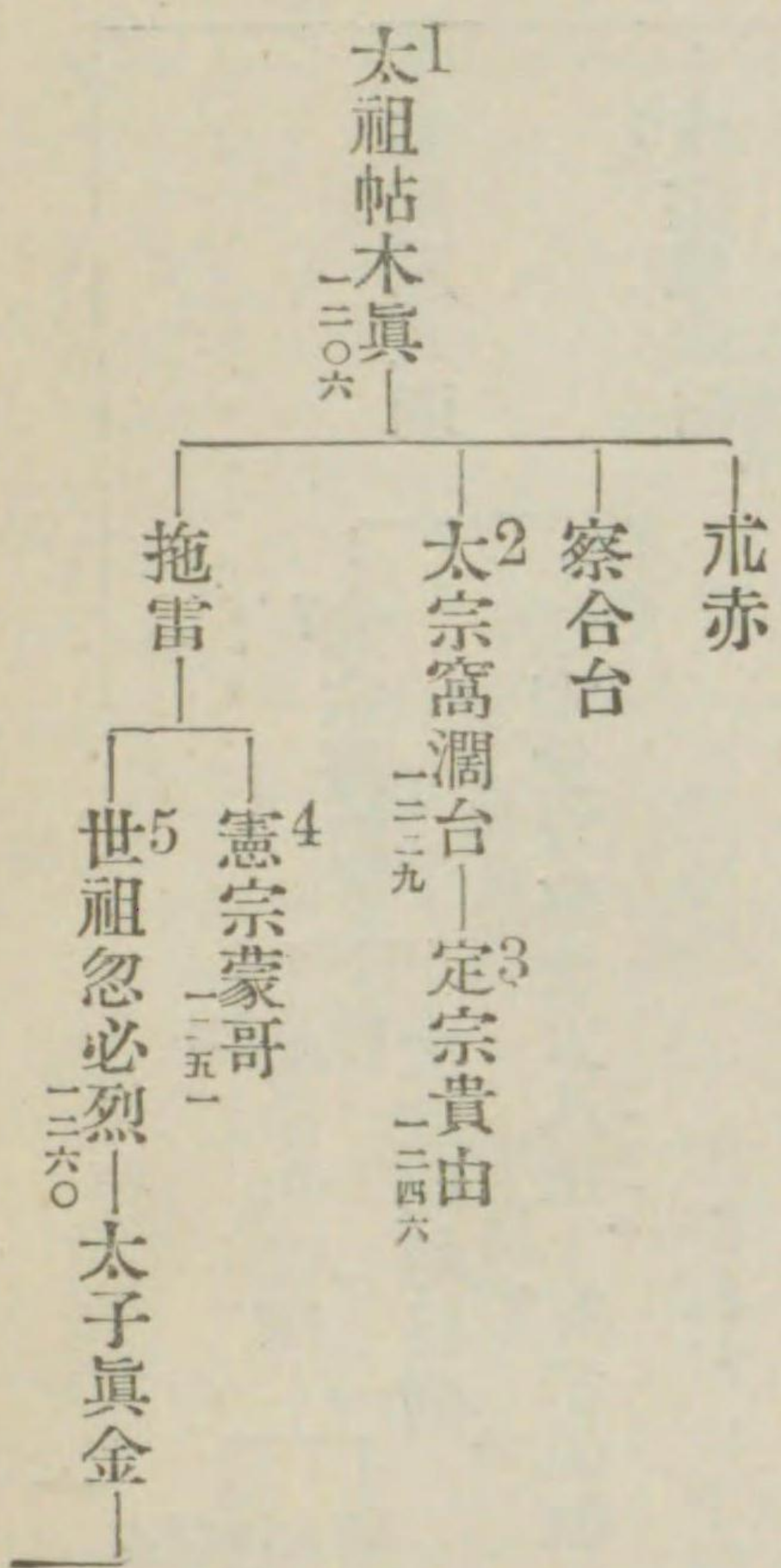
元の内訌 元廷は一三五六年哈麻が廢立を謀りて誅せられ、搠思監(Chakuskan)が右丞相となりて政を執り、宦者朴不花(Pukfukha)と共に相表裏して姦をなし、四方の警報及び將士の功狀を壅塞して通せず、順帝もまた淫樂に溺れて政務を顧みなかつたから益々禍亂を養成するに至つた。然しながら將軍には察罕帖木兒(Chaghan Timur)がありて善く兵を用ひ、關陝河東を平らげ遂に汴梁を復して河南を定め、また山東を復して韓林兒の將田豊を降したが、後幾許もなく田豊がまた叛きて察罕帖木兒を殺したから、其の子擴廓帖木兒(Kuku Timur)が兵を領して賊を討ち遂に田豊を誅し、悉く山東を平らげて兵を引いて河南に還つたのである(一三六二年)。是より先き答失八都魯の子孛羅帖木兒(Polo Timur)が父の死後代はりて其の軍を領じ、石嶺關以北を守りて大同に居り、察罕帖木兒は石嶺關以南を守りて河内に居たが、山西晉冀の地はもと察罕帖木兒の平定せる所なるに、孛羅帖木兒の兵は大共に駐するを以て之を併さんと欲して遂に相争ひ、是より二人相善からずして孛羅帖木兒が屢々

察罕帖木兒の地を侵し、次で察罕帖木兒の殺さるゝに及びてまた其の子擴廓帖木兒の地を侵し、一三六三年其の將を遣はし陝西を襲うて之に據らしめたが、擴廓帖木兒の將に破られて降つた。此の間搠思監が相位に居て少しも匡救する所なく、公然賄賂を受けて貪聲著るしく聞ゆるに至り、監察御史燕赤不花(Yakeli Bukha)等の劾奏する所となりて免せられたが、後また宦者朴不花が内は皇太子愛猷識里達臘(Ayur Shiridar)に侍し、外は搠思監と結托して驕恣不法を極めたから、監察御史也先帖木兒(Yes on Timur)、傅公讓等が其の姦邪を劾奏し却て皇太子の意に忤つて左遷せらるゝに至り、治書侍御史陳祖仁が上書して皇太子を極諫し、御史大夫老的沙(Raksha)もまた之を上聞して陳祖仁を助けたるに、皇太子は皇后と共に老的沙を忌みて之を帝に譖し、帝の母舅たる故を以て雍王に封じて外に出さしめたから、老的沙は大共に奔りて孛羅帖木兒に依り其の軍中に留まつて居た(一三六三年)。是に於て搠思監は皇太子の旨を受けて朴不花と謀り遂に孛羅帖木兒が老的沙と不軌を謀れりと誣告し、其の官爵を削り兵柄を解かんとしたるに孛羅帖木兒が命を拒んだから、擴廓帖木兒に詔して之を討たしめんとするや、孛羅帖木兒は之を聞きて秃堅帖木兒(Tukon Timur)に命じて兵を舉げて闕に向はしめ、官兵は之を逆へ戦つて敗れ皇太子は古北口の外に奔つたから、帝は已むを得ず搠思監、朴不花二人を執へて之を殺すことを聽るし、孛羅帖木兒の官爵を復するに及び秃堅帖木兒は兵を引いて大同

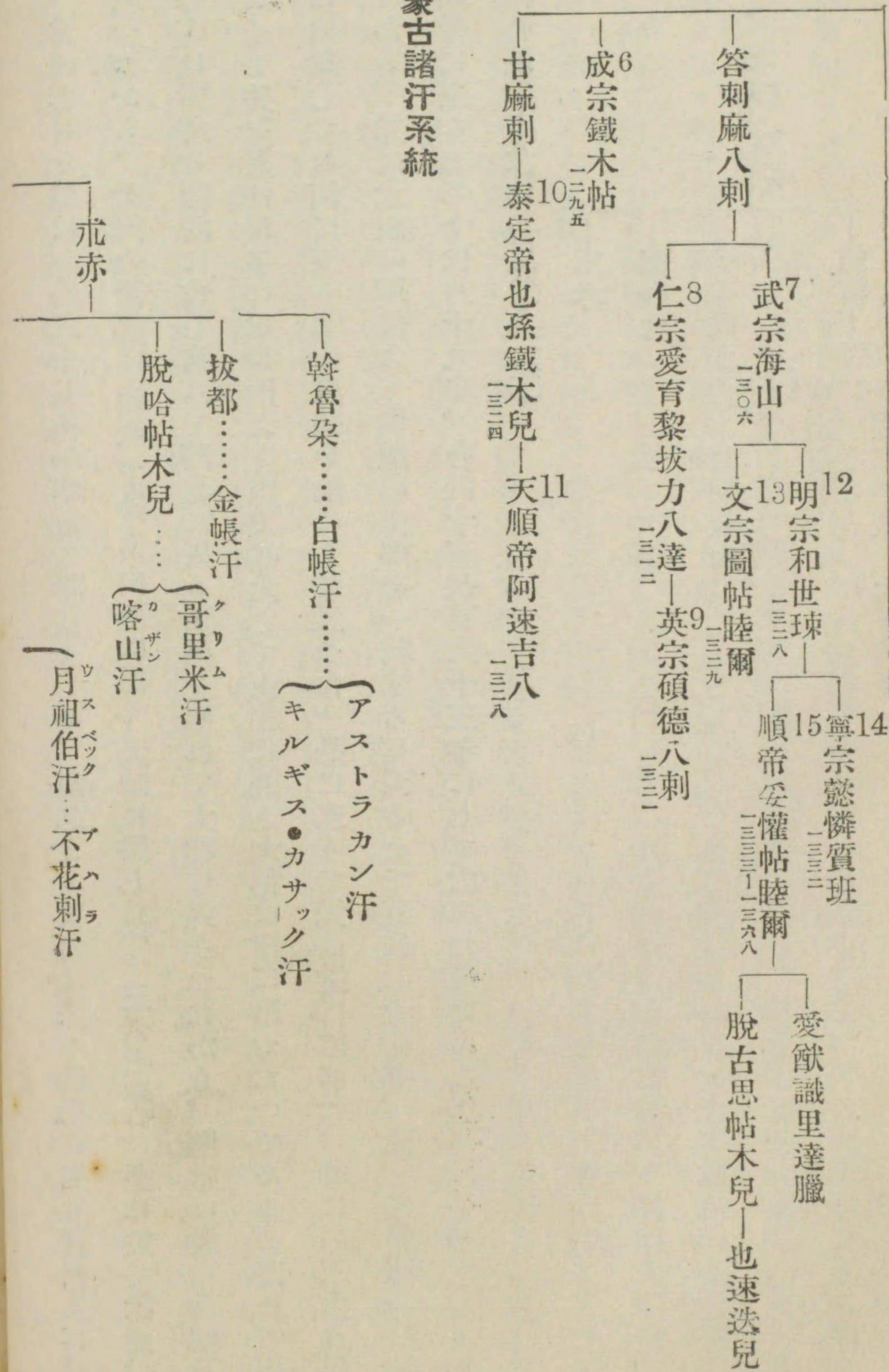
に還つた。既にして皇太子は宮に還りて憤恚已まず、擴廓帖木兒に命じて兵を調へ道を分ちて孛羅帖木兒を討たしめたが、孛羅帖木兒は自ら兵を率ゐ秃堅帖木兒、老的沙と共にまた大舉して闕に向ひ先鋒が居庸關に入るに及び、皇太子は拒ぎ戦つて敗れ遁れて冀寧に走り、孛羅帖木兒は京師に入りて左丞相となり尋で右丞相に進み國政を專にした(一二六四年)。次で皇太子はまた大に諸路の兵を發し三道に分ちて進み自ら擴廓帖木兒と共に中道より進んだ、時に孛羅帖木兒は荒淫度なく酗酒人を殺し喜怒測る能はざる有様であつたから、威順王の子和尚(コシヤン)が其の悖逆を憤りて數々帝に言ひ遂に密旨を受けて孛羅帖木兒を刺殺し併せて老的沙、秃堅帖木兒を誅するに及び、帝は皇太子を召し皇太子は擴廓帖木兒と共に京師に還つたのである(一二六五年)。是に於て擴廓帖木兒は左丞相となり河南王に封せられて南方平定の命を受けたが、功を恃んで專恣であつたから帝は其の異志あるを疑ひ皇太子をして天下の軍馬を總制せしめ、其の兵柄を奪ふに及び擴廓帖木兒は遂に一二三六七年大原に據つて叛いた。然るに此の時明軍が既に山東河南を定め將に京師に迫まらんとしたから、帝は擴廓帖木兒の官爵を復し南下して明軍を拒がしめんとせるも遂に果さず、既にして元軍は到る處に敗れ明軍が日に迫まり來つたのである。

元の滅亡 是より先さ朱元璋は既に群雄を掃蕩して江南を撫有したから、遂に一二三六七年に至り徐達、常遇春等を遣はし兵二十五萬を率ゐて北侵せしめ、淮水より黄河に入り沂州に克ち嶧州及び益都を取つたから、萊州の諸郡は相次で降り山東は悉く元璋に歸した(一二三六七年)。是に於て徐達、常遇春等は諸將を臨清に會し進んで河北に入り通州を陥れて大都に逼まつたから、順帝は遂に后妃及び皇太子と兵を避け夜半に建徳門より出で北走して上都に赴き大都は遂に陥つたのである。時に常遇春等は追撃して北河に至り元の皇孫を擒にして還つた。是に至りて元は遂に亡びた、時に一二三六八年七月である。元は太祖の即位より世祖の支那を一統するに至るまで五代七十四年、而して世祖の一統より順帝に至るまで十代八十九年、合計十五代百六十三年にして亡びたのである。

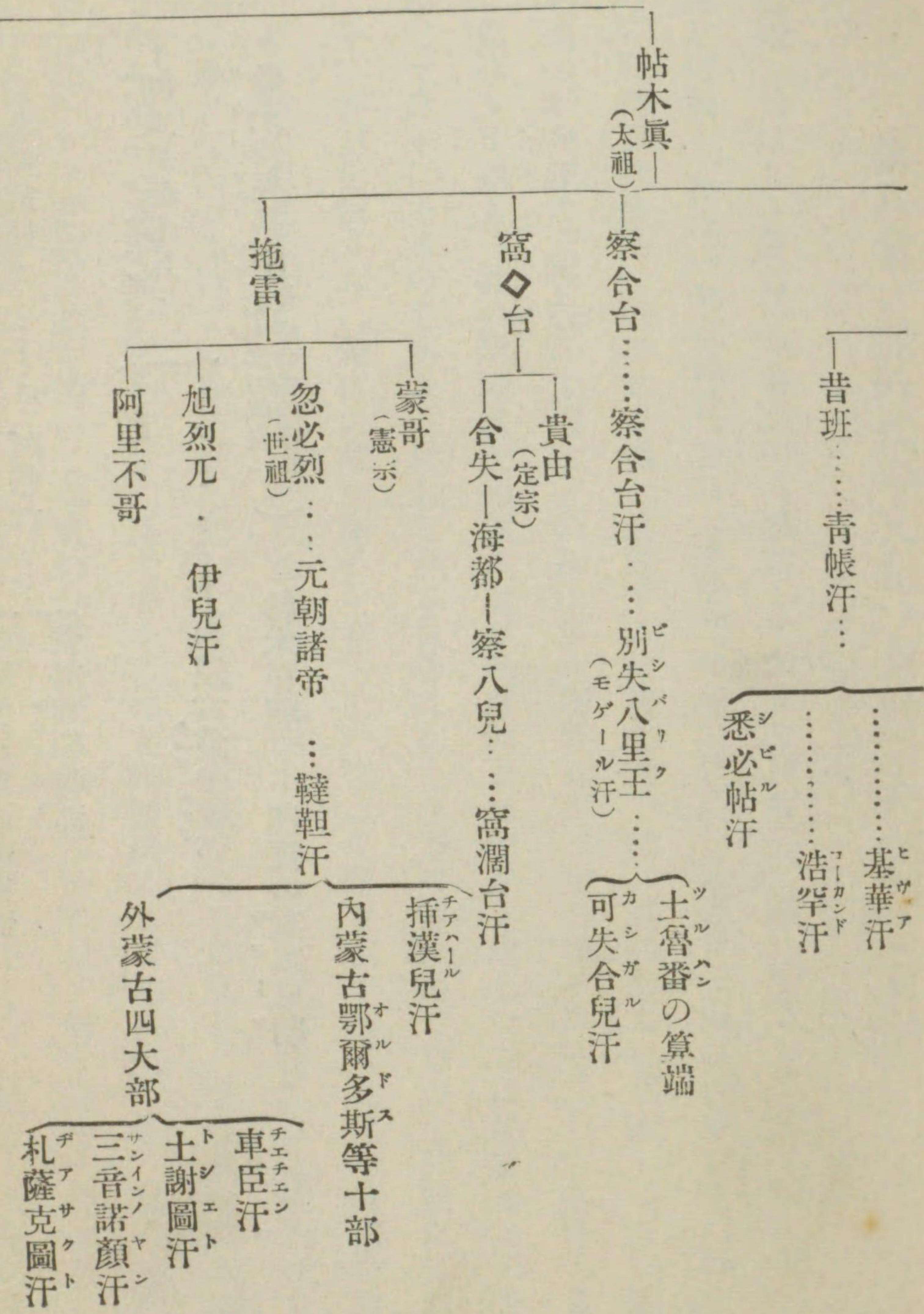
元の帝系(十五代、百六十三年)



蒙古諸汗系統



第三期 第七章 群雄の興起 元の滅亡



朮赤哈薩兒……………阿魯台……………

〔內蒙古科爾沁等九部
青海和碩特部〕

帖木哥幹赤斤……………乃顏

〔內蒙古翁牛特部〕

哈刺沙兒諾顏(帖木眞の疎族にシテ察合台の宰相)……………帖木兒朝……………印度の莫臥兒朝

第八章 元時代の文化 東西の交通及び貿易

概観 元はもと蒙古の一部族から崛起して四隣を併呑し、遂に南下して金を倒し宋を滅ぼし、東は高麗を威服し、西は中央亞細亞、波斯、露西亞、波蘭、匈牙利を掃蕩し、南は西藏、雲南、印度支那諸國を征服して亞細亞歐羅巴に跨る大帝國を建設するに至つた。故に其の版圖の廣大にして經略の雄偉なるは蓋し秦の始皇漢の武帝唐の太宗などの及ばざる所である。元の統一は一二七六年即ち世祖の至元十三年に成れりと雖も、其の建國は太祖帖木眞が幹難河上に大汗と稱したるに始まるものであつて宋の滅亡前七十餘年にあるのである。然しながら彼等のもと北方の遊牧民であつて狩獵以外に一定の生業なく、手に劍鋌を執り耳に殺伐の聲を聞くを常として眼に文籍を視ず心に文化の餘澤を被ふらなかつた、故に其の馬蹄の過ぐる所よく歐亞兩大陸を蹂躪したりと雖も、文物典章は依然として宋金の臣僕たるに過ぎなかつたのである。蓋し宋が文を以て國を建てたるに反し、元は武を以て國を開きたるものであるが、一旦支那を統一するに及んで千古の文物燦然たるに心醉し、忽ち軟化して往年の元氣を消失したから、武威は忽ち弛びて宗社の柱礎が既に傾くに至つた。恰も遼の文物が興らんとして金に滅ばされ、金の典章が盛ならんとして元に滅ばされたと同型である。然かも太祖帖木眞の雄圖と世

第三期 第八章 元時代の文化 東西の交通及び貿易

美文ありー

祖忽必烈の英略とは古今稀に觀る所であつた、故に元の規模宏大なるは宋遼金の比ではない、特に世祖は人を用ふるに國の内外種族の異同を問はず、力めて外國の文明を輸入せんとしたのである。若し此の曠古の大帝國をして唐宋の如くに國祚長久ならしめたならば、必ずよく新文明を吸入し新思想を鼓吹して數千年の學術界に一生面を聞き、支那文化史上に新紀元を劃するに至つたであらうが、惜しい哉世祖以後また英主の出づるものなく、帝業は忽ち衰へて國祚は遂に絶ゆるに至つたのである。是れ吾人が此の大帝國の生命僅に百年に達せざるを悲しむと同時に、新興國の文華開かんとして未だ開かざる中既に風霜の侵す所となりて凋落したるを憾む所以である。是の如く短命なりし大帝國が物質的文明の稍々看るべきものある以外に、未だ一代の文物を興すに遑なかりしは勿論であらねばならぬ、故に元の學者は性命理氣を講ずるも淺薄の誹を免かれない、文字訓詁に従事するも散漫の嫌がないではない、有元一代の碩學許衡、吳澄、金履祥の如きも皆徒らに宋儒の故轍を履み宋學の餘瀝を嘗むるに過ぎなかつたのである。然しながら元人の剛猛にして殺伐を好む風は宋人の空疎にして議論を尙ぶ風と異なつて居た、故に元の詩人は宋の詩を模倣せずして却て唐を祖述し金を憲章して居る、唯唐詩の特色は渾厚にあり、金詩の特色は悲壯にありと雖も、元詩の特色は幽麗にあるを其の異なる所とするのである、而して特によく一代の精華を發揮して支那文學史上に新紀元を開きたるものは元時代の戯曲

及び小説であつた、是れ世の識者が元の戯曲小説を激賞して漢史、唐詩、宋文、元曲と相對稱する所以である。

元の官制 續文獻通考に「太祖起自朔土、統有其衆、部落野處、國俗淳厚、惟以萬戶統軍旅、以斷事官治政刑、任用者不過一二親貴重臣耳、及取中原、太宗始立十路宣課司、選儒術用之、金人來歸者因其故官、若行省若元帥、則以行省元帥授之、草創之初、未暇爲經久之規矣」といへる如く、初め蒙古の興るや固より遊牧の人民に過ぎなかつたから、其の制度は甚だ簡單であつて丞相は之を大必閣赤(Bigghachi)といひ、兵柄を掌どるものは左右萬戸のみであつたが、後西域を征服するや達魯花赤(Darughachi)即ち斷事官を各城に置きて之を監治し、太宗の時支那を侵略するに及び始めて十路に宣課司を設け、金人の來りて歸するものには其の故官を授けたのである。世祖は漠南軍事都督たる時より内治改良の志を抱き、漢人の材能あるものを延きて幕賓となし、位に即くに及んで劉秉忠、許衡に命じ古今の宜しき所を參酌して内外の官制を定めしめ、中書省を政務を總ぶる所となして中書令を首相となし左右丞相を其の副となし(後左右丞相は首相の權を有するに至れり)、其の下に平章政事、左右丞、參知政事があつた、樞密院は宋と同じく兵柄を掌どる所となして樞密使を長官となし、御史臺は黜陟を掌どる所となして御史大夫を長官となし、其の他に寺、監、衛、府があつて各々掌どる所があり、

外にあるものには行省、行臺、宣慰司、廉訪司があり、牧民官には路、府、州、縣に各々常職があつた、また工藝に關する官を設けたること甚だ多く、大都(京燕)と各路とに諸色人匠總管府があり、此の外また到る處に局を設けて織造、繡、染、氈、皮貨、窰、梵像、瑪瑙、玉石、油、漆等の製造に各々專官を置いたのである、而して諸官の長には必ず蒙古人を置き、漢人南人を其の次に置いた、即ち次官以下には内外人を擇ばず其の材に就いて博く之を登庸したのである。新元史の百官志に「世祖命劉秉忠許衡一定官制、以中書省管政事、樞密院管兵、御史臺司糾劾、又設行省行臺使内外均其輕重、以相維繫、立法之善殆爲唐宋所不及、然上自中書省下逮郡縣親民之吏、必以蒙古人爲之長、漢人南人貳之、終三元之世、奸臣恣睢於上、貪吏掊克於下、痛民蠹國卒爲召亂之階、甚矣、王天下者不可有私也、至一事而分數官、一官而置數員、秩位濫於遙授、事權廢於添設、率大德以後之所增益、不盡爲世祖之舊制也」といひ、また二十二史劄記に「故一代之制、未下有漢人南人爲正官者、中書省爲政本之地、太祖太宗時以契丹人耶律楚材爲中書令、宏州人楊維中繼之、楚材子鑄亦爲右丞相元制此在定制以前、至世祖時、惟史天澤以元勳宿望爲中書右丞相、仁宗時欲以回回人哈散爲相、哈散以故事丞相必用蒙古勳舊、故力辭、帝乃以伯答沙爲右丞相、哈散爲左丞相、太平本姓賀、名惟一、順帝欲以爲御史大夫、故事臺端非國姓

不授、惟一固辭、帝乃改其姓名曰太平、後仕至中書省左丞相、終三元之世、非蒙古而爲丞相者、止此三人、哈散尙係回回人、其漢人止史天澤賀惟一耳」といへるは參考とすべきである。

元の兵制 元の初め興るに當り其の軍隊には蒙古軍、探馬赤軍があり、蒙古軍は皆其の國人であつて探馬赤軍は其の諸部族であつた、而して男子は年十五以上七十以下を悉く兵となし、十人を一牌となして牌頭を置き、馬に上れば戦闘をなし馬より下れば屯して牧養をなすのである。また孩幼の稍々長じたるものを籍して兵となし之を漸丁軍といひ、また獨戶軍(一戸より一)、正軍(二三戸より)、匠軍(工匠を取な)質子軍(諸王侯及び將校の子弟を取る)答刺罕軍(募兵より成る)等があつた。其の後中原を平らぐるに及び人民を發して卒となし之を漢軍といひ、年二十以上のものを限りて其の繼に充つ、宋の兵を得て新附軍と號し、また遼東の紮軍、契丹軍、女真軍、雲南の寸白軍、福建の畚軍等の如き他方に出成せざるものがあつた、蓋し郷兵である、また別に礮軍、弩軍、水手軍等があつた。世祖の時に至り内には左、右、中、前、後の五衛を立て、宿衛を總べ、諸軍衛に親軍都指揮使を設け、外は萬戶(萬人)の下に總管を置き、千戶(千人)の下に總把を置き、百戶(百人)の下に彈壓を置き、樞密院をして之を總領せしめた、若し方面に警ある時は行樞密院を設け、事止めば廢したのである。世祖はまた漢人、南人の兵器私藏を禁じて亂源を豫防した。軍器は宋元の際に至り火器が用ひられたる爲め大に革まり、また戰術に異動を來すに

至つた。是より先き火薬は唐の世既に破石、爆竹に用ひたるも戦争に用ひたることなく、宋の太祖の時始めて火箭があり真宗の時始めて火球の名がある、而して金元の戦及び宋元の戦には往々震天雷と稱する大砲及び石油を用ひて發する火砲を用ひて居るが、砲術は西域から傳はつたのである。歐羅巴に於ては一三三〇年の頃獨逸の僧ベルトルド・シュワルツ (Belford Schwartz) が始めて火薬を發明したといはれて居るが、火薬の發明は支那が最も古く、大砲は亞拉比亞人が之を發明して支那及び歐羅巴に傳へたるものであると考へられるのである。

元の法制 蒙古は初め法律がなかつたから百司の斷理訟獄に金律を循用して頗る嚴刻であつたが、世祖の時に至り中書參知政事何榮祖が公規 治民、禦盜、理財等の十事を續して至元新格(名例、衛禁、學規、軍律、戶婚、食貨、大惡、姦匪、盜賊、詐欺、訴訟、闘毆、殺傷、禁令、離犯、捕亡、恤刑、平反)と名づけ之を上つたから、帝は板に刻して頒行し百司をして之を遵守せしめた、而して其の法律は古制によらざる所ありと雖も刑名は同じくして笞、杖、徒、流、死の五種に分れて居る、笞刑は七より五十七に至り、杖刑は六十七より一百七に至るのである、其の十の數より三を減じて七となす所以は、天地人各一を宥すとの意に基づいて居るのである。また徒刑は宋と大差なく、流刑は南人は北地に遷し、北人は南地に遷すこととなし、死刑は斬のみであつて絞はなかつたのである。

元の税法 元の税法は概ね唐の制によりたるものであつて内郡より取るものを丁税、地税となし、唐の租庸調に倣ひたるものである、また江南より取るものを夏税、秋税となし、唐の兩税法に倣ひたるものである、續文獻通考に「丁税地稅之法、自太宗始行之、丁稅少而地稅多者納地稅、地稅少而丁稅多者納丁稅、工匠僧道驗地、官吏商賈驗丁、虛配不實者杖七十徒二年、仍命歲書其數於冊、由是課稅所申省以聞、違者各杖一百、世祖申明舊制、於是輸納之期、收受之式、關防之禁、會計之法、莫不備焉」といへる如く元の税法は大體に於て太宗の時から世祖の支那を統一したる時まで定まつたのである、而して地稅は上田より每畝三升、中田より二升半、下田より二升、水田より五升を取り、丁稅は每丁粟一石、驅丁五升(恐らく五斗の誤)、新戸の丁驅は其の半ばを徵し、老幼からは徵せず、商稅は三分の一を取つたのである。

元の交鈔 元は太宗の時始めて交鈔を造り、世祖の時に至り中統交鈔(十文、二十文、三十文、五十文、一百文、二百文、三百文、一貫文、二貫文)九種を造り、次で至元交鈔(五文より二貫に至る十一等)を造り、毎年印造の數は數十萬より數百萬に上つた。其の法は絲を以て本となし、絲鈔一千兩を以て銀五十兩に代へ(即ち元鈔一貫=銀一兩=金一兩の割合なり)、諸物の價は並に絲の例に従ふことに定めたのである。其の後武宗の時また至大銀鈔を造つたが、仁宗の時に至りて之を罷めたから、中統至元の二鈔は元の世を終るまで行はれたのである。かくて初

めは各路に平準行用庫を立て、金紙の交換をなし、また回易庫を立て、故鈔と新鈔との交換を許し、また丁錢、田賦には皆交鈔を以て納めることを許したから盛に天下に流通するに至つたが、後には回易庫を閉ぢて交換を罷め且つ偽造するものが多かつたから交鈔の信用地に墜ち、物價騰貴して鈔の價格下落し經濟上の一大擾亂を起すに至つた。是に於て順帝の時に至り丞相脱脫(Tohtai)の議により鈔法を廢して至正通寶を鑄造し、歴代の銅錢と并用せしめたるも後幾許ならずして元は遂に滅亡したのである。

元の選舉制 元は太祖始めて中原の地を得るや耶律楚材の議により科擧を以て士を取りたるも未だ法となすに至らずして止み、また世祖の時に科擧の新制を議定したるも未だ行ふに及ばなかつたが、仁宗の時に至り舊制を斟酌して其の條制を定め、三年毎に考試をなすこととなつた、また鄉會試及び御試を行つたのである。當時進士を分ちて兩榜となし、蒙古、色目人を右となし漢人、南人を左となして每試三場となし、第一場は蒙古、色目人に經問五條を試し、漢人、南人に明經經疑二問、經義一道を試し、第二場は蒙古、色目人に策一道を試し、漢人、南人に古賦、詔、誥、章、表の内一道を科し、第三場は漢人、南人のみにして策一道を試するのである。また其の出身には別に蒙古國子學、回國子學等の目があつた、是れ前代にはなき所である、而して蒙古人の科目出身者には從六品の官を授

け、色目人、漢人、南人の科目出身者には一級を遞降して授けた。其の後順帝の時に科擧を罷めたることあるも、幾許もなくしてまた行ふこととなつたのである。色目人とは西域諸國の人をいふのであつて色目を異にする人即ち外國人の義である、また漢人、南人は俱に支那人をいふのであるが、其の區別は次に述べる如くである。初め金は遼の地たる支那北邊の人民を取りて漢人となし、次で宋の河南山東の人民を取りて南人となし、元は先づ金の地たる河南山東以北の人民を取りて漢人となし、次で南宋の地の人民を取りて南人としたのである。またマルコ・ポロ(Marco Polo)の旅行記に南宋をマンジ(Mangi)と稱して居るのは、當時南人を蠻子と異名したるによるのである。是の如く元は國の内、外、人種の異同を問はずして人材を任用したるのみならず、宿衛勳臣の家には其の職を世襲するものがあつたから、元史の選舉志に「仕進多岐、銓衡無定制」、「吏道雜而多端」、「縦情破律、以公濟私」、「文繁吏敝」といへる如き弊があつて選舉の法は完全に行はれなかつたのである。

元初に於ける外國人任用の例 元は太祖以來國の内、外人種の異同を問はずして人材を登庸したるを以て契丹、女眞、畏兀兒、吐蕃、康里、中央亞細亞、波斯、亞拉比亞、歐羅巴から來り仕へて文武の官吏となれるもの頗る多く、其の殊に著名なるものを擧ぐれば、契丹人耶律楚材は太祖太宗に仕へて中書令となり、國政に參し法制を作りて蒙古の國是を定め、不花刺(Bokhara)の人賽典赤瞻思丁

(Sayid Edjell Shams ud-din 正確にシキハ Shams ud-din Sayid Edjell なり) は一名を烏馬兒(Omar)といひ、太祖西征の時に従ひ來り世祖の時に至るまで歷仕して丞相に任せられ、其の子納速刺丁(Nasur ud-din)・哈散(Hassan)・忽辛(Hussain)・善速丁兀默里(Shams ud-din Omar)・馬速忽(Massud)の五人もまた文武の高官に任せられ、就中納速刺丁は交趾を征して功あり後桑哥(Sanga)に黨して誅せられたが、其の子伯顏答兒(Bayanchar)・烏馬兒(Omar)・答法兒(Djalar)・忽先(Hussain)・沙的(Sadi)の五人は皆高官に任せられた。波斯の八瓦耳(Baurd)の人阿刺瓦而思(Ala Wardi)もまた太祖に降り蒙古に來り仕へて定宗の時に財賦の事を掌どり、其の子阿老瓦丁(Alai ud-din)は世祖に仕へて武勳あり、一二九二年百二歳の高齡を以て死んだのである。また札八兒火者(Djalar Khoja)は波斯の賽夷(Seistan)の人にして太祖に仕へ著名なる將軍であつた。百十八歳の高齡を以て死んだといふことである。太宗の時に波斯人奧都刺合蠻(Abdur Rahman)は寵を得て財賦の事を掌どり、太宗の病あるや酒をすゝめて遂に死に至らしめたから、定宗の即位するに及んで誅せられ、また猶太人愛薛は西域諸部の語に通じ星曆醫藥に巧にして初め定宗に仕へ、世祖の時に翰林學士に任せられ成宗の時に平章政事となつた。世祖の時には一二七一年波斯の人阿老瓦丁(Alai ud-din)及び亦思馬因(Ismail)が來り、其の將來せる砲を以て襄陽の攻撃を援け、波斯の天文學者札馬刺丁(Djamaala ud-din)は測天機を携へて大

都(燕)に來り、支那の天文學に貢獻したる所多く、また普通に波斯人といはれて居るが實は中央亞細亞のシール(Silr)河畔フェナケット(Fenaket)の人であつた阿合馬(Almad)は財賦の事に通じて世祖の信任を得、鐵冶を興し鹽稅を増し頗る成績を擧げて平章中書政事に拜し、また製國用司の事を領し更に平章尙書省事に任せられて天下の戶口を括し、藥林樵茶に至るまで遺す所なく専ら收歛を事とするに至り、加ふるに威刑を示して賄賂を貪つたから遂に中外の怨を受けて益都の千戶王著の鎚殺する所となり、次で畏兀兒人桑哥(Sanga)もまた世祖の信任を得て財賦の事を掌どり、交鈔を濫發し鹽鐵權酷の稅を増し諸路の錢穀を鈎致するに至つたから、人民怨望し群臣彈劾して遂に誅せられ、また伊太利人マルコ・ポロ(Marco Polo)は來りて世祖に仕ふること十七年に及び揚州都督、樞密副使に累官し、吐蕃人八思巴(Phagspa)は佛學を以て帝師となり、蒙古文字を製作し、畏兀兒人迦魯納答思(Karatas)は天然教(恐らくイスラ)及び諸國語に通じ、翰林學士承旨に擢んでられたのである。その他波斯、亞拉比亞、中央亞細亞諸國の學者及び軍人、伊太利佛蘭西の美術家及び工藝家等の來りて元に仕ふるもの頗る多く、之が爲め東西の文明が融合するに至りたることは大に注目すべきことである。

元の學制 元は太宗の時に國子總教及び提學官を設け、侍臣の子弟に命じて入學して業を受けしめ

たるも、學制は未だ備はらなかつたが、世祖の時に至りて國學監を設け國子學を建て、學生百二十人を置き、半ば蒙古人となし半ば漢人となし、其の後諸路に學官を設けて各々教授一人、學正一人、學錄一人を置き、府及び上中州に教授一人、下州に學正一人を置き、各縣に小學を設けて教諭一人を置き、また蒙古國子學及び回回國子學を設けて、蒙古人、色目人、漢人の官吏の子弟を入學せしめた、また諸路に蒙古字學、回回字學を設けて民間の子弟を教へ、また陰陽學、醫學を設けたのである。而して各行省所在地に儒學提學司を置きて諸路府州縣の學校を統べしめ、江浙、湖廣、江西に蒙古提學學校官があり、河南、浙江、江西、湖廣、陝西に官醫提學司があつた。是より先き南宋の時から私人の設立せる書院は頗る發達して居るが、世祖の時に至り詔して先儒過化の地、名賢經行の所、好事の家に命じ、錢粟を出して學者を贍し竝に書院(書院中教を掌るもの)を立てることを許して居る、是に至りて私立の學校もまた大に發達し内外の學制が完備したのである。

蒙古文字 初め蒙古には文字がなかつたが、太祖の乃蠻を征するに及び乃蠻人の使用せる畏兀兒(Dighe)文字即ち回回文字を採用するに至り始めて文字があり、後また漢字を借りて用を辨じたが世祖の時に至り喇嘛(バグス)八思巴(Phagspa)に命じ蒙古新字を製せしめて之を頒行した、是れ今世に傳ふる蒙古文字である。元史に「命製蒙古新字、字成上之其字僅千餘、其母凡四十有一、其相關紐而成子

者、別有韻關之法、其以三合四合而成字者、則有語韻之法、而大要則以諸聲爲宗、至元六年詔頒行天下、凡璽書頒降、並用蒙古新字、各以其國子副之」といへるによれば、蒙古文字を頒行したるは至元六年即ち一二六九年である。其の書法は縦に書して左より右に及ばすのであつてもと畏兀兒文字を基礎としたものであるが、畏兀兒文字はもとネストリウス(Nestorius)教即ち景教の僧侶がシリア(Syria)文字を基礎として作りたるものなれば、蒙古文字もまたシリア文字の系統に屬し、多少サンスクリット文字及び西藏(Hindoo)文字の影響を受けたる所あることが認められるのである。

元の儒學 初め宋と金とは互に相敵視したから宋儒の學説は久しく北方に傳はらなかつたが、元の太祖の時に金の軍資庫使姚樞を獲て之を重用し、次で太宗の時に其の子濶端(Kintan)をして南侵せしむるや、姚樞に命じ軍に従ひて儒釋醫卜凡そ一藝あるものを收めしめ、大儒趙復を得て還つたから是より宋儒の學説が北方に傳はり、姚樞もまた始めて程朱の書を見ることを得たといふことである。次で郝經、許衡、劉因の如き儒者が輩出した。郝經字は伯常、澤州陵川の人である。世祖に仕へて宋に使い賈似道の爲めに拘はれたるも屈せず、忠節を以て顯はれて居る。許衡字は仲平、懷州河内の人である。世祖に仕へて信任を受け、學徳最も高く門流甚だ盛にして世に魯齋先生と稱せられ、元儒の大宗と稱せられて居る。劉因字は夢吉、容城の人であつて靜修と號し、初め經學を修めて訓詁註釋の

説を究めたるも意に満たず、後周邵程朱の書を得て一見して之に服し、是より朱子の學を祖述し諸學文章を兼ねて一代の大家と稱せられた、世祖が詔して之を徵すや出で、仕へたるも、幾許もなくして歸つたのである。同時に宋の遺儒に馬端臨及び金履祥があつた、馬端臨字は貴興、江西樂平の人であつて文獻通考を著し、金履祥字は吉父、蘭溪の人であつて朱子の女婿黃幹の再傳の弟子である、金華山沖に隠れ後仁山の下に遷りて講説したから、世に仁山先生と稱せられた。次で南方に吳澄が出て居る、吳澄字は幼清、草廬と號す、撫州崇仁の人であつて黃幹三傳の弟子である、世祖の晩年に徵されたるも辭して歸り、尋で翰林學士となり泰定帝の時にまた病を謝して歸つた、其の學は朱子を宗として陸子の説を雜へ、北方の許衡に次げる名儒である。また成宗の時には蕭剡、杜英が出で順帝の時には陳櫟、胡一桂、許謙、黃澤等が出で、皆一代の大家と稱せられたのである。

元の詩文 蒙古はもと文字がなく畏兀兒文字または漢字を借りて其の用を辨じたが、世祖の時に至り始めて蒙古文字を製するに及び、蒙古語及び蒙古文字を公用して支那の言語文學に重きを置かなかつた、加ふるに元は國運が甚だ短かつたから、宋金の文學を傳承したるも充分なる文運の發達を見るに至らなかつた。然しながら此の間また一代の文豪と稱すべきものがなかつたのではない。宋の宗族にして元に仕へたる趙孟頫は字を子昂といひ、書畫を能くせるのみならず詩文もまた清邁奇絶にして

て元代文學の氣運を開き、次で虞集、楊載、范梈、揭傒斯の四大家が輩出して益々之を盛にしたのである。虞集字は伯生、道園と號す、初め吳澄の門に遊び學問洽博にして一代の文宗と稱せられたが、然かも平生の文稿の存するものは十の二三に過ぎぬといはれて居る。楊載字は仲弘、初め趙孟頫の推薦によりて名を成したのである、而して其の詩は材を漢魏に取り音節を唐に取つたといふことである。范梈字は亨父、其の人格の高さが爲めに詩文もまた遠清逸宕にして恰も其の人の如しと稱せられて居る。揭傒斯字は曼碩、其の詩は清麗婉轉にして神骨秀削體裁最も備はつて居るのである。四家に次で歐陽玄があり、また文を以て著はれ、揭傒斯と共に宋史金史の撰修に力を盡くした。また四家と前後して流麗の詞を巧にしたる馬祖常、薩都刺の二人があり、殊に薩都刺は詩文共に秀絶にして特に絶句に長じて居たのである。元末に至り著名なるものには楊維禎があり、字は廉父、鐵崖と號し、元の滅亡後また仕へず、最も樂府、小詞に長じて常に新機軸を出した。其の他に黃潛(字は晋卿)、柳貫(字は道傳)、吳萊(字は立夫)等の徒が出で、明初に於ける文學の胚胎をなしたのである。

元の戲曲及び小説 元代の文學は到底唐宋の世の隆盛に及ばざるのみならず、其の詩文もまた唐宋に比すれば頗る遜色ありと雖も、元代が支那文學史上に一新紀元を開きたるものは戲曲及び小説の勃興したることである。支那は歴代儒學を尙んだから戲曲小説の如き娛樂的文藝の發達を観ることが甚

だ遅かつたが、元の世に至り蒙古民族及び諸外國人によりて新思想が注入せられたる結果、遂に戯曲小説の勃興を來したのである。支那の古代には既に諸種の雜劇が行はれて居るが未だ戯曲は起らなかつた、然るに漢の世に樂府の一體が起り唐に至りて詞曲となり宋に至りて益々流行し、元に至りて戯曲となり遂に天下後世に流傳するに至つたのである、故に戯曲の直接の源泉は詞曲である。詞曲の目的は高歌長吟して管絃に和し舞踏に合はせることである、之を詩餘と稱するは詩の長短句の別派と見做すからであり、また之を填詞と稱するは篇に一定の規矩あり句に一定の平仄あること近體詩の如く、而して題ごとに各々法式を殊にするから、詞人は題によりて平仄排次の法を案じ、毎句文字を填充するを以ていふのである。かくて宋の世は詞曲隆盛の時代であつたが、其後元の世に及び戯曲が新に起りて之を壓倒したから、詞曲は遂に其の盛を戯曲の爲めに奪はれて衰ふるに至つた、故に元明の詩人は之を詩餘と稱して偶々作るものもあるも、また之を管絃に和し舞踏に合はせるものなきに至つたのである。然しながら戯曲は金元の際頗る流行して居るから、宋の世に既に發達して居るものと認められるが、尙ほ羅振玉の敦煌零拾の中に佛曲三種を収めてあるのを見れば、唐の中頃に既に戯曲の形を備ふるものがあつたことがわかる、蓋し唐の佛教僧侶は之を宣教の手段に用ひたのであつて想ふに印度の戯曲に倣ふたのであらう、故に戯曲は唐に起り宋に至りて發達し元に至りて大成されたのである。戯曲には南曲、

北曲の別あり、金元二朝の中國に入るや其の用ふる所の胡樂は其の音嘈雜凄緊であつたから、中國人の詞は北人の耳に快からず、是に於て別に新聲を作りたるものを北曲といひ、中國人もまた北曲の聽くに堪へざるを以てまた新體を創めたるものを南曲といふのである。元代の戯曲は其の數甚だ多くして群英の編輯せる所の五百五十六本中、元は五百三十五本あり其の中に無名氏の作百七本、倡夫の作十一本ありと稱せられて居る、而して明の戒晉叔は其の特に佳なるものを選んで元人百種曲(また元曲 選さいふ)を著し、また汲古閣本の元人六十種曲があつて世に傳はつて居るが、就中其の最も傑出せるものは北曲の西廂記と南曲の琵琶記とである。西廂記は王實甫の作と稱せられ、其の材料を唐の元稹の作れる會真記に取り、すべて四套四十六折、方に一部の情史であつて男女離合の情緒を描寫したるものなれども其の詞采は千古の絶調と稱せられて居る。琵琶記は高則誠の作る所であつて其の友王四(琵琶の字は四王 記と名づけ たりさいふ)が舊妻を棄て、姻を權門に通じたるを諷刺して作れるものといふ、蓋し孝婦貞妻の行路難を叙したるものであつて其の意匠は西廂記に比すれば頗る複雑多端なれども、其の文辭は西廂記の婉麗なると異りて清雅冷艶の氣を帯びて居る。要するに二曲各々長短があつて之を對比論評したるものは甚だ多しと雖も、共に千古の傑作たることは疑を容るべき餘地がないのである。王實甫、高則誠以外に元代の戯曲家として有名なるものは關漢卿、馬致遠、喬夢符などが第一流に屬すべきものであらう。

ついでにいふて置くが、曲本を院本といふことに就いては輟耕錄に「唐有傳寄、宋有戲曲唱詞、金有院本雜劇諸宮調、院本雜劇其實一也、國朝院本雜劇始而二之」といひ(國朝は元代をいふのであらう)、また王國維の宋元戲曲史に「院本者、大和正音譜云、行院之本也云々、則行院者、大抵金元人謂倡伎所居、其所演唱之本、即謂之院本云爾」といへるを見ればわかるのである。小説の起原は遠く周の稗官、莊周の寓言、漢の虞初にあるのであつてもと神仙、變異、街談、巷語を記述するに過ぎなかつたが、唐の世に至り傳奇と稱して之を作るもの多く、宋の世に至り更に彌々衆く、元の世に至りては諸種の新思想が蒙古人及び諸外國人によりて注入せられたる結果、人心をして奇異を聞くことを好むに至らしめ、學者及び文士もまた其の耳にせる所の異聞を採録したから、漸く其の盛を致して遂に小説の勃興を見るに至つたのである、而して當時の學者及び文士が蒙古人の下に屈するを恥ぢ、退いて戲曲及び小説を作り其の餘憤を漏せることも、また其の盛を致せる一原因であらねばならぬ。かくて元代に出でたる小説は其の數甚だ多しと雖も、就中水滸傳を白眉となし之に次ぐものを演義三國志となさねばならぬ。水滸傳の作者は詳に知られて居らぬが、施耐庵の作とするのが正しいやうである、而して今世に傳ふるものは其の種類多しと雖も、李卓吾の忠義水滸傳百二十回本が正本と認められる。其の内容は宋の徽宗の時に宋江といふものが、其の徒三十六人を率ゐる河朔の間を横行して盜をなした

ることを正史の實録により構成したるものであつて是等の豪傑をして各々其の獨特の性格を現はし、驚天動地の快擧をなさしめたる作者の手腕は實に稱揚すべきものである。加ふるに其の文辭は雄渾爽銳にして讀者に壯絶快絶の感懷を起さしめるのは、支那小説中稀に看る所なりといふべく、金聖歎は稱して天下の文は水滸傳の右に出づるものなしといふて居るのである。演義三國志の作者は羅貫中と稱せられて居るが確實ではない、其の内容は正史の三國志によりて演義したるものであつて其の脚色文辭は共に水滸傳に比すれば大に遜色ありと雖も、また稀世の大小説たることを失はぬのである。次で明の世に至り小説は益々盛になりて西遊記、金瓶梅の出づるに及び、水滸傳、演義三國志と共に四大奇書と稱せらるゝに至つたのである。

元の史學 元の順帝の時脱脫(Tughlaq)等に命じて宋史、遼史、金史を撰修せしめ三年に及ばずして完成したが、實は是より先き世祖の時に編輯したる三史の舊本があつたから、是の如く短日月の間に完成することを得たのである。宋史は本紀四十七卷、志百六十二卷、表三十二卷、列傳二百五十五卷、すべて四百九十六卷あり、此の書編纂の主旨は道學を表章するにありて其餘は皆數に備ふるに過ぎぬのであるから、疎升蕪蔓なりとの譏を免かれぬのである、明の柯維騏が此の書を略抄せる宋史新編二百卷は却て其の要を得たるものとせられて居る。遼史は本紀三十卷、志三十三卷、表八卷、列傳四

十五卷、内に國語解一卷を附し、すべて百六十卷あり、遼はもと國人の著作を隣境に傳ふることを許さなかつたから、其の書史記録は滅亡の當時兵燹にかゝりて蕩然泯滅し、脱脫等の史を修むる時には考證すべきものなく、僅に耶律儼、陳大任の二家の記する所に據りて編纂したから疎略なる所が多い、唯國語解一卷は古人の音義の意に仿ひ其の例は甚だ善きもまた僞升が少なくないから、清朝に至り金元二史の國語と同じく改譯して略ぼ其の眞を得るに至つたのである。是の如く遼史は甚だ疎略であるから清の厲鶚が遼史拾遺二十四卷を撰し、他書を參引して其の闕けたる所を補つて居る。金史は紀九卷、志三十九卷、表四卷、列傳七十三卷、すべて百二十五卷あり、もと鄧祁の歸潛志及び元好問の壬辰雜編によりて纂修し、且つ編者が歴史に明であつたから其の體例もまた嚴整である、而して趙翼の陔餘叢考に大に此の書を賞讃しました二十二史劄記にも「金史叙事最詳核、文筆亦極老潔、迥出宋元二史之上」と推獎して居るのである。

元の科學 元の世には名儒文豪に乏しくなかつたが、將相大臣は皆胡人より出で、學士の待遇が重くなかつたから、文學經術の隆盛は唐宋の世に及ばなかつたが、世祖の時に盛に外國人を任用したから中央亞細亞、西亞細亞及び歐羅巴より來りて仕ふるもの多く、西方の天文、數學、醫術、砲術、建築術より測天機其の他の機械に至るまで陸續傳來したから、科學の進歩が著るしくして支那學術の上

に一新時期を開くに至つたのである。かくて郭守敬(字は若思)は世祖の時に出で、水利、曆數、儀象、制度の學に通じ、命を受けて新に授時曆を作りて曆法を改治し、また諸種の測儀を創作し、天文曆數に關する諸種の書を著し、同時に李治(字は仁卿、元史に治とあるは誤なり)が出でて數學を究めて測圓海鏡を著した。支那の醫術は是より先き南北朝の頃印度醫學の影響を受けて多少の進歩をなしたが、隋唐五代を経て宋に至るまで數百年の間には寥として聞ゆる所なく、漸く金に至りて勃興の機運を示し元に及んで始めて稍々整備するに至つたのである。かくて金元の際には李杲(字は明之、東垣と號す)が出で、内外傷辨論、脾胃論を著し、久しく衰頹して振はなかつた醫學に對して新なる機運を興へ、次で元に至り朱震亨(字は彦
溪と號す)が出で、格致餘論、局法發揮、金匱鉤玄を著した、是に於て世人は此の二人を並稱して朱李といひ以て其の術を重んずるに至り、是より醫學が漸く研究せらるゝに至つたのである、想ふに是れ當時傳來したる亞拉比亞及び歐羅巴醫術の影響が與かつて居るのであらう。兩般秋雨盦隨筆に「種痘始於宋眞宗朝王旦、其後各相授受、以湖廣人爲最」といへるによれば、支那には種痘が既に第十一世紀に發明されて居るのである、其の方法は今の牛痘と全く異なつて居るが、英吉利人エドワード・ジェンナー (Edward Jenner) の牛痘發明は一七九八年であるから支那の種痘發明は約八百年早いことがわかる、而して支那の種痘は其の後伊太利に傳はつて居るが、我が日本には先哲叢談によれば徳川幕府

の初期に明の遺臣戴笠が傳へて居る、戴笠字は曼公、我が邦に渡來するや僧隱元に就いて僧となつた、有名なる獨立禪師が是である、また彼は佩文齋書畫譜に「戴笠字曼公、杭州人、博學能詩、兼工篆隸、崇禎中從番禹人、乘桴入海、不知所終」と記されて居るのである。

元の道教 道教は宋の徽宗以來稍衰へ南宋に至りてもまた振はなかつた、元の太祖の西域にあるや道士邱處機(長春真人)を山東より招きたることあるも、敢て之を尊崇したるにあらずして不老長生の術を得んが爲めであつたのである。憲宗の時には道佛二家をして互に辯論せしめ、道家が勝つ能はざりしを以て其の偽經を焚き、また佛教寺院の道流に占領せられたものを返さしめたることあり、世祖以後は喇嘛教が元室の尊信を得て勢盛であつたから、道教の勢は頗る振はなかつたのである。然しながら元室は歷代道士を優遇して居る、かくて太祖は邱處機に道教を總領して到る處に道觀を建つるを許し、世祖は張氏に真人の號を加へて江南諸路の道教を總領せしめ、また張留孫の如きは世祖以來五代に歴仕して樞機に參し大に信寵せられたのである。元の世界には正一教、真大道教、太乙教、全真教の四派があつた、正一教は張氏の傳ふる所であつて専ら江南に行はれ、真大道教は金末の道士劉德仁に始まり、五傳して鄺希誠に至り憲宗から真大道教の名を賜はり、太乙教は太乙三元法錄の術を傳ふるによりて名づけ、金の道士蕭抱真に始まり五傳して李居壽に至り太乙掌教宗師の印を賜はり、

全真教は宋末の道士王重陽に始まり、其の弟子邱處機に至り太祖の尊信を得て江北に根據を固めたのである、而して邱處機の弟子宋披雲が始めて道藏を開雕して居るが、是より先き唐の世既に一切道教の名稱あるを見れば、道藏は蓋し宋の世に蒐收されたのであらう。

元の喇嘛教 佛教は元の世に至りて大に衰へ喇嘛教が之に代はりて勢力を得るに至つた、喇嘛教は吐蕃即ち西藏(Tibet)に興りたる一種の佛教にして専ら祈禱禁咒をなし、其の僧侶は紅衣を着くるが故に或は紅教ともいふのである。世祖は吐蕃の地の險遠にして其の俗の獷狃なるを憂ひ、喇嘛を任用して之を撫御せしめ、また喇嘛バグスバ(Phagpa Ladol Gyalsshan)を帝師となして吐蕃の地を領せしめ、其の命令をして詔勅と並び行はれしめたる以來威權の盛なること並ぶものなく、歴代の天子は即位の時皆帝師より戒を受け后妃公主と雖も皆膜拜するに至つたのである。かくて喇嘛教が盛に行はるゝや八思巴の後喇嘛は相繼で帝師となり、其の勢力日に強大となるに及び弊害百出するに至つた、喇嘛僧の吐蕃に往來するや金字圓符を佩びて驛傳を濫用し、地方官をして旅費を辨差せしめ、民間に就いて男子を驅迫し婦女を好淫するが如き横暴を極め、また官吏も喇嘛僧を逮捕する能はざるを以て彼等は時に民田を奪ひ財物を侵佔し、姦惡の徒は其の勢に附きて罪網を免かれ得るを以て賞罰の途廢し、また喇嘛僧は納税の義務なきを以て農民は其の部民と稱し田租を輸せざるものあるに至りて歳入漸く

滅じ、また彼等は歴代元室の尊信を受け近侍に營結して布施を強請するものあるに至り、之が爲めに朝廷供養の費の甚だ夥しかつた例は、元史に仁宗の延祐四年には其の歲供を麩四十三萬七千五百斤、油七萬九千斤、酥二萬一千八百七十斤、蜜二萬七千三百斤に定めたることを記せるを見れば、他物の贈與もまた之に相當して多額に上りたることを想像し得られるが、更に順帝の時に至りて最も甚しかつたのである。故を以て國庫は益々缺乏を告げ勢ひ人民に原歛せざるを得なかつたから、人民は其の負擔に堪へずして皆亂を懷ふに至り、蒙古人の羈絆を受くるを屑しとせざる漢人が四方に崛起して元室は遂に滅亡した、故に喇嘛教は元室滅亡の一原因をなしたものと云ふべきである。

元のイスラム教 イスラム (Islam) 教即ち回教は唐の世に一たび支那に入りたるも盛に行はるゝに至らず、唐末に至りて遂に其の跡を絶つに至つたが、天山南北兩路の地には盛に流傳して遂に佛教に代はるゝに至り、回紇 (Uighur) 人が最も之を信奉したから支那にては之を回教と稱したのである。かくてイスラム教は宋末に至るまで再び支那に流傳しなかつたが、元の太祖の金を攻めたる時には其の軍中に畏兀兒(回紇に同じ)人の如きイスラム教を奉ずるものあり、また太祖の西征するに及びイスラム教徒の來りて仕ふるもの多く、次で太宗及び憲宗の金宋を攻めたる時にもイスラム教徒の從軍せるものあり、世祖の支那を一統するに及び盛に西域人を任用したからイスラム教が行はるゝに至り、また蒙古

の王族將相中にも其の教を信奉するものがあつたから、遂に支那に流傳し、殊に支那本部の西邊に盛に行はるゝに至つたのである。

元の基督教 蒙古の勃興せる頃歐羅巴人は西亞細亞のイスラム教徒に對して既に數回の十字軍を起して居たが、會々蒙古は太祖及び太宗の時西征の軍を起して到る處イスラム教國を覆滅したから、基督教徒は蒙古人を以て基督教の爲めにイスラム教徒を撲滅するものと考へ、遂に之と同盟するを便すに至つた。是に於て羅馬法王インノケント (Innocent) 四世はプラノ・カルピニ (Joan du Plano Carpini) に命じ、一二四五年より一二四七年に至る間に欽察汗拔都を薩來に訪ひ更に元の定宗を喀喇和林に訪うて蒙古の勢力を探らしめ、次で佛蘭西王ルイ (Louis) 九世はパレスチナ (Palestine) に旅行中拔都の子撒里答が基督教を信奉するを聞き、一二五三年フランシスコ (Francisco) 派の僧ルブルク (Guilelmus de Rubruguis) を遣はして撒里答及び拔都を訪ひ、更に元の憲宗を喀喇和林に訪うて基督教の弘布を圖らしめた。其の後フランシスコ派の僧モンテ・コルヴィノ (Joan du Monte Corvino) がまた羅馬法王ニコラス (Nicholas) 四世の命を受け、印度を経て一二九三年海路によりて支那に達し、燕京に至り元の世祖の許可を得て布教に従ひ、漸次信徒を得て六千餘人に達し教會堂をハンブルグ (Khanbalig 汗の住) 即ち燕京に建立した。次で一二三〇六年コロンヌ (Cologne) の僧アーノルド (Arnold) が來りて共に

布教に盡力するに至り、モンテ・コルヴィノは書を送りて極東及び印度に於ける羅馬教會の發展を報告するや、羅馬法王クレメント (Clement) 五世は其の功を嘉みして一三〇七年モンテ・コルヴィノをカタイ (Catalay) 即ち支那の大僧正に任じ、且つ其の傳道を助けしむる爲め副僧正以下の僧職を置くことを許可するに至つた。當時基督教の會堂は燕京のみならず泉州、杭州其の他の地方に建立せられ、信徒は益々増加し多數の宣教師もまた相踵いで支那に來たといふことである。次で一三一六年より一三二八年に至る間にポルデノン (Pordenon) の僧正オドリック (Friar Odoric) がまた欽察、波斯、シリア、印度を経て海路より支那に至り、廣州、泉州を訪ひ遂に杭州に達して燕京に入つた、實に元の文宗の時に當るのである。一三三六年元の順帝は伊太利人アンドレアス (Andreas de Perouse) をして親書を羅馬法王ベネデクト (Bonedict) 十二世に致さしめ、翌年に至り其の返書を得たといふことである。次で一三四〇年フランシスコ派の僧マリニオリー (Joan du Morignoli) が羅馬法王の使節として陸路により支那に向ひ、途中阿力麻里に教會堂を建立した、此の地は一三三九年西班牙の宣教師が虐殺されたる所であつて其の後マリニオリーの教會堂もまた破壊されたのである、而してマリニオリーは一三四二年燕京に入り留まること三四年にして歸り、次でニコラス・デ・ボンネット (Nicholas de Bonnet) がモンテ・コルヴィノの後繼者として燕京に到着したのである。然るに當時支那は元室の勢威が衰へて群雄四

方に割據し、國內騷擾したから宣教は漸く困難に陥り、次で元が亡びて東西の交通熄むに及び、支那に於ける基督教もまた次第に廢絶するに至つたのである。

元の音楽及び書畫 元は蒙古から起れるを以て其の初めには音楽が未だ備はらなかつたが、世祖の時に至りて宋周臣に命じて樂工を領せしめ、また王鏞に命じて大成樂を作らしめ、後登歌、文武の二舞を大廟に用ひ、また社稷の樂章を選定した。次で成宗の時に郊廟の曲舞を制し、仁宗の時にまた太常に命じて樂工を補綴したから、是に至りて樂制が大に備はつたのである。書は元の世を通じて趙孟頫、鮮于樞、鄧文、原明が最も著はれて居る、就中趙孟頫、鮮于樞はまた畫に巧なるを以て名を得て居る。畫は元の初めに趙孟頫、高克恭あり、趙孟頫字は子昂、松雪道人と號し、宋の同族にして元に仕へ書畫文章經濟を能くし、其の畫は山水木石花竹人馬に妙を得、高克恭字は彥敬、房山と號し、初め米芾及び其の子米友仁の風を學び、後李成、董源、巨然の風を學びて能く山水を描いた。次で陳仲仁、顏暉、張嗣成等の大家が出た、而して鮮于樞もまた畫に巧なるを以て著はれた。陳仲仁字は元長、山水人物花鳥を能くし、顏暉字は秋月、道釋人物を寫すに長じて筆法奇絶八面生動の致ありと稱せられ、張嗣成は大玄と號し、巧に龍を描き兼ねて山水を能くしまた艸書を善くした。其の後黃公望、王蒙、倪瓚、吳鎮が出で、元末の四大家と稱せられて居る、黃公望字は子久、大癡道人と號して山水に長ず、初め董

源、巨然の風を學びたるも、晩年に至り其の法を變じて自ら一家を成す、王蒙字は叔明、黃鶴山人と號し、巨然の風を學びて山水を善くし墨法秀潤なるを以て著はれ、倪瓚字は元鎮、雲林と號し、初め董源の風を學びたるも晩年に至りて造詣愈々深く、古法を一變して天真幽淡を宗となし、よく林木平遠竹石を描きて清疎澹遠風致絶倫殊に市朝塵埃の氣なしと稱せられ、吳鎮字は仲圭、梅花道人と號し、巨然の風を學びて山水を善くし、また花鳥を巧にしたのである。

元の農業 元の初め司農司を立て、董文用を山東西道の巡行觀農使となし大に東方の地を開き、後農桑の令を頒布し毎村五十家を以て一社となし、高年にして農事に曉通せるものを長となし専ら農民を教督することを掌ごらしめ、而して五十家に及ばざるものは別村と社を合せ、若し地遠くして別村と合する能はざるものは自ら社を立つることを許した、故に農業は漸次發達したのである。

元の商工業 元以前は歴代皆重農輕商の積弊があつて商工業は發達しなかつたが、元の興るや外國を侵略して版圖を擴張したる結果、外國との交通が頻繁となり通商が盛に行はれたから内地の商工業もまた發展するに至つた、殊に元は政府自ら貿易を營み且つ官設工場を立て、官用に供するものを製造したるが如きは、其の進歩の一斑を知るに足るのであるが、更に元史によれば梵像提舉司(彫刻繪畫、出臘提舉司(事な掌ごる)等)の署場を設け、其の他繡繪綉紋綿紗羅瑪瑙金銀木石油漆漆器冶等の如きも局を

設けて製造し、また各地に織染提舉司十六ヶ所を置きて染絲綿織布帛等の事を掌ごらしめたるを見れば、其の産業の盛であつたことが知れるのである。加ふるに元の世には科擧の法が治く行はれなかつたから、士民の驥足を伸ぶべきものは唯商工の二途であつた、故に商工の業に従事するものが多くして民間の商工業もまた隆盛に赴いたのである。然るに世祖の時に外は遠征を務め内は聚斂を興して鹽鐵權酷商稅田賦等の征利を重くし、明宗以後は苛斂最も甚しくして民怨沸騰し、國祚僅に百年に及ばずして遂に滅亡するに至つたから、隆盛に赴きつゝあつた民間の商工業は頓挫して遂に完全なる發達をなし得なかつたのであらう。

元の漕運 元より以前支那南北の運輸はすべて河川によつて居たが、元に及び始めて海運を通ずるに至つた、然しながら風信時を失すれば江南の地方より燕京に達するには年を踰ゆるが如きことがあつたから、未だ全く海運のみによることができずして廣く新河を開きたるも、舟の破損が多かつたから之を罷めてまた海運を専らにするに至つたのである。其の後會通河及び惠通河を開いて漕運を通じたが、武宗の時に官吏を江南に派して海運の事を議し、江南各地の糧運はすべて海道によらしめることとなつたから、海運は益々盛になつたのである、而して其の航路は屢々變更したるも、最後に開きたるものは風信の宜しきを得れば旬日にして浙西より燕京に至るを得べく、時に漂没するものありた

るも漕河の費に比較すれば、其の益する所は多かつたといふことである。

元時代の東西交通及び貿易 蒙古の勃興以後元の時代に東西の交通が頻繁となりたる二大原因は、

(一)空前絶後の大帝國が興りたる爲め從來所在に割據せる多數の小國は悉く滅亡したから、交通往來が自由となりたること、(二)政治上及び軍事上の目的を以て新に官道を開き、宿驛を設け、守備隊を配置したから、旅客の危険困難を減少したることである。是に於て東西の交通は面目を一新して中央亞細亞、西亞細亞、波斯、印度及び歐羅巴諸國の商人の海陸兩方面より蒙古及び支那に來るもの多く、交通往來が頗る頻繁となつたのである。かくて其の陸路によるものは西亞細亞及び歐羅巴より一は中央亞細亞、天山南路を經、一は西伯利亞の南部を通過し天山北路を經て喀喇和林、燕京に至り、其の海路によるものは波斯、印度の海岸より印度洋、支那海を經て泉州、杭州等の諸港に達したのである。故に泉州の如きは當時世界第一の貿易港となり、亞拉比亞人、波斯人、其の他の外國人の來りて居住するもの萬を以て數ふるに至つたといふことである、而してマルコ・ポロ(Marco Polo)及びイブン・バツタ(Ibn Batuta)等の旅行記に記せる支那のザイトン(Zayton, Zaiton)或はザイツン(Zaitun)は泉州に比定せねばならぬ、泉州城の異名を刺桐城または瑞桐城といへることは方輿勝覽に「州城留從效重加版築、旁植刺桐環繞、名曰刺桐城、如先葉後花、其年五穀豐登、否則反是、故謂之瑞桐」

(留從效は初め南唐に仕へ後宋の太祖に仕へたる人なり)と記せるを以てザイトンを刺桐または瑞桐の對音として之を泉州に比定することができ、然るに一部の學者にはザイトンを漳州に比定するものありと雖も首肯することができぬ、泉州及び漳州の二港は今尙ほ南洋貿易の要港であつて共に厦門(Amoy)灣に於ける樞要の地であるから、漳州を以てザイトンとするのは多少の理由なきにあらざるも、泉州が唐宋以來外國貿易港として重要な地であつたのを見れば、ザイトンの泉州たることは疑ふべき餘地がないのである。かくて元は世祖の時に市舶司を泉州、上海、澹浦、温州、廣東、杭州、慶元の七港に設け、輸出入の貨物を検査して十分の一の關稅を取つたが、盧世榮の財賦を掌るに及び船を具へ本を給し人を選び海外に赴きて貿易せしめ、獲る所の利益を十分して其の七を官に取り其の三を貿易者に與ふることとなり、人民の海外に私航して貿易するを禁じたが、盧世榮の死後之を廢したのである。此の時代に歐羅巴及び西亞細亞から蒙古及び支那に來れる旅行家及び宣教師の著名なるものを擧ぐれば、プラノ・カルビニ、ルブルク、モンテ・コルヴィノ、オドリック、マリニョリー等の如き宗教家以外に、小アルメニア(Armenia)王の弟ハイトン(Haythou)は一二一五年蒙古に來りて憲宗に謁し、有名なる伊太利人マルコ・ポロは一二七五年支那に來り世祖に仕へて留まること十七年に及び、モロッコ(Morocco)の亞拉比亞人イブン・バツタは順帝の時一二四六年より一二四八年の間に支那に來つて居る、其の他亞拉比亞、

波斯、中央亞細亞の學者、軍人、技術家、伊太利、佛蘭西の學者、畫家、技術家、職工等の來りて元の朝廷に仕へたるもの頗る多く、之れが爲めに西方の天文、曆法、數學、砲術、建築術、工藝等は支那に傳へられ、支那の磁石盤、活版術等は西方に傳へらるゝに至つたのである。マルコ・ポロは伊太利のヴェネチアの人であつて一二七五年其の父ニコロ・ポロ(Nicolo Polo)及び叔父マフェオ・ポロ(Maffeo Polo)と共に支那に來り、世祖に仕へて先づ蒙古の言語風俗を學び、次で喀喇和林、大理、緬國、占城、南印度等に使い、揚州都督に任せられて職にあること三年に及び、益々世祖の信任を得て樞密副使に累進した。然るにポロ等は支那に留まること十七年の久しきに及び、其の間屢々西歸の許可を請ひたるも世祖は之を許さなかつたが、會々世祖の女と波斯の伊兒汗阿兒渾(Anglum)との婚約が成り、海路によりて公主を送らんとするや蒙古人が航海を恐れて躊躇するを見、世祖は遂にポロ等に命じて護送の任に當らしめたから、一二九二年の初めザイトン即ち泉州を發して公主を波斯に護送し、既に其の任務を果したるを以て更に郷里に向ひ、一二九五年の末ヴェネチアに歸つたのである。既にしてヴェネチアとジェノワとの間に戦起るや、マルコ・ポロは出で、ジェノワ軍と戦ひ一二九八年敗れて擒にせられ、ジェノワの獄に繋がるゝこと一年に及び、此の間其の東方見聞談を同檻せるピサ(Pisa)の人ルスタチアノ(Rusticiano)に語りたるに、後年に至り遂に一部の書籍となりて行はるゝに至つた、是れ即ち

有名なるマルコ・ポロの旅行記である、而してマルコ・ポロは一二九九年赦されてヴェネチアに還り、一二三四年に至り七十歳を以て死んだのである。かくて第十三世紀の末乃至第十四世紀の初めにマルコ・ポロの旅行記の世に出づるや、我が日本は始めて歐羅巴人に知られたるのみならず、また從來歐羅巴人の知らざる東洋諸國の事情が闡明されたから其の冒險心を刺激し、通商宣教其の他種々なる目的を以て東方に赴くもの多く、延いて第十五十六世紀に於ける海陸發見の動機を喚發したのである。故に此の書の影響が世界の文化に及ぼせる功績は偉大なるものであつたことを認めねばならぬが、また一三四〇年世に出でたるペゴロッツチ(Francesco Balducci Pegolotti)の通商案内記の功績を看過してはならぬ。ペゴロッツチは第十三世紀の末伊太利のフィレンツェ(Florence)に生まれ、壯年に及び同市の富豪バルヂ(Bardi)家に仕へて一二二五年以後アンヴェルス(Antvers)、ロンドン(London)、キプロス(Cyprus)等の商館を主宰し、一三三五年の頃キプロスにありて小アルメニア王より通商の特權を得、次で一三四〇年に至り諸種の材料を蒐集して通商案内記(Libro divisamenti di paesi e di misuri di mercantizie e d'altre cose bisognevoli di sapere a mercanti 後年に至り普通に Pratica della mercantura と稱せらる商業實務志の義なり)を著はした。此の書は初めに諸國の物産、其の用途及び賣買の方法、收稅法等を掲げ、次に當時の商業路、著名なる商業地、輸出入税、通貨の換算價格、度量衡の換出法等を記載

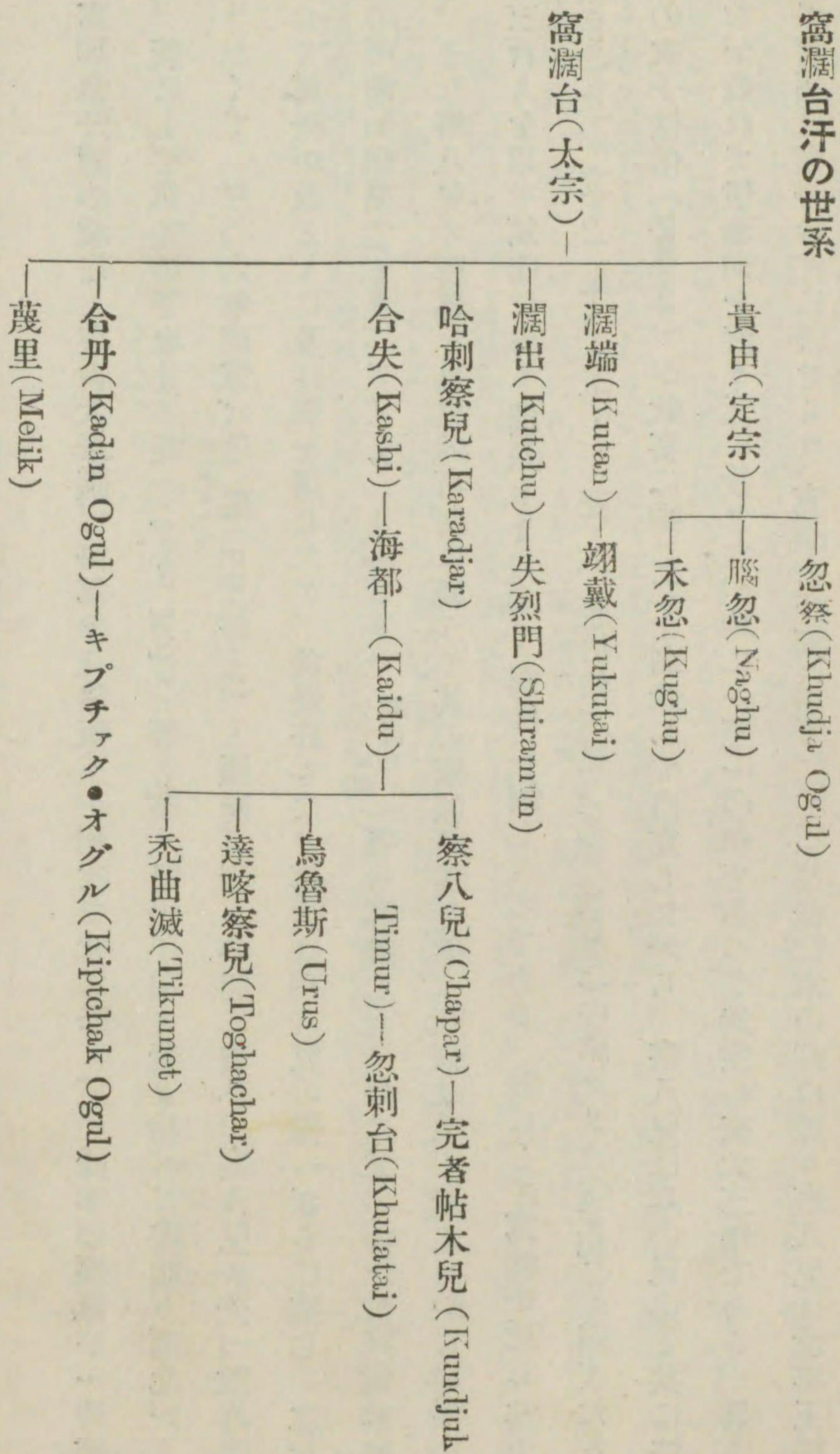
し、其の他通商貿易に必要缺くべからざるあらゆる條項を網羅して居るのである。是より先き支那と印度、波斯、中央亞細亞、西亞細亞との交通は頻繁であつたが、第十四世紀の前半期に至るまで歐羅巴の消息が支那に達することは甚だ稀であつたから、モンテ・コルヴィノの如きも本國の音信を得ざること十二年の久しきに及んだといふことであるが、商業貿易の發展につれて形勢忽ち一變し、一三四〇年に至り此の書が一たび世に出で、から歐羅巴の商人は詳に支那、印度等に於ける諸市場の貿易、商路、沿道諸國の貨物、通貨及び支那の交鈔を知るに至り、ジェノワ、フィレンツェの商人には海路支那及び印度に赴かんとするものが續出して東洋貿易は頗る活氣を呈するに至つたのである、故にペゴロッチの通商案内記もまた世界の文化に偉大なる影響を與へたることを認めねばならぬのである。

第九章 蒙古四大汗國の盛衰

窩濶台汗國の滅亡 蒙古大帝國は海都の死後叛王が相次で元に降り三十餘年の擾亂が一時鎮定したが、既にして篤哇の子也先不花 (Yisun Baka) 等と察八兒の子弟と釁を構へて戦起り西北がまた亂れた。かくて一三〇六年兩軍は忽剌 (Khodjend) と撒麻耳干との間に戦ひ、察八兒が先づ敗れ次でまた戦つて篤哇が敗るゝに及び和を講じたが、後幾許もなく篤哇は察八兒の備へざるに乗じて之を攻め、其の所領恒羅斯 (Taras)、フエナケツト (Fenaket 畔にあり) 等を蹂躪した。時に元の海山が阿爾泰地方に鎮し、また察八兒の所部を也兒的石河に襲うて其の家族營帳を俘へ餘衆は悉く潰えたから、察八兒は僅に三百人を以て篤哇に奔り潰衆もまた多く篤哇に歸したのである。既にして篤哇が死し其の子欵徹 (Kandjuk) が立ち二年ならずして死し、脱帖木兒 (Tala Timur) の弟タリク (Talik) が嗣ぎたるに、篤哇の次子怯伯 (Kmebok) が飲宴に乗じ之を刺殺して自立したから、察八兒は其の兄弟と共に怯伯を襲ふたが敗れて伊黎河を渡り元に投じた、時に一三二〇年であつて武宗の至大三年である。是に於て海都の舊領は察合台汗に併せられ、窩濶台汗國は遂に亡びた。後仁宗の時に至り察八兒は汝寧王に封せられ、其の子完者帖木兒 (Kandjuk Timur) を經て孫忽剌台 (Khatagai) に至り、泰定帝の死後其の太子阿速

吉八の爲めに兵を起して文宗の軍を拒ぎ、敗走して終る所がわからぬのである。

窩濶台汗の世系

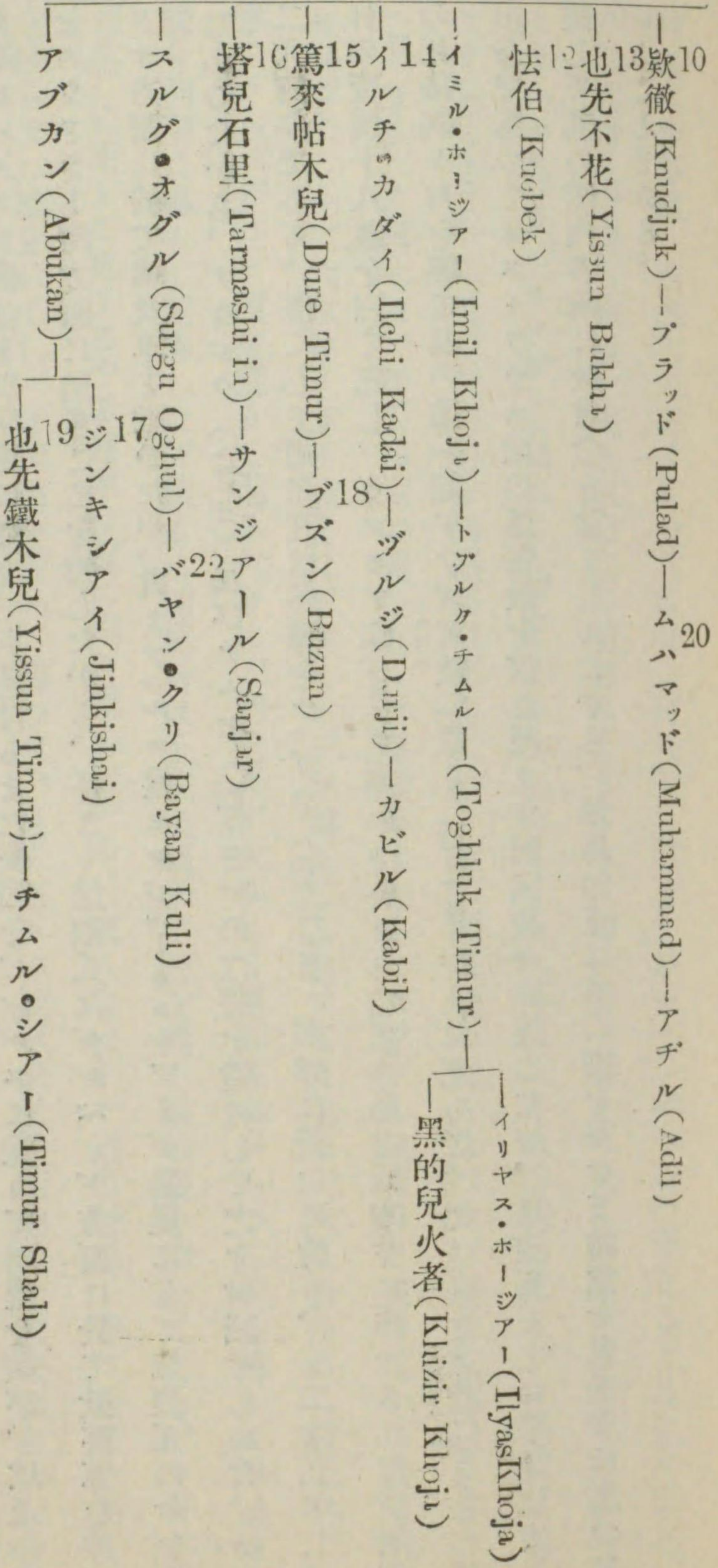
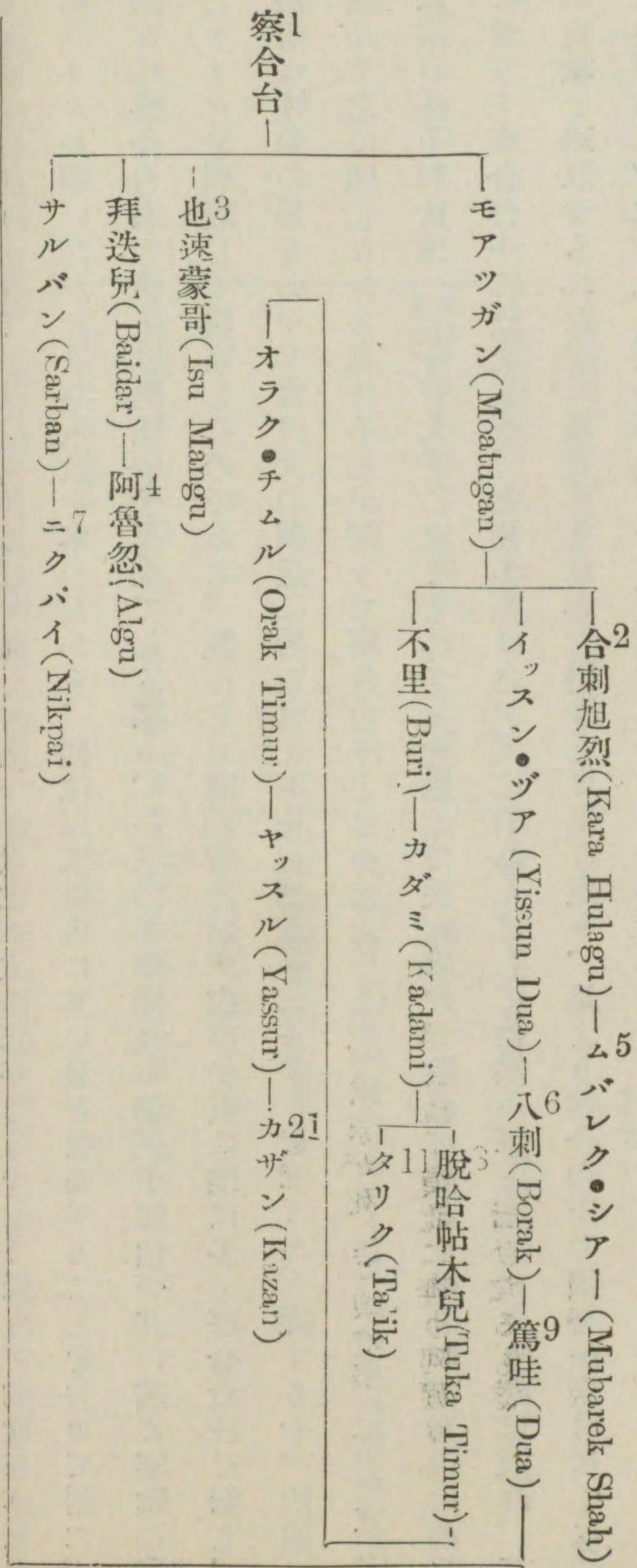


察合台汗國の盛衰 察合台汗は八刺の時に海都に黨して元の世祖に叛いたが、其の子篤哇に至りて

元の成宗に降り、次で一三〇六年篤哇が死して其の子欵徹が立ち二年ならずして死し、脱哈帖木兒の弟タリクが嗣いだがいسلام教を奉じたから、即位以來領内に其の教を弘布することを力めて居た。然るに察合台家の諸王は篤哇の子を立てんと謀り、一三〇九年篤哇の第三子怯伯が其の黨と宴飲に乗じタリクを刺殺して自立したのである。既にして窩濶台汗國が亡びて其の地は多く察合台汗に歸し、諸將は怯伯の兄であつて當時元の朝廷に居る也先不花(Yissun Bukha)を立てんと議するや、怯伯は歡んで之に應じたから也先不花が歸りて察合台汗となつた。會々元の武宗が死して其の弟仁宗が立ち、武宗の長子和世球(後の明宗)が太子に立てられざるを怨んで兵を擧げ、敗れて漠北に奔り阿爾泰山の西北に至りて察合台汗に投するや、也先不花は之を元へ納れんとして仁宗の軍と戦ひたるも遂に敗れ、其の東境を略取せられたから也先不花は志を得ずして引き還り、是より察合台汗の國勢が振はなくなつたのである。次で也先不花が死して弟怯伯が立ち一三二〇年伊兒汗不賽(Abr Eaid)と和を講じて好を通じたが、後幾許もなくして察合台汗國は東西に分裂し、東部は初め可失合兒(Kashgar)に都したが後には葉爾羌(Yarkand)及び阿克薩(Aksu)に都してモグリスタン(Moghulistan)即ち支那土耳其斯坦及び中央亞細亞の東北部を領し、西部は撒麻耳干に都して河間の地(Mavar un-Nahr)即ちトルクス・オクサナを領した。かくて西部は怯伯の後位を嗣ぎたるものが皆庸暗であつて政權は全く宰相

(Amir)に歸し、廢立が屢々行はれて四十年間に十五汗代はり立ち叛亂が相次で起つたから、河間の諸會長は皆獨立するに至つたのである。一二六〇年東部の主であつて篤哇の孫なるトグルク・テムル(Toghluq Timur)が西部に侵入して之を併せたが、其の死後に至り西部の宰相帖木兒(Timur)が勢を得て獨立し、一三八〇年遂に東部を併せて察合台汗國を一統したのである。

察合台汗の世系



伊兒齊旭烈兀の晩年 旭烈兀は哈利發の討滅後七年間生存し、此の間に外は欽察汗別兒哥及び埃及の算端ビバルスと戦つて互に勝敗あり、内はファルス(Fars)侯セルジューク・シアー(Seljuk Shah)の叛を平らげた。初め欽察汗別兒哥はイスラム教を信奉せるを以て旭烈兀がイスラム教の諸市を破壊し、また宗族諸王に諮らずして哈利發を殺せることに就いて抗議したが、次で朮赤家諸王の旭烈兀に

従へるものが罪ありて殺さるゝに及び、別兒哥は大に憤怒して旭烈兀を詰責詬罵したから旭烈兀もまた憤恚して遂に開戦するに至つたのである。是に於て別兒哥はノガイ(Noqai)を將としてデルベンド(Derlend)を過ぎて波斯に侵入せしめ、旭烈兀は一二六二年兵を率ゐてノガイをデルベンドに破つたが、既にしてテレク(Terek)河畔に大敗し勇氣沮喪して一二六三年四月タブリーズに歸つた。時に埃及の算端ビバルスが使節を別兒哥に送り、別兒哥もまた使節をビバルスに送りて同盟を結び、埃及の軍隊をエウフラト河方面に出すことを約したから、是より旭烈兀はデルベンド方面に於て欽察軍を防ぎシリヤ方面に於て埃及軍と戦つたが、會々ファルス侯セルジューク・シアーガ暴戾にして旭烈兀の命を聽かなかつたから、アタジウ(Akaju)及びチムル(Timur)の二將を遣はして之を討滅せしめた、時に一二六四年である。既にして旭烈兀は冬陣をチャガツ(Chagatu)河畔に營むに當り、一二六五年二月八日の夜四十八歳を以て死し、ウルミア(Urmiya)湖の中央タラ(Tala)島の城塞中に葬むられた。旭烈兀の死後四ヶ月を経て其の第一妃ドフズ可敦(Dokuz Khatun)がまた死んだ、妃はもと克烈(ケライト)部の出身であつてネストリウス派の基督教を信じ絶えず同宗徒を庇護したが、旭烈兀もまた基督教徒を保護して其の領内各州に教會堂を建てしめたから、羅馬法王は遙に書を寄せて謝意を表するに至つたといふことである。

阿八哈の事蹟 旭烈兀の死するや其の長子阿八哈(Abaka)がマザンデラン(Mazanderan)より至り、次で宗族諸王宿將の會議を開き旭烈兀の遺言によりて位に即いた。是より先き旭烈兀は晩年東羅馬皇帝ミカエル・パラエオロギス(Michael Palaeologos)の女マリア(Maria)との婚約が成り、マリアはケリサ(Cezarea)に至つた時恰も旭烈兀が死んだから遂に阿八哈の妃となつた、蒙古人は之をデスピナ(De pina)と稱した、即ち公主の義である。東羅馬は是より伊兒汗と親しむに至つたから欽察汗は之を喜ばず、一二六六年ノガイがまたデルベンドを越えて入寇するに至り、阿八哈は自ら將として之を撃ちクル(Kuru)河を渡りて進みたるに、別兒哥が大舉して來る報知があつたから歸りて津梁を斷ち營を河南に移して對陣した。然るに別兒哥は上流に溯りて河を渡り敵の後を衝かんとし、チフリス(Tiflis)に至りて死するや欽察軍は遂に引き還つたから、阿八哈はクル河の對岸一帯に城壁を築きて之を繞らすに濠を以てし、守備兵を置いて歸つた、是に至りて欽察伊兒汗兩國の交戦は終を告げたのである。此の間埃及の算端ビバルスは専ら力を十字軍に向けてケリザリア及び其の他の諸市を奪ひ、次でキリキア(Cilicia)に侵入してアルメニア王ハイトン(Haiton)に入貢を逼り、ハイトンは援を阿八哈に請ひたるも當時阿八哈は東の方察合台汗八剌との交戦に忙はしく、専ら力を西方に盡くすことができなかつたから、ハイトンは遂に一二六七年和をビバルスに請うて多数の城地を割讓した。是

より先き一二六五年元の世祖は海都を攻撃すべき條件を以て察合台汗八剌にトランス・オクサナを與へたが、四年を経て八剌は海都と和し其の援助を得て呼羅珊を侵し尼沙不耳に進んだから、阿八哈は直に之に向つて進撃し、一二七〇年哈烈(Herat)の附近に激戦して之を破り、八剌は身を以て免かれ不花刺に入りて敗軍を収め恢復を圖つたが、數月を経て病死したから、阿八哈は呼羅珊を保護すべき唯一の計策として一二七二年兵を送り、花刺子模及びトランス・オクサナを劫掠せしむるに及び、元の太祖の西征後漸く恢復の機運に向へる中央亞細亞の諸市は再び荒寥たる地に變ずるに至つたのである。是の如く阿八哈が東邊の防禦に忙はしき間に西邊にはビバルスの勢が益々盛となり、遂に其の全力を傾注してアレクポより北に向ひ、一二七七年蒙古軍をアブリスチン(Abulistin)に破りてケーザリアに入つたが、小亞細亞の諸王侯は阿八哈を恐れて來り合しなかつたから、的迷矢吉(Damascus)に退いたが會々病んで死し埃及が亂れたるを以て阿八哈は兵を率ゐてシリアを侵し、一二八一年ヒムス(Hims)に戦つて敗れ還り明年遂に死んだのである。當時利害を同じくせる基督教徒と蒙古との間は親密であつて英吉利王エドワード(Edward)一世は一二七四年親書を阿八哈に送り、羅馬法王ニコラス(Nicolas)二世もまたフランシスコ派の宣教師五人を伊兒汗阿八哈及び元の世祖の許に派遣して布教せしめたといふことである。

阿魯渾の篡立 一二八二年阿八哈の死するに及び繼承の紛議を生じたが、其の弟チグダル・オグル(Tigudar Ogul)が選ばれて位に即き、イスラム教に改宗してアーマッド(Almad)と稱した。然るに阿八哈の子阿魯渾(Arghun)は篡奪の志があつたから、遂に諸將に勧められて兵を擧げ、一二八四年アーマッドを執へ之を殺して位に即いたのである。是より伊兒汗國には嫉妬復讐貪婪等あらゆる惡徳が横行して寧日なき有様であつたが、阿魯渾は基督教徒に對して大に好意を表し、一二九一年には十字軍に應援して聖地の恢復を助け、基督教徒最後の根據地たるアークル(Acre)が陥るに及んで寢めた。阿魯渾もまた羅馬法王及び歐羅巴諸國と使聘を通じて往復したから、一二八九年法王ニコラス四世はフランシスコ派の僧正モンテ・コルヴィノ(Joan de Monte Corvino)に親書を齎らして阿魯渾を訪問せしめ、次で支那に赴きて布教に盡力せしめたのである。一二九一年阿魯渾が死するや諸將は使を發して其の子合贊(Ghazan)を呼羅珊から迎へ、其の弟ガイハッター(Gaykhatu)を蘆眉(Rum)から迎へ、旭烈兀の孫にしてテラガイ(Teraghai)の子なるバイツ(Baidu)を八吉打から迎へたるも、合贊の峻酷なるとガイハッターの庸暗なることは諸將の喜ぶ所とならず、バイツを擁立せんとしたるに辭したから遂にガイハッターを即位せしめた。然るにガイハッターは奢侈を好みて財政が亂れ遂に諸將の望を失つたが、次で一二九四年バイツと會飲して酔に乗じ之を毆打するに及び、バイツが兵を擧げて叛き

ガイハツを執へて之を殺し位に即いたから、合贊がまた兵を擧げ遂にバイズを捕殺して位に即いた、時に一二九五年である。

合贊の治 合贊はもと佛教を崇信したるも位に即くやイスラム教を奉じて民望を收め、令を下して基督教、猶太教、佛教の會堂寺院を破壊したが、後アルメニア王の請を聽るし教會寺院の破壊を中止して偶像禮拜堂のみをイスラム教の會堂となさしめた。合贊は即位の初め諸王五人、謀叛將校三十八人を殺戮し、更に已の擁立者たる將軍トガチャル (Togachar) 及びノルズ (Norus) を疑ひ、トガチャルを殺すに及びノルズは遂に叛いたが幾許もなくしてまた捕殺せられたのである。次で合贊は埃及の内訌に乗じ一二九九年シリアに侵入してアレppoに進み、埃及軍をヒムスに破りて的迷失吉を降し兵を駐めて引き還つたが、援軍が埃及より到るに及び蒙古軍は退却したから、シリアはまた埃及軍の恢復する所となつた。合贊がシリアに出征せる間にトランス・オクサナの察合台汗クトルク・ホージャー (Kutluk Khoja) が兵を出してケルマン、ファルスを劫掠し、クジスタン (Khuzistan) に入り波斯の南部を劫掠すること二ヶ月に亘つたが、既に退却を初めてホルムズ (Hormuz) に集まつた時に多數の畜類を失ひ掠奪物を殘留して引き還つたのである。合贊は一三〇一年再び征伐の途に上りたるも風雨に遭ひ其の輜重を失ひて引き還り、次で一三〇三年またエウフラト河を渡りて多少の勝利を得たが、チグ

ルス河の左岸を警備する必要が起つて退却し、其の將クトルク・シアー (Kutluk Shah) は的迷失吉に進んで埃及軍と會戦し敗れて逃れ還つた。是に於て合贊はまた再擧を謀りたるも幾許もなくして病に罹り、其の起たざるを知るや遺言して位を其の弟ウルジャイツ (Uljayit) に譲り、一三〇五年五月を以て死んだ。合贊は賢明にして政を親らし、信仰に篤く武勇に秀で、常に士氣を鼓舞し、蒙古語の外に亞拉比亞、波斯、印度、迦濕彌羅、圖伯特、支那、希臘等の諸國語にも多少通じ、説史を好み工藝を愛し博物醫學に通曉し、學者を優遇し人を相るに長じ、公平を重んじ慈惠を好み自ら奉ずること極めて質素であつたといふことである。其の憲政改革の主なるものを擧ぐれば(一)財政紊亂の後を承けて府庫の充實を計ると同時に人民の重き負擔を除かんが爲め税法を改良確定し、(二)従來行はれたる高利貸金の風を矯めて之を禁じ、(三)使節が妄りに往來して沿道の累をなせるを止め、(四)妄りに宿舍の徵發をなすことを禁じ、(五)王璽濫用の弊を防ぎ、(六)命令の法式を一定し、(七)軍人に封土を割與して以て軍隊の給與に缺乏することなからしめ、(八)國境の防備を嚴にし、(九)禁軍の制を定め、(十)武器の製造を盛にし、(十一)王室財政の整理、(十二)司法制度の改良、(十三)群盜の鎮定、(十四)度量衡法の制定、(十五)飲酒の禁、(十六)娼婦の取締等の如き大は國家施政の方針より小は個人修身の事に至るまで充分なる注意を拂つて施設した、實に合贊の時代は伊兒汗國最盛の時代であつて

また彼は蒙古諸汗中の賢君であつたのである。合贊はまた歐羅巴の帝王と親交あり、一三〇二年には東羅馬皇帝アンドロニコス(Andronicos)が使を遣はして公主を合贊に嫁せんことを提言し、且つオスマン・トルコ(Osmanli Turk)の侵寇を阻止せんことを請ひ、英吉利王エドワード一世もまた使を遣はして合贊をタブリーズに訪問せしめたといふことである。

ウルジャイツと不賽因 合贊の死後其の弟マホメッド・フダバング(Mahomed Khudabanda)が立ち、ウルジャイツ(Ujair^{幸連})と號してスルタニア(Sultania)に都し、次でギラン(Gilan)を征して之を定め、呼羅珊に侵入せる察合台軍を撃退し、東羅馬皇帝アンドロニコスと婚を通じて之を援け、また西歐羅巴の帝王と使聘を通じた。ウルジャイツは一三二六年死して其の子不賽因^{アブサイド}(Abu Said)が嗣ぎ、年僅に十二歳であつたから姉の夫チウバン(Chupan)が政を攝したるに、諸將及び貴族の中に叛を謀るものがあつたから、チウバンは之を討平して却て中外の怨を受くるに至つた。不賽因が長じてチウバンの女八吉打可敦^{バグダイドカフン}(Baghdad Khatun)の美なるを愛し之を求めたが、是より先き八吉打可敦は既に蒙古貴族に嫁せるを以てチウバンが之を拒むに及び、不賽因は事を構へて一三二七年遂にチウバンを殺し、次で八吉打可敦を奪ひ立て、妃となしたのである。一三三四年欽察汗月即別(Uzbeg)がデルベンドを越えて侵入せんとする報告があつたから、不賽因は之に對して兵を進めんとしたるも一三三五年病んで

死し、繼嗣がなかつたから是より伊兒汗國は遂に分裂したのである。

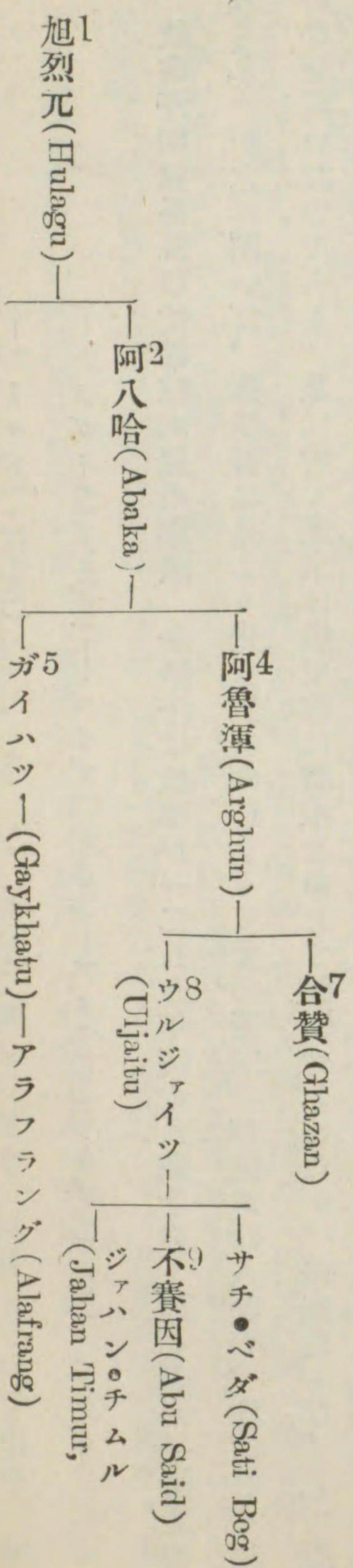
伊兒汗國の末路 不賽因が嗣がなくして死するや伊兒汗國は無政府の状態に陥り、欽察軍が此の機に乗じて來り侵さんとしたから、阿里不哥の子アルバ・ガウン(Arpa Gawn)が推されて立ち、チウバンの未亡人にしてウルジャイツの女なるサチ・ベグ(Sachi Beg)と結婚して其の位置を固めたが、既にして旭烈兀五世の孫ムザ(Muza)が推されて八吉打に據り、アルバ・ガウンは之と戦ひ敗れて捕殺せられ、次でムザもまた八吉打可敦の先夫シャイク・ハッサン(Shaykh Hassan)の逐ふ所となり、旭烈兀五世の孫モハメッドが立つた。然るに太祖の弟朮赤^{ジュチ}ハッサ兒^{ハッサ}(Djuchi Kassar)の後裔トガ・チムル(Toghla Timur)が推されて呼羅珊に獨立し、チウバン家の黨と通じてハッサンを圖りたるも成らずして勢を失ひ、ハッサンはモハメッドの敗死後阿八哈四世の孫イッズ・ウツデン(Izz ud-din)を立てたるに、チウバン黨は其女主サチ・ベグの爲すに足らざるを思ひ之を廢して旭烈兀五世の孫スレイマン(Suleyman)を推し、サチ・ベグと結婚せしめてアゼルバイジャン(Azerbaijan)に據つた。一三四〇年ハッサン自ら兵を率ゐてチウバン黨を討つて敗れ八吉打に據りて自立し、チウバンの子アシラフ(Ashraf)はアノシルワン(Anoshirvan)を擁立し、次で之を殺し自立して暴威を振ひたるも欽察汗札尼別^{ジヤニベク}(Janibeg)が兵を進めてアゼルバイジャンを侵し、アシラフを執へて之を殺した。一三五六年ハッサンが死して其の子オワイズ(Owais)が嗣

ぎ、欽察軍を攘ひてアゼルバイジャンを恢復し、次でモスル (Mosul) 及びディアラルベクル (Diarbekr) を併せ、其の嗣フッサイン (Hussain) は南波斯のムザッファル (Muzaffar) 朝と戦ひまた西はカラ・クユンル (Kara Kuyulu 黒羊の義) 土耳古人を伐つた。一三八二年フッサインが死してアゼルバイジャン及びイラク (Irak) をスルタン・アーマド (Sultan Ahmad) に遺したが、既にして帖木兒の侵略を被ふリアーマドは防ぐ能はずして埃及に遁れ、其の後一四一〇年に至りて八吉打を恢復し、次でアゼルバイジャンを侵してカラ・クユンル土耳古人の爲めに破られ遂に其の領土を失つた、是に至りて伊兒汗國は全く亡びたのである。

蒙古時代に於ける波斯文學 蒙古時代に於ける波斯の文藝中歴史は蒙古人の征服に關するものがあるから特に顯著なるものが多いのである。かくてイヅ・ウジジン・イブン・ウル・アチル (Izz ud-din Ibn ul-Athir) はアル・カミル (al-Kamir) 即ち全史を著はして世界の開闢より一二三〇年までの史實を記し、アライ・ウジジン・アッタ・ムルク・ヂヅヴェニ (Alai ud-din Atta mulk Djiveini) はタリク・イ・ヂハン・クシヤイ (Tarikh i Dihan Kushi) 即ち世界征服者の歴史を著はして成吉思汗の花刺子模征服及び旭烈兀の木刺夷討伐の史實を述べ、ラシッド・ウジジン・フズル・ウルラ (Rashid ud-din Fazl Ulla) はシヤミ・ウト・テフリク (Jami ut Tawarikh) 即ち歴史全集を著はして蒙古人及び蒙古侵入以前の波斯史を

記し、ミルコンダ (Mirkhond) はラウザット・ウス・サファ (Kanzat us Safa) 即ち清真の園を著はして太古より一四七一年までの世界史を述べた。また地理學にはヤクト (Yakut) が出で、ムシヤム・ウル・ンルダン (Mujam ul Buldan) 即ち諸國地理辭典を著はし、科學者にはツス (Tus) のナシル・ウジジン (Nasir ud-din) がありて宗教、哲學、數學、物理、天文に通じ、旭烈兀に勸めて天文臺をマラガ (Maragha) に建てしめたるを以て著はれて居る。また詩人にはシヤラル・ウジジン・ルミ (Jalal ud-din Rumi)、サヂ (Sadi) 本名はムシヤルリフ・ウジジン (Musharraf ud-din)、ハフイズ (Hafiz) 本名はシヤムス・ウジジン・モハメド (Shams ud-din Mohamed)、シヤミ (Jami) 本名はアブズル・ラーマン (Abdur Rahman) 等がありて何れも千古の傑作を出したのである。

伊兒汗の世系



—アード (Arnad) —³
 テラガイ (Teraghai) —⁶ バイツ (Baydu) —アリ (Ali) —ムザ (Muza)

欽察汗別兒哥及び忙哥帖木兒の事蹟 金帳汗は拔都が一二五五年四十八歳を以て死し其の子撒里答 (Sartak) が之に嗣いだ、撒里答は是より先き父の命によりて元の憲宗の即位式に入朝し、途にして父の訃を聞いたのである。是に於て憲宗は撒里答に繼承を命じて歸國せしめたが、後幾許もなくして撒里答が死し拔都の弟別兒哥 (Baiko) が高加索地方から入りて嗣いだ。別兒哥は曩に太宗即位のフリルタイに出席し拔都西征の間は國にありて留守し、憲宗即位の時には脱哈帖木兒 (Tuka Timur) と共に漠北に使用して國事を議し、後南の方高加索地方を守り常に要職に當りて重んぜられたが、今や位に即きて欽察汗國全體にイスラム教を奨励し、また自ら之を信奉したから是より薩來はイスラム教の中樞となり、また碩學の淵藪となつたのである。また別兒哥は租税法を定め一般行政法を整理して其の治績には頗る看るべきものがあつたが、然かも別兒哥一代の大事事件は波蘭の再征と旭烈兀との戦争であつた。一二五八年ノガイ (Nogai) 及びツラブカ (Tulabuka) の二將は波蘭に入りてクラカウ (Cracow) を陥れ、オッペルン (Oppeln) のゴトム (Bythom) に進み多數の基督教徒を虜にして引き還つた、而して旭烈兀及び其の子阿八哈との戦争及び埃及の算端との交聘は既に前項に述べたから略する。當時

露西亞方面は極めて平穩であつた、是れ別兒哥の處置が寛大であつてロストフ (Rostov)、ススダル (Susdal)、ソニヤスラウル (Beloyaslaur) 諸市の人民が蒙古の收税吏を虐待せることあるも之を罰せず、ノヴゴロド (Novgorod) の太公アレクサンドル・ネヴスキイ (Alexander Nevski) がよく蒙古人に歸服して入朝四回に及んで居るのを見ても知ることが出来る。別兒哥はまた匈牙利王ベラ (Bela) に結婚同盟を提議し、事成らば再び匈牙利より貢賦を徴せざるべく且つ其の國境に入寇せざらん、若し然らざれば直に兵を以て之を討たんといふた、是れ伊兒汗阿八哈が東羅馬皇帝と婚姻を結びたるに對抗せんが爲めであつたのである。然るにベラは之を羅馬法王アレクサンドル四世に諮り其の勸告を納れて之を拒んだが、會々別兒哥が死して匈牙利は復讐の厄を免かれたのである。一二六六年別兒哥は兵を率ゐ伊兒汗國を侵してチフリスに死し、拔都の孫にしてトガン (Tughan) の子なる忙哥帖木兒 (Mangu Timur) が嗣ぎ、窩濶台汗海都及び察合台汗八剌と通じ海都と共に八剌を援けて伊兒汗阿八哈を撃ち、大軍を率ゐデルベンドを越えて侵入したが、八剌が敗れて還れるを聞き軍を引き旋した。一二八〇年忙哥帖木兒が死して其の弟脱脱蒙哥 (Tuda Mangu) が嗣ぎたるも、當時ノガイが露西亞の諸侯と結んで勢盛であつたから薩來の朝廷が衰へ、實權はノガイに歸して脱脱蒙哥は虚器を擁するのみであつたのである。次で其の姪ツラブカ (Tulabuka) が立てるも同時に四人の君主が相並んで國を治めたから

國勢は微々として振はず、一二八五年波蘭、リトワニア(Lithuania)、匈牙利に兵を出し、また一二八九年伊兒汗と戦ひたるも共に著るしき成功なく、一二九一年忙哥木帖の子脱脱(Tukhta)がノガイの後援を以て自立するに及び、始めて四人共同政治の終りを告げたのである。脱脱はまた伊兒汗と衝突したが、ガイハツの伊兒汗となるに及んで和を講じた。是より先きノガイは東羅馬帝ミカエル・バラエオロス(Michael Palaeologos)の女イレネ(Irene)を娶つたが、脱脱もまたアンドロニコス(Andronicos)二世の女マリア(Maria)を娶りて東羅馬と姻戚の關係を結んだのである。時に露西亞はよく治まつたが脱脱は遂にノガイと間隙を生じて戦を開き、ノガイは伊兒汗合贊に援助を求め合贊が之を調停せんとして成らず、一三〇〇年ノガイは大に敗れて死んだのである。

月即別及び尼札別の治 一三一三年脱脱が死するや其の兄トグルル(Toghurl)の子月即別(Uzbeq)が嗣いだ、時に年僅に十三であつたが長するに及び豪邁にして雄略あり、在位二十八年の間に内はよく露西亞を服せしめ、外は伊兒汗と難を構へ、また東羅馬及び埃及と親密なる關係を結んだのである、故に彼は拔都、別兒哥及び後のトクタミシ(Toktamish)と共に欽察の著名なる君主と稱せられて居る。月即別即位の初め脱脱の子ツケル(Tukel)が弑逆を謀り露はれて其の黨と共に殺されたのを見れば、繼承の際に多少の紛亂があつたと思はれる。一三二五年金帳の諸王ババ(Baba)が叛きて伊兒汗に

投歸し、次で花刺子模に侵入して其の知事クツルグ・テムル(Kuthung Timur)の軍を破つたから、月即別は使を伊兒汗に遣はして之を詰りウルジャイツをしてババを斬らしめ、漸く開戦の危機を脱して事を治めることができた。月即別は東羅馬及び埃及と親交を結びて使聘の往來頻繁を極めたから、埃及の算端ナシル(Nasir)は使を遣はして蒙古の公主に尙せんことを求むるに至り、月即別は初め之を拒絶したるも後遂に之を許して一三一九年一公主をナシルに嫁し、埃及と姻戚の關係を結んだのである。是より先き月即別は其の妹コンチャク(Conchak)をモスカウ侯ゲオルギイ(George)に嫁して之を信任せるに、ゲオルギイは其の叔父トウエル(Thor)侯ミハエル(Michael)とウラヂミル(Vladimir)大公の尊號を争うて善からず、遂に開戦するに至つたがゲオルギイは敗れて遁れコンチャクは捕へられて殺されたから、月即別は大に怒りてゲオルギイの計を聞きミハエルを薩來に召喚して之を誅戮し、其の子デミトル(Dimitri)を太公に任じた。然るにデミトリは深くゲオルギイを怨み、一三二五年共に薩來に入朝するに及んで之を斬殺し、デミトリもまた誅戮されたが、既にしてデミトリの弟アレクサンドルが立つてトウエル侯となり、市民に命じ其の都城に於て蒙古の吏民を焼き殺さしめたから、月即別はゲオルギイの子イヴァン(Ivan)に兵を授けてトウエルを陥れアレクサンドルを逐ひ其の弟コンスタンチン(Constatin)を立てトウエル侯となし、イヴァンを太公に任じて先づ露西亞全版圖の

租税を徴集し、然る後之を金帳汗に納むる特権を與へたから、是よりモスカウ太公の權勢が露西亞に於て熾になつたのである。後アレクサンドルは薩來に入朝して罪を謝し赦されたが、イヴァンが復讐を恐れて屢々之を言ふに及び、月即別はアレクサンドルを召喚して之を斬殺した。是より先き一三一九年月即別はデルベンドを越えて伊兒汗國を討ち、一三三四年また親ら兵を率ゐて侵入せるに、會々伊兒汗不賽因が死し其の後嗣アルバ・ガウンが兵を進めて之を邀へ撃たんとしたから、月即別は遂に引き還つたのである。月即別もまたイスラム教を尊崇して其の僧侶及び學者を優遇したが、また希臘教を保護し加特力教の宣教師ヨナス・ヴァレント (Jonas Valent) に許すにヤッサ (Yassa) 府民及黒海沿岸の住民に布教する自由を以てした。要するに月即別の治世中は露西亞の諸侯がよく服し、東羅馬及び埃及とは親交を結び、また羅馬法王ベネクト (Benedict) 二十二世の使節、希臘教の法主、土耳其の公使、ジエノワ (Genova) の紳商等の來朝を受け、金帳汗の威權は赫々として振ひ國運は隆盛を極めたのである。而して當時ジエノワ人は欽察汗國に往來して盛に商業を營み、アゾフ (Azov) 海附近は東西貿易の要衝となつたのである。一三四〇年月即別が死して其の次子チニベク (Tinibeg) が嗣ぎたるに、數月にして第三子札尼別 (Janibeg) が之を弑して位を篡つた。札尼別は金帳最後の名君であつて父の性質を受けて英氣に富み、學者を優遇して之を薩來に招き、また希臘教を保護し、露西亞の

諸侯に特権を與へたから、父の世に入貢しなかつた諸侯も入朝して所領安堵を求めたといふことである。薩來の市府を擴張したるも札尼別の世であつて是より新舊薩來の別があつたことは、其の發行したる貨幣によりて知ることができる。時に伊兒汗國は不賽因の死後旭烈兀の血統斷絶して内訌が起つたから、札尼別は兵を進めてアゼルバイジャンに侵入し、チウバン家のアシラフを捕へて之を殺し、其の子ベルデベグ (Berdebeg) を留めて之を守らしめた。既にして札尼別が病に罹るやベルデベグは之を聞きて國に歸れるに父の病既に癒え、即位の望け未だ遽に達することができなかつたから、其の將トグルル・ババ (Toghrlul Baba) の勧めに従ひ遂に父を弑して位に即いた、時に一三五七年である。

金帳の分裂 ベルデベグは一三五九年弑せられ、キルデベグ (Kildibeg)、ヌルスベク (Nursbeg)、チェルケスベグ (Cherkesbeg) の三汗が相次で立ちたるも皆弑に遭ひ、是に至りて拔都の血統は殆ど斷絶したるが如く、一三七〇年以後は國內四分五裂の有様となり、金帳汗の廢立代替が頻々として行はれ十年間に十五汗を數ふるに至つた。此の間モスカウ太公は歴代の威望を以て連りに其の版圖を擴張しつゝあり、一三六三年にはデミトリ・ドンスコイ (Dimitri Donskoi) が太公の位に即き、豪邁にして雄略に富み堅忍不拔の銳氣を以て内憂外患の衝に當り、金帳の羈絆を脱して悉く蒙古人を歐羅巴より驅逐せんと謀り、會々金帳分裂の形勢を見るや公然獨立を唱へて金帳との關係を斷ち、露西亞を却掠せる

蒙古の分遣隊を塵殺したから、金帳汗ムハメッド・ブテク (Muhammed Bulak) 一名ママイ (Mamai) が大に怒り、大軍を率ゐてヴォルガ (Volga) 及びドン (Don) の流域に沿うて進み、ドン河畔クリコフ (Kulikov) の原野にデミトリの率ゆる露西亞軍と戦ひ敗れて還つた、時に一三八〇年九月である。是に於て露西亞は將に蒙古の羈絆を脱せんとするに至つたが、既にして白帳汗トクタミシ (Toktamish) がムハメッドを破つて金帳汗となるに及び、また其の侵掠を被ふるに至つたのである。

トクタミシと帖木兒 是より先き金帳汗の勢力が衰頹しつゝある間に白帳汗は依然として其の勢力を維持し、幹魯朶の後裔が父子相次で立つて居たが、一三六〇年ウルス汗 (Urus Khan) が立つに及び、拔都の弟脱帖木兒の後裔ツリ・ホージャ (Tuli Khoja) が兵を擧げて叛き敗れてウルスの爲めに殺され、ツリ・ホージャの子トクタミシは中央亞細亞に奔りて帖木兒に投じた。時に帖木兒は既に察合台汗國を一統し更に兵を出して四隣を攻撃しつゝあつたから、トクタミシの來り投するや之を納れて厚遇優待し次で兵を送つてウルスを討つた。會々ウルスが死して其の二子ツクタクア (Tuktakia) 及びチムル・マリク (Timur Malik) が相次で立つたが、帖木兒はまたトクタミシを援けてチムル・マリクを攻殺しトクタミシを立て、白帳汗となした、時に一三七八年である。既にして一三八〇年金帳汗ムハメッド・ブラクが露西亞より敗れ還るや、トクタミシは之を阿里加 (Alig) 河畔に襲撃して敗死せ

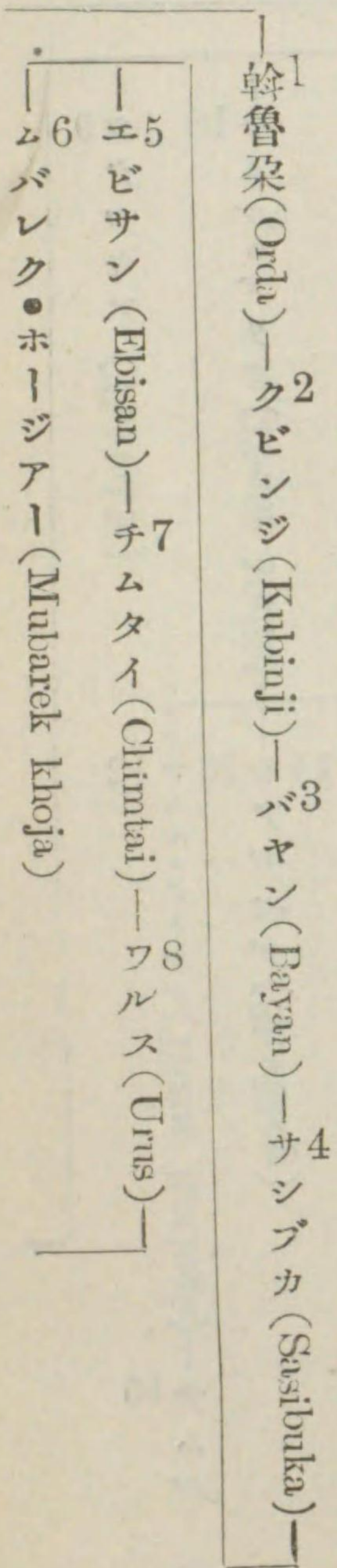
しめ、自立して金帳汗となりナシル・ウツヂン・ジェタル・ウド・マームウド・グウジラス・トクタミシ (Nasir-ud-din Jekal ud Mahmud Ghujas Toktamish) と稱したのである。是に於てトクタミシは露西亞を征して金帳汗の主權を恢復せんと欲し、一三八二年突然兵を率ゐて露西亞に侵入し直に進んでモスカウを圍んだ。時にモスカウの市民は老幼を擧げてよく防戦したから、トクタミシは到底力取すべからざるを知り詭計を以て之を陥れんと謀り、乃ち市民に約するに貢税を納れ且つ市内の奇觀珍物を巡覽するを承諾すれば、直に兵を解くべしといふたから市民は之を信じ貢物を調へて城門を開くや、蒙古軍は城内に突入して掠奪殺戮を肆にし遂に火を放ちて全都を灰燼となしたから、太公デミトリは已むを得ずして再び貢税を納め、また其の羈絆を受くるに至つたのである。トクタミシは次でウラヂミル、スヴェニゴロド (Svenigorod)、ユリェフ (Yuriev)、モザイスク (Mozhaisk)、デミトロフ (Dimitrov) を攻略し、プレスラヴィ (Preslavi)、コロムナ (Kolonna) を焚掠して軍を旋し、烈也贊 (Riyazan) を劫掠して還つた。既にしてトクタミシは其の戦勝を負み帖木兒を侮りて花刺子模の讓渡を要求したが、帖木兒の拒絶する所となるや舊來の大恩に背き、一三八五年九萬騎を率ゐてデルベンドを踏えタブリスを攻めて之を陥れたから、帖木兒は其の背德を怒り軍を進めて之を撃ち、欽察軍をアム河畔に破つたから、トクタミシは纔に身を以て遁れ還つたが帖木兒は之を追撃せず、更に一三九〇年に至り四十萬の

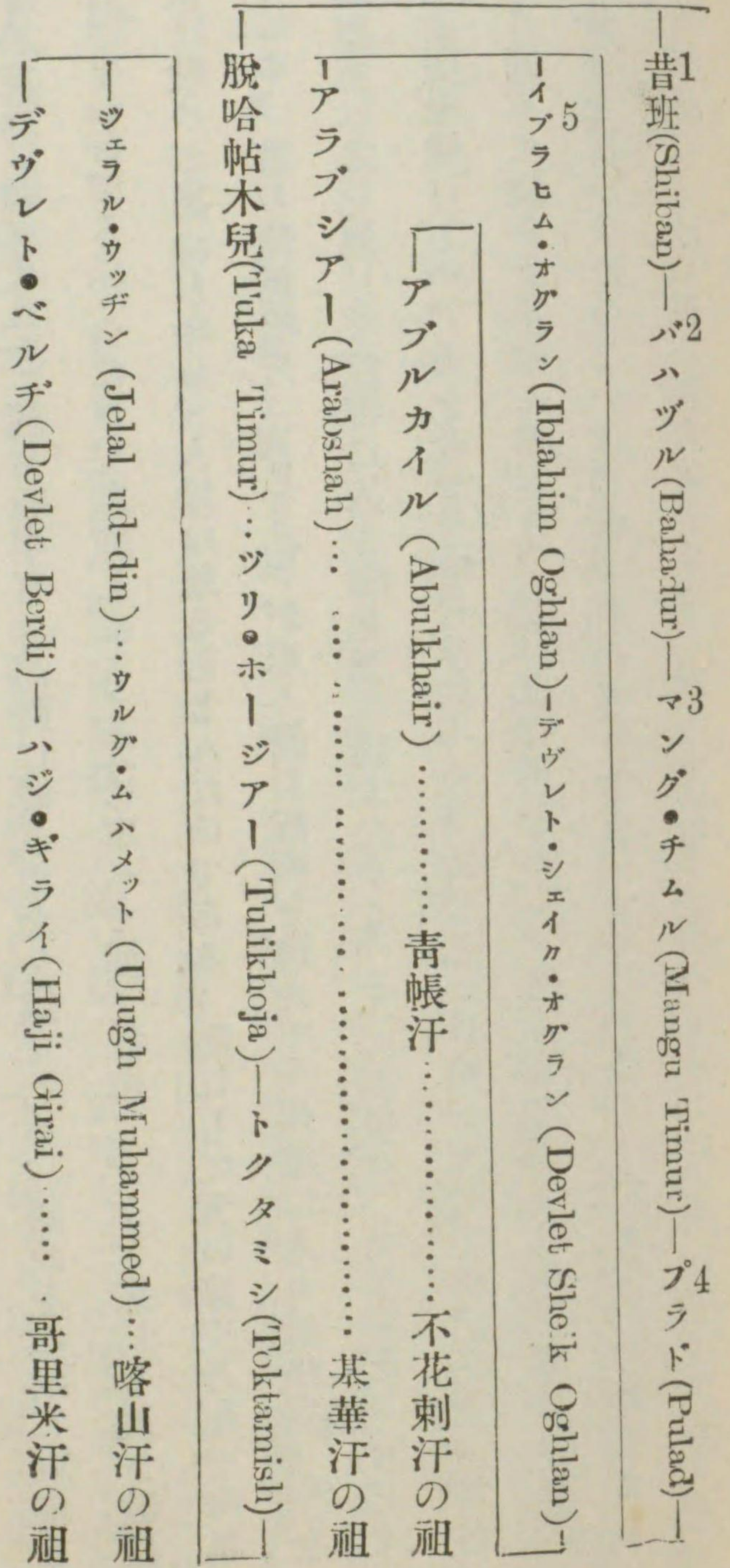
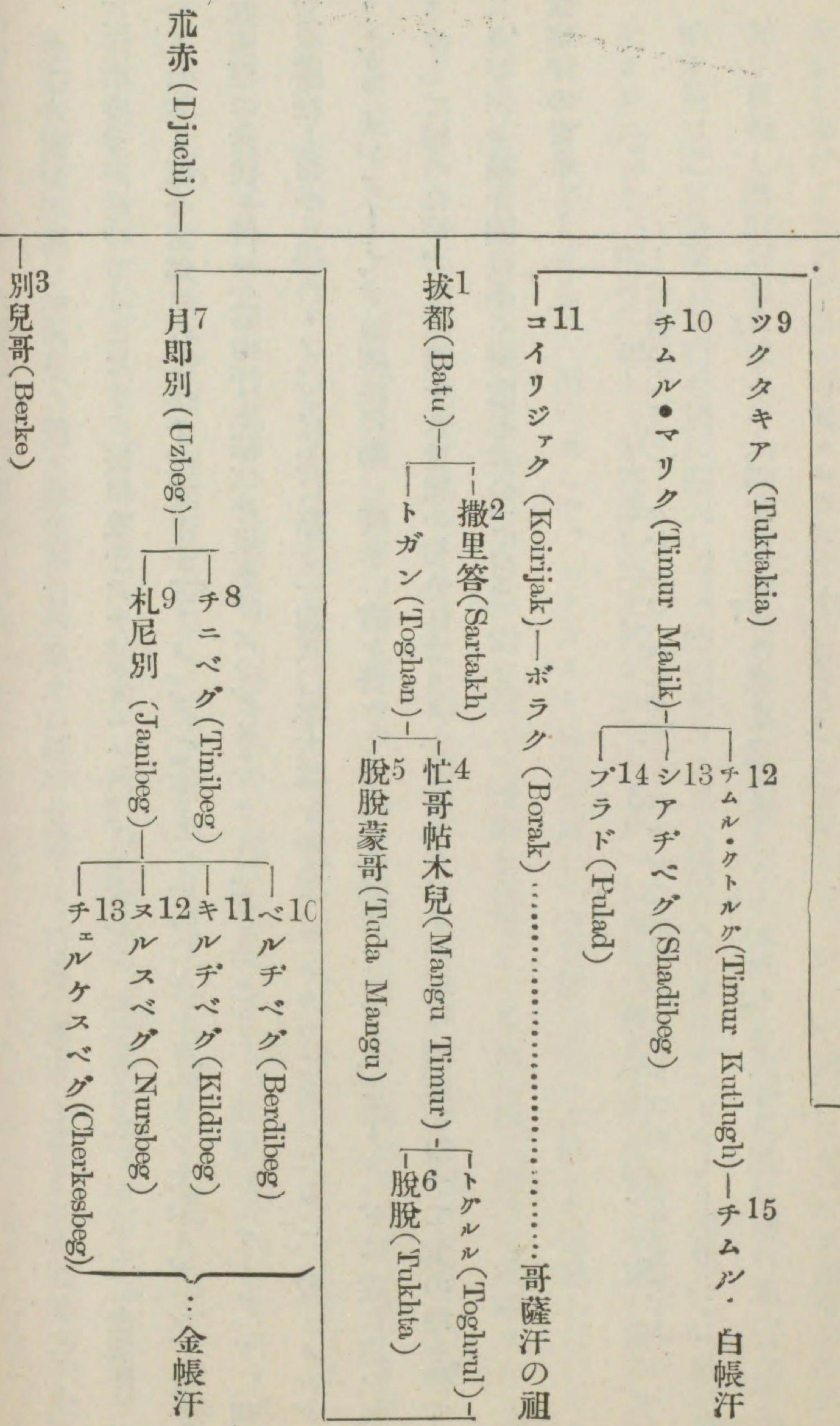
大軍を擧げてカスピ海の東西より欽察汗國に侵入したのである。かくて兩軍はヴォルガ河畔の平野に於て會戦し勝敗容易に決しなかつたが、遂に欽察軍が大敗してトクタミシは烈也贊に遁れ走つたから、帖木兒は之を追撃して烈也贊に侵入した。時にモスカウ太公デミトリの子ヴァシリ (Vasilii) 一世が兵をオカ (Oka) 河畔に出して帖木兒の軍を防がんとしたが、帖木兒は猝に方向を轉じて南に進みカンヅルチア (Kanducha) 河に至るや、トクタミシは兵を返して之を撃ち遂に大敗して遁逃したのである。是に於て帖木兒は師を旋し次で伊兒汗國を伐つて波斯を征服するや更に西に向つて攻略せんと欲し、一三九二年三十萬の大軍を發して八吉打に進み次でアルメニア、グルジアに赴きたるに、會一三九五年トクタミシが再び薩來に歸りて兵を募りつゝあるを聞き、直に軍を轉じてデルベンドを踰え長驅して薩來を陥れ、ヴォルガ河の右岸を溯り轉じてドン河に向つた。時にトクタミシは遠く遁れ去つたから帖木兒はエレッツ (Elm) に至りて兵馬を休め、是よりアゾフ (Azov) に赴き再びアストラカ (Astrakhan) に向ひ、到る處掠奪を縱にして軍を班し、デルベンドを踰えアゼルバイジャンを過ぎて撒麻耳干に還つたのである。是より先き帖木兒は故の白帳汗ウルスの子コイリジャク (Koirjak) を立て、金帳汗となしたが、帖木兒の東に歸るや一三九八年トクタミシがまた薩來に歸りたるも、既にしてウルスの孫チムル・クトルグ (Timur Kutugh) の破る所となりて不里阿兒 (Balgar) に退き、後

西伯利亞 (Siberia) の曠原に於て戦死したといふことである。

金帳汗國の末路 帖木兒の侵入後金帳汗の領土は再び分裂して白帳、喀山 (Kazan)、哥里米 (Krim) 三汗の攻争が絶ゆることなく、後白帳汗クチャク・ムハメッド (Kuchuk Muhammed) が立ちて金帳汗となりたるも號令諸部に行はれず、其の子アーメッド (Ahmed) の時に至りモスカウ太公イヴァン二世が露西亞の諸侯を併せ、喀山汗と結び哥里米汗メンダリ・ギライ (Mengli Girai) と同盟してアーメッドに朝貢を斷絶したから、アーメッドは大に怒り一四八〇年大軍を率ゐてモスカウに向ひたるに、會々メンダリ・ギライがアーメッドの不在に乗じ薩來の虛を衝きて市街を破壊したから、アーメッドは遂に志を果さずして歸つたが、次で第十六世紀の初めに至りメンダリ・ギライが遂に薩來を取つて其の地を併すに及び、金帳汗國は全く滅亡したのである。

欽察汗の世系





第十章 元時代の高麗

元と高麗との關係 高麗は元の世祖以來之に服屬して其の侵虐を受くること甚しく、高宗元宗の間に和州は既に元の雙城總管府となり、元宗の時崔坦が西京(平壤)を以て元に附き其の兵を請うて之を鎮するや、元は西京を内屬せしめ改めて東寧府となし慈悲嶺を劃して界となしたから、高麗の北部は全く元の有に歸し達魯花赤(Daruqach)即ち斷事官を高麗に置きて之を鎮せしめ、國政を聽斷し軍糧を徵し婦女を求むることが已まなかつたが、忠烈王はよく元に事へて屢々往來し、また鷹坊を置き畝獵を事とし遊宴淫佚に耽つて居つたから、人民は頗る苦しんだのである。既にして元の諸王乃顔が海都に應じ叛きて敗るゝや、其餘黨哈丹(Kadan)が來り侵し鐵嶺を踰えて交州道に入り楊根(京畿道楊根)を陷るゝに及び、忠烈王は之を避けて江都に入り師を元に請ふたから、元は那蠻歹(Namanhai)大王及び薛閣干等をして高麗を援けしめ、力を合せて哈丹を破つた。時に元の世祖が死して成宗が立つたから忠烈王もまた元に請うて位を世子源に傳へた、之が忠宣王である。然るに忠宣王は多く舊章を更改し專擅にして元の命令を用ひなかつたから、成宗が之を惡み未だ一年ならずして之を廢し忠烈王をして位に復せしめたが、是より王は群小に狎昵し宴樂に耽りて政事を顧みなかつた。初め元は忠烈王を

冊して征東行中書省事となしたが、是に至りて王が其の衆を服する能はざるを知り、濶里吉思を遣はして征東行省平章政事となしたるに、また舊俗を變せんとして人民を和輯することができなかつたから罷められたのである。時に世子忠宣王は元に赴きて宿衛し居たるに吳祁、石天補、宋璘等が之に乗じて王父子を離間したから、左中贊洪子藩が吳祁等を執へて元に送つたが、王は尙ほ世子の國に歸ることを恐れて之を阻み、また其の妃薊國大長公主を瑞興侯瑄に改め嫁せんとするや、元は刑部尙書塔察兒等をして來り諭さしめ遂に宋璘等を囚へて歸つた。後王の元におもむくや王維紹、宋邦英等がまた頻に世子を譖したから、洪中藩は中書省に至りて其の罪を言ひ王維紹等を囚へしめたのである。會々元の成宗が死して繼承の争起るや、世子は成宗の姪愛育黎拔力八達と謀りて武宗を立て定策の功を以て瀋陽王に封せられ、愛育黎拔力八達の旨を奉じて忠烈王を慶壽寺に遷し、王の任する所のものを悉く罷めて瑞興侯及び王維紹、宋邦英等を誅したから、王は唯拱手するのみであつて國政は悉く世子に歸した。既にして忠烈王が死し世子が元より還りて再び位を嗣ぎ忠宣王となつた、時に一三〇九年である。然るに忠宣王は國に居ることを欲せず一三二四年遂に位を其の子忠肅王に譲り、延安君嵩を世子となして自ら燕京に赴き淹留して居たが、元の仁宗が死して英宗立ち鐵木迭兒が政を執るに及び、忠宣王は宦者伯顔秃古思の爲に譖せられて吐蕃に流されて居ること四年、泰定帝の立つに及び赦されて歸り燕

邸に於て死んだのである。既にして贊成事權漢功等が忠肅王を怨んで書を元廷に上つり王を廢して潘王嵩を立てんことを謀り、柳清臣等はまた征東行省を立て、高麗の國號を罷めんことを請ひたるも皆果さなかつたから、柳清臣等は王が盲聾暗啞にして政事を親らせざることを誣奏するに及び、元は平章政事買驢をして來つて之を視察せしめ、其の詐なることを發見して柳清臣等の陰謀は遂に行はれなかつたが、王は是より鬱々として樂しまず位を世子禎に傳へんことを請ひ、元は之を許したから世子が位に即きて忠惠王となつた、時に一三三二年である。然るに忠惠王は元より還り唯日に遊畋を事となすのみであつたから、元は又忠肅王をして位に復せしめたが既にして王もまた政に倦み、出で、外邸に居り、朴青等の妾侍を信任して國を顧みなかつた。此間忠惠王は元にありて丞相燕帖木兒と親密であつたが、燕帖木兒の死後太保伯顔が王を禮すること薄く、會々忠肅王が死するに及び王は歸つて位を襲がんことを求めたるも寝めて奏せず潘王嵩を立てんとし、政丞曹頤及び蔡阿が之に乗じて嵩と謀り王宮を襲ひ敗れて殺されたのである。是に於て元は一三三九年遂に忠惠王をして位を嗣がしめたるも讒者が尙絶えなかつたから、斷事官頭麟等を遣はして王を執へ歸り伯顔は陰に曹頤の黨を助けたが、會々伯顔の貶竄せらるゝに及び王は釋されて位に復することができた。然るに忠惠王は荒淫無道であつたから元使大卿朶赤が來り王を縛して歸り、之を揭陽縣(河南省)に流せるに途中岳陽縣(湖南省)に至りて死んだの

である。忠惠王の後忠穆、忠定の二王が皆幼冲にして立つや、母后が制を專にして康允忠、辛裔、田叔蒙、鄭思度等が事を用ひ、殊に忠定王は狂惑無道であつたから、一三五二年元は之を廢して忠惠王の母弟顯を立てた、之が恭愍王である。恭愍王は位に即きて精を勵まし治を圖つたが、時に元は政衰へて豪傑四方に起り丞相脫脫の高郵(江蘇省揚州府高郵縣)を征するや、使を高麗に遣はして兵を徵したから王は廉悌臣、柳濯等をして軍士二千餘人を率ゐて之を助けしめたるも元に屈從することを欲せず、其の衰運に乗じ兵を出して鴨綠江以南雙城以北の地を收復し、遂に征東行省理問所を廢し、元の年號を停め、舊官制を復し、辮髮の俗を革め、更に印璫、姜仲卿等をして鴨綠江を渡つて婆娑府(盛京省奉天府東南境)を攻め破り、また柳仁爾をして雙城を陥れて咸州以北を恢復せしめた。元の順帝は之を聞いて大に怒り斷事官撒廸罕を遣はし來りて之を責めしめたから、恭愍王は已むを得ず印璫を斬つて之に謝し、使を遣はし上書して従前干涉の諸弊を除き並に雙城三撒等の地を收復せんことを請ひ、高麗はまた暫く元に服屬することゝなつたのである。既にして元には紅巾の賊が起りて河南の州縣を陥れ、其の將毛居敬等が兵を率ゐて鴨綠江を渡り義靜麟の諸州を陥れた、高麗にては之を紅頭軍または紅賊といひ、安祐、李芳實等が撃つて之を走らせたが、後幾許もなく賊將潘誠、沙劉、關先生等が兵十餘萬を率ゐ、再び鴨綠江を渡つて朔州、泥城(平安道昌城府)に寇し崑嶺の柵を破つたから恭愍王は太后を奉じ南幸して福州(慶尙道安東府)より尙州に至り賊

軍が遂に京城を陥れた。是に於て鄭世雲が總兵管となり安祐、李芳實、金得培等の諸將を督して大に紅頭軍を破り、沙劉、關先生等を斬つて京城を復し賊は遂に鴨綠江を渡つて去つたが、鄭世雲、李芳實等は王の寵臣金鏞の忌む所となりて殺されたのである。此の時に當り納哈出がまた元の衰弊に乗じ叛いて瀋陽(盛京省奉天府)に據り、行省丞相と稱して高麗の北邊に寇したが李成桂の爲めに破られ後遂に好を通じた。かくて高麗は遂に元に服さなくなつたから元もまた當時燕京に居たる忠宣王の庶子德興君塔思帖木兒を立て、高麗王となさんとするや、是より先き崔湍が罪を得て元に奔り丞相樞密監及び宦者朴不花に諂事して居たから、遂に恭愍王を讒構し、また遙に王の寵臣金鏞に通じて内應をなさしめ、遼陽の兵一萬を請うて德興君を納れんと謀つた。時に恭愍王は尙州より歸りて城南の興王寺に居たから金鏞が遂に反し、其の黨を遣はして王を圍むや密直使崔瑩、知都僉議安遇慶等が京城より來り援ひ、大に賊を破りて金鏞を誅し、次で崔湍が德興君を奉じ兵を率ゐて至るや崔瑩、安遇慶等がまた撃つて之を破つた。既にして樞密監及び朴不花が罪を獲て貶竄せらるゝに及び、順帝は恭愍王の罪なきを知りて位に復せしめ、崔湍を執へて高麗に送り之を誅せしめたのである。是より後元は益々衰へて高麗との關係は漸く薄くなり、一三六八年明軍が燕京に入りて順帝は遂に北走するに及び、高麗は始めて元の壓制を免かるゝことを得たのである。

高麗の儒學 高麗の國初には儒學が盛でなかつたが、成宗の時に至り經學博士を置きて頗る其の力を盡さしめ、文宗の時に至り崔冲が九齋を作りて諸生を教育したから海東の孔子と稱せられ、王もまた國子監に至りて孔子を拜し百王の師として之を尊崇した。また睿宗は學生を宋に遣はして留學せしめ、親ら學士と經籍を講論し、學校を設けて生員を置き、禮樂を以て俗を成さんと圖り、仁宗は諸生の老莊の學を修むるを禁じ、尙書戶部をして五典を民に教へしめ、閭里の兒童に論語孝經を頒賜し、また儒臣をして經を講せしむること睿宗の時と異ならなかつたのである。其の後學問が漸く衰へて詞賦文章が頗る盛になつたが、忠烈王の時に至り大成殿を造りて先聖に謁するに及び儒學が再び興隆した。然るに高麗には未だ程朱の學を講ずるものがなかつたが、忠肅王の時白頤正が元に赴き程朱の學を修めて歸り、李齊賢、朴忠佐が之に従ひて學び、權溥は朱子の四書集註を刊行し、禹倬は程子の易傳に精しくして生徒に教授するに及び、性理の學が始めて行はるゝに至つたのである。其の後李穡、尹澤、權近、李仁復、金九容、鄭夢周、朴尙衷、朴宜中、李崇仁等の學者が輩出して性理の學は益々盛であつたが、著書は甚だ少なくて僅に尹彦頤の易解、權近の入學圖說、五經淺見錄の類に過ぎなかつたのである。

高麗の文藝 光宗の時科擧を行ひて士を取るに至りてより文學が漸く興つたが浮華に流れて實徳衰

へ、成宗の時に至り學校を建て修書院を置きたるも顯宗南遷の亂ありて未だ振はず、文宗の時崔冲が九齋を作りて儒學を教授する傍ら詩文を課したから、科擧に應せんとするものは皆就いて學ぶに至り、是より文學が鬱然として起つたのである。仁宗、肅宗、睿宗の諸王は屢々群臣と宴を設けて詩を賦し、毅宗に至り其の風益々盛にして武將の憤怨を招き、王は遂に弒逆の禍に遭ひて文冠を戴くものは皆殺され、文運の一大災厄を招くに至つた。其の後李奎報、琴儀、李公老、兪升旦等の如き詩文に巧なるものが輩出したるも、文運一時衰頽して學者は大抵僧侶に就いて章句を學ぶに至つたといふことである。忠烈忠宣の二王は皆文學を好み、忠宣王は元に赴きて名儒學士と交遊し、李齊賢が其の間に周旋して文名最も盛であつた。恭愍王に至りては鄭道傳、尹紹宗、權近等の如き文學の士が多く輩出し、其の詩文もまた觀るに足るものが甚だ多く、其の盛況は決して中葉以前の及ぶ所ではなかつたのである。然しながら高麗一代を通じて深く力を著述に用ひて書籍を完成したるものは僅に數十種に過ぎない、即ち歴史にては金富軾の三國史記を最も著名とし、詩文にては李奎報、李崇仁、李穡、鄭夢周等の集の如きが最も後世に行はれて居る。書籍の印行は其の初めを詳にせずと雖も、成宗の時大藏經を刊行するに宋本及び契丹本を求めて校合した、後世之を高麗本といふのである、是によりて印刷の術が風に行はれたることが知れる。また恭讓王の時に書籍院を置き鑄字を以て書籍を印行したといふ

ことであるから、當時既に活字印刷の行はれたることが明かである。

高麗の佛教 高麗の太祖は深く佛教を崇信して卽位の初め印度の僧摩睺羅 (Malora)、唵哩罽日羅 (Sri Vajira) の來れるを迎へ、且つ國を有つを以て佛力となし、其の訓戒を述ぶるに當りて佛事をいへること多く、成宗は僧徒を以て國師、王師となし、徳宗以後の諸王は大抵菩薩戒を受け、まゝ道場を設け、寺院に幸し、僧侶に布施したること甚だ多く、仁宗以後の諸王は皆灌頂を行つた。是より先き成宗の時僧三十餘人を宋の杭州に遣はして永明寺の智覺禪師に就いて學ばしめた、之を高麗に於ける禪宗の始となすのである。文宗の時其の子煦、鏡を僧となせるに煦は性聰慧にして始めて華嚴を修め旁ら儒術に涉り、後宋に赴きて法を求め還るに及び釋典經書を遼宋より購ひ來りて之を刊行し、また天台宗を創めて其の寂するや大覺國師を贈られた。是に至りて佛教は益々興隆したが、就中禪宗が最も盛に行はれたのである。

第十一章 印度の形勢

イスラム教徒の印度侵入 亞拉比亞人は哈利發オスマン (Osman) の時六四七年ボムベイ (Bombay) 海岸のタナ (Thana) 及びプロアク (Proach) に遠征軍を送り、次で六六二年及び六六四年また侵入したるも永久の結果を得なかつた。其の後亞拉比亞の將軍ムハムマド・カシム (Muhammad Kasim) が兵を率ゐて信度 (Sind) に進み、勝利を得て一時其の勢力をガンガ (Ganges) 河畔に樹てたるも、其の死後また之を失つたのである。かくてイスラム教徒の印度侵略は遂に失敗に終つたが、後三百年を経て中央亞細亞に哥疾寧 (Ghazni) 朝の興るに及び、九七七年以後イスラム教徒がまた侵入し來りて遂にパンジャブ (Panjab) 國境の諸州を併呑するに至つたのである。

阿富汗人の侵略 初めラホール (Lahore) のシャイバル (Jairal) 王が阿富汗 (Afghan) 人の入寇を憤り、九七七年兵を進めて阿富汗斯坦 (Afghanistan) に入るや、哥疾寧王セブクテギン (Sebuktegin) が邀へ撃つて之を破り、次で印度に侵入しシャイバルを破りて償金を取り、兵をペシヤワル (Peshawar) に駐めて還つた。セブクテギンの子マームード (M Mahmud) に至りてまた兵を印度に出したから、ラホールのシャイバル王、其の子アナンドバル (Anandpal) 及びラジプト (Rajput) 族のヒラ・ラエ (Hira Rao)

王等が諸王侯を糾合して之に當つたが、マームードは一〇〇一年以後二十五年間に十七回印度に侵入してパンジャブの諸州を略し、東は遠くカノージ (Kanauj)、南はグジュラト (Gujerat) に至る北印度の地を攻掠して到る處市府を焚掠し殿堂偶像を破壊した、是に於てパンジャブは爾後百五十年間哥疾寧朝の領土となつたのである。此の頃基華 (Kilva) の人アルビルニ (Albiruni) はマームードに従ひて印度に來り、印度の學術及び科學を研究して第十一世紀に於ける印度に關する著書を遺して居る。哥疾寧朝は一五一年ゴール (Ghor) 朝の破る所となり、哥疾寧王クスル (Khusru) 一世は印度に遁れてラホールを保つたが、其の子クスル二世に至り一六八年また之を失ひ、ゴール家のシャハブ・ウッヂンムハマド (Shahab ud-din Muhammad) が親ら兵を率ゐて印度に侵入したから、印度の諸王侯は防戦して之を却けた。其の後一一九一年に至りムハマドはデリー (Delhi) に遠征して敗れ、ラホールに退きて敗軍を集めまた阿富汗斯坦より來れる援軍を得て一一九三年再び印度に進軍した。時にラジプト族の王侯中に内訌があつて舉國一致して外敵に當ることができなかつたから、ムハマドはパンジャブを掃蕩し次でデリーを降してアジメル (Ajmere) に進み、一一九四年カノージを陥るゝに及び、北印度のラジプト諸族は敵に降ることを層とせず、其の郷地を棄て、印度河の南方に移り、今に至るまでラジプタナ (Rajputana) の名を有する地方を占領したのである。次でゴールの將バクチャル・キルジ (Bakhtiyar

Khilji) が一一九九年ベハル (Behar) を取り、一二〇三年下ベンガル (Bengal) を征服するに及び、印度河口よりガンガ河口に至る印度の北部全體はムハマドの領土となつた。然るに一二〇三年阿富汗國境の山地に住するガクカール (Ghakhar) 族が侵入し來りてラホールを抜きパンジヤブを劫掠して歸つたが、次で一二〇六年其の一部がまた印度河畔に侵入し來りて阿富汗人の陣營を陥れ、天幕の裡に眠れるムハマドを殺したから其の部下の諸將が各々自立して印度諸地方の君主となり、ゴール朝の領土は遂に分裂するに至つた。是に於て花刺子模王ムハメドが此の機に乗じて阿富汗斯坦を攻め、一二一五年全く之を征服して遂にゴール朝を滅ぼしたのである。

奴隸朝 一二〇六年ゴール朝のムハマドが印度河畔の陣營中に於て殺さるゝや、其の部將クツブ・クツデン (Kutub ud-din) が德里に於て獨立して印度王と稱し、信度より下ベンガルに至る地方を領して一二九〇年に至る王朝を開いた。クツブ・クツデンはもと土耳其人にして奴隸より起り、其の繼承者もまた武勇と智謀とによりて奴隸より王位に登つたものが多い、故に奴隸王朝と稱せらるゝのである。クツブ・クツデンは一二一〇年死して其の子アラム・シアー (Arum Shah) が立てるに、クツブ・クツデンの奴隸であつたアルタムシ (Altamsh) が之を擊殺して王位に登つた。奴隸王朝は創業の時より既に其の主權を危くする三大敵があつて遂に之が爲めに亡びたのである。三大敵とは第一に其の臣

下たるイスラム教の諸將即ち諸州の知事、第二に印度人の叛亂、第三に中央亞細亞より侵入せる蒙古人の攻撃である。アルタムシは下ベンガル及び信度に獨立せるイスラム教の知事を征服せんごしたるが、會々中央亞細亞より蒙古人の侵入するに遭ひ、纔に其の領土を失はざることを得て其の目的を達することができなかつた。此の時成吉思汗は印度を通過しなかつたから、印度は幸に其の蹂躪を免れたのである。アルタムシの死する前に印度人は一時紛争を熄め、奴隸王朝に屬する諸州の知事はパンジヤブ、西北諸州、オウド (Oud)、ベハル、下ベンガル、アジメル (Ajmere)、ガリオール (Gariole)、マルワ (Malwa)、信度を包含するヴィンヂヤ (Vindya) 山以北の地方を管轄して居た。アルタムシは一二三六年死して其の女ラジャ・ベガム (Rajya Begum) が嗣ぎ、學問を好んで勤勉活潑であつたが、アビシニア (Abyssinia) 人にして奴隸なる其の既司を愛したる爲め、諸將の憤怨を招き在位三年半にして廢せられ次で殺されたのである。其の後二代を経て一二四六年アルタムシの末子ナシル・ウツデン (Nasir ud-din) が位に即きたるに、蒙古人が侵入したから宰相バルバン (Balban) はパンジヤブに赴きて之を防止した。バルバンはまたジャムナ (Jamma) 河の南に於て印度諸王と戦ひ、メワト (Mewat) にラジプト族を破りて再びマルワを取り、一二六七年遂にナシル・ウツデンに代はりて位に即き、勇猛なるも嚴峻に失して慈心なく、メワト (Mewat) の森林に據れるラジプト族を討ちて十萬人を虐殺し、また叛